

道集經

特 259
304

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5

始

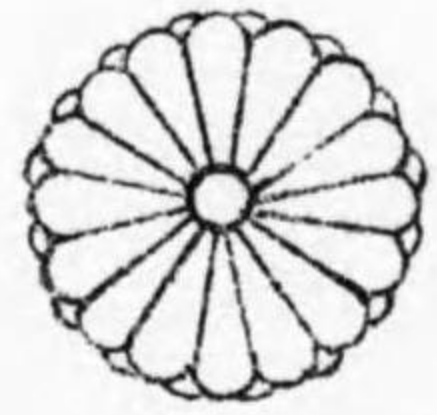


教育勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナ
リ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ德兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル
ハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母
ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣
メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉
シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民
タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ
所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ
拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽



特 259
304.



經



は し が き

道の行はれざるは社會機構の根本の正しからざるがゆゑなり。されば大聖釋迦牟尼世尊は四十餘年施教の末、特に法界の國體を説き、我等求道者の據るべき所を示したまへり。一聖（本佛）、諸賢（諸菩薩）、衆凡（一切衆生）皆法に遵ひ分を守り、心を一にして世を清淨莊嚴するの姿なり。無量義經及び妙法蓮華經に於て顯説せらるる所なるが、支那文のまゝ我國に弘通せんは不便なれば、予之を翻譯して一卷三十五章に編し、名けて蓮華經と曰ふ。文意ふと雖も意義自ら明確にして、曖昧錯雜、牽強附會なる宗派學說の侵す能はざる所なり。讀者容易に佛教の規模を認識し、思想善導の原理を領解することを得ん。

昭和六年八月二十八日

岩 野 直 英

蓮華經本文正誤 (龍頭註解は後日の機會に正誤する)

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
一	七(三所)	葉 <small>は</small>	葉 <small>は</small>	七〇	九	我	我	目次二	一〇	全前	全前
三	八一(八所)	剗 <small>は</small>	剗 <small>は</small>	七五	六	我	我	一九五	五	龍人	龍神
一七	一一	剗 <small>は</small>	剗 <small>は</small>	一〇〇	七	信み	信み <small>した</small>	二〇〇	一一	正憶念	正憶念
二〇	一一	來至住とて	來至住成とて	一一二	一一	大世界	大千世界	二〇一	二	罵言	罵詈
二七	一一	刀	力	一一三	五	思し	思し	二〇六	一〇	險	險
二九	一四	現すと實語	現し疾く大覺を成せしむと實語	一一四	八(三所)	思し	思し	二二四	九	億	億
三六	二	實習	實智	一一三	一三	平生	平正	二四〇	八	昔本佛常住を説きし時	今本佛常住を説きしに
四六	一三	來至住する	來至住成する	一三三	一三	曜	曜	一一	一	說法せり	說法するの力あり
四八	二	眞實	眞實	一四一	九	聞 <small>き</small>	聞 <small>き</small>	二四六	一一	聞	聞
五四	一二	恭	恭	一四四	四	具足を	具足の	二六一	一三	吹	咲
六三	七	法	道	一九二	三	道の證	道の證、三千の衆生檢記さる	二八二	八	師	師

蓮華經目次

第一章	大會讚佛	一
第二章	無量義	九
第三章	瑞光問答	一七
第四章	諸佛所成の法、知見方便力	三三
第五章	舍利弗敬信を誓ふ	三八
第六章	諸佛出世の一大事因縁、一佛道、蓮華	四二
第七章	舍利弗の領解	六五
第八章	舍利弗授記さる	七〇
第九章	火宅三車の譬論	七五
第十章	四大聲聞の領解、窮子の譬	九六
第十一章	一雨草木の譬論	一二

第十二章	四大聲聞授記さる、王膳の譬	一一八
第十三章	師弟宿世の因縁	一二五
第十四章	化城の譬論	一三四
第十五章	五百の弟子授記さる、繫珠の譬	一五二
第十六章	二千の弟子授記さる	一六二
第十七章	持經訓、高原穿井の譬論	一六七
第十八章	寶塔虚空會、證明佛	一七六
第十九章	持經者勸導の救	一八四
第二十章	大願堅固の鑑、提婆達多授記さる	一八八
第二十一章	疾得無上佛道の證	一九二
第二十二章	持經誓願	一九七
第二十三章	勝難行則、譬中明珠の譬論	二〇三
第二十四章	無數の大菩薩地中より涌出す	二一七

第二十五章	彌勒菩薩は涌出の菩薩の因縁を問ふ	二二〇
第二十六章	佛の久遠最初の弟子	二二二
第二十七章	彌勒菩薩の質疑急なり	二二六
第二十八章	本佛常住、良匠の譬論	二三〇
第二十九章	大會得益し、彌勒疑を解く	二四〇
第三十章	一念信解の功德を説き、持經の功德に及ぶ	二四四
第三十一章	一念隨喜の功德を説き、持經の功德に及ぶ	二五一
第三十二章	持經者六根清淨莊嚴す	二五七
第三十三章	不輕菩薩の持經	二六八
第三十四章	本佛の威容、總勸持	二七六
第三十五章	大法蓮囑	二八〇

阿難一多聞第一と稱せらる。經
の結集は多くこの人の闡記に
由る。佛の從弟、提摩達多、
羅睺羅一密行第一と稱せらる。
佛の長子
迦葉一離奢第一と稱せらる。佛
の直弟、截經結集の委員長、
憍陳如一拘提とも云ふ。鹿野五
僧の一人
孫陀羅難陀一摩訶波闍波提尼僧
の子、身長一丈五尺、
阿難漢一梵語アルハン、體の四
位中の最高位、四位は阿難漢、
阿難漢、阿難漢、阿難漢、
憍瞿一恒道の障者となる一切の
迷苦、自疚心強きたる起る僧、
瞿曇一佛の聲、即ち教を聞くゆ
ゑに體を一般に瞿曇と云ふ。但
し迷信の卑位を以て云ふ瞿曇は
十界中の第四位聖者なり。十界
とは地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、
人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛
摩訶波闍波提尼僧一摩訶夫人の
聲を波、淨飯王の妃と成る。尼
楯中の主たり。

有りゆる結を脱して、自在を得たる人々なり。また初學了學の聲聞二千人、佛
の姨母摩訶波闍婆提尼僧、羅睺羅の母耶輸陀羅尼僧等あり。各眷屬と俱に佛に
侍從せり。
三 八萬の大菩薩あり。その名を文殊師利法王子、大威徳法王子、無憂藏法
王子、大辯藏法王子、彌勒菩薩、導首菩薩、導師菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩、
華幢菩薩、華光幢菩薩、陀羅尼自在菩薩、觀世音菩薩、大勢至菩薩、得大勢菩
薩、常精進菩薩、不休息菩薩、寶掌菩薩、寶積菩薩、勇施菩薩、寶月菩薩、月
光菩薩、滿月菩薩、大力菩薩、無量力菩薩、越三界菩薩、跋陀婆羅菩薩、寶印
首菩薩、寶杖菩薩、毗摩訶羅菩薩、香象菩薩、大香象菩薩、師子吼王菩薩、師
子遊戲世菩薩、師子奮進菩薩、師子精進菩薩、師子威猛伏菩薩、勇銳力菩薩、
莊嚴菩薩、大莊嚴菩薩、と曰ふ。皆法身の居士にして、身は戒、定、慧、解脱、
解脱知見より成り、心は禪寂、常に三昧に在り、恬安憺怕無爲無欲にして、顛
倒亂想に侵さるることなく、之を守つて動ぜざること億百千劫、無數の佛を供
養して、衆徳の本を植ゑ、常に諸佛に稱歎され、慈を以て身を修め、よく佛慧

王(佛)の嗣子と見らる。法
法身の大士一全身に法の悟が浸
み透つて、勝れたる菩薩。
戒定慧解脱觀智見一涅槃は皆
一種の法である。戒は戒律修行
者の警戒すべき事なり。定は
禪定一心靜慮なり。慧は智覺
修習なり。解脱は戒定慧的に
修習成り、解脱知見は解脱
の結果主する力なり。
聖者一種は梵語聖者、眞如な
り。寂は平靜、清澄なり。
三昧一梵語サマーデー、深き專
念不動の狀態にして偉大の力を
活らす。
劫一長時間を稱する單位、例令
は四十里四方の大空に雲を滴
て二十五に一粒を除くとしその
雲の除き盡くる時間を一劫と曰
ふ。其の外にも説明あり。
供養一奉仕。物又は行を以て相
手の心に満足と興ふる事。
徳本一衆徳の母。眞心、信心
徳本に入り一佛の智慧の充滿せ
る場所即ち佛道に入る。
陀羅尼一梵語ダーラニ、能く放
び持つがゆゑに得る所の威力力
涅槃一梵語ニルワナ、一切の
人間苦を脱し、不生不滅を悟れ
る境地
十二因縁一人生流轉の因縁を十

に入り、大智に通じ、名聲普く聞え、諸の根、性、欲を知り、無礙辯才的陀羅
尼を以て、巧に諸法を説き、よく無量の衆生を濟度す。先づ微滴を墮して、欲
塵を流し、涅槃の門を開いて、解脱の風を扇ぎ、世の惱熱を除き、心の清涼を
致し、次に十二因縁を降して、無明乃至老病死、猛盛熾然の苦聚を拂ひ、而し
て後、無上大法を注いで、衆生の有らゆる善根を潤し、善の種子を功德の田に
布きて、普く一切に道萌を發さす。智慧の日月、方便の時節、大法の事業を扶
疏增長し、衆を疾く無上道に入れ、常住の快樂微妙眞實に、無量の大悲を以て
苦の衆生を救ふことを得さす。これ諸の衆生の眞善知識なり。これ諸の衆生の
大良福田なり。これ諸の衆生の不請の師なり。これ諸の衆生の安穩樂處、救處
護處、大依止處なり。隨處に衆生の大良導師となる、盲のためには眼目となり、
聾割瘻のためには耳鼻舌となり、諸根毀缺せるをばよく具足させ、顛狂荒亂な
るをばよく大正念さす。船師大船師なり、群生を運載し、生死の河を度して、
よく涅槃の岸に置く。醫王大醫王なり、病相を分別し、藥性を曉了し、病に隨
つて藥を授け、よく衆生に服用さす。調御大調御なり、諸の放逸を止むること

れ居るのを示すだけの文學など
ある。

五

胡坐—あぐら坐—印度風俗にし
て、講義の姿勢。
偈—梵語ガーターヤ—詩詞。

偈

一、
五陰盛衰—色受想行識旺盛にし
て、所謂五欲に伴ふ際也

二

因縁ありす—因でも縁でもない
本来のまゝ、
三明—宿命通、天眼通、漏盡通
六通—三明に天眼通、他心通、
神境通を加へたるもの
道場—道の縮目。六通の本道交
るに對し、道場は助道なり。三十
七品あり、即ち四念處、四正勤、四神
足、八正道、五根、五力、七覺支、八
正道、三十七品とす。詳細は都
度註解す。
十力—佛の智力を十種に數ふ。
一、和覺處非處智力
二、知三世業報智力
三、知諸禪解脫三昧智力
四、知諸根勝劣智力
五、知種種阿耨多羅三藐三菩提智力
六、知種種天界智力
七、知一切至所智力

八、知天眼無礙智力
九、知宿命無漏智力
十、知永斷習氣智力

三

壽字—記—寫經吉祥の相
縮攝—
三十二相—丈六、八十、四、二、一、
諸相、眼、耳、鼻、舌、身、意、六根、
諸相、手足、指、掌、指、掌、指、掌、
諸相、八十種好—三十二以外至難には
八十あり

歸依—信じて從ふ。
妙色—立派身と云ふこと妙は円
満具足、色は物質。
歸命—信じて命まで寄せる。
法色身—靈動的なる肉身

梵音—清き音声
四諦—苦、集、滅、道、四種の道と四
項に對して涅槃を標とする教へ方
六達—六達、四に註す。
無漏無礙—迷を離るゝを無漏と
す、因縁を離るゝを無礙とす、
十二因縁研究。
總覺—十二因縁の研究に依り悟
道を進めたる聖者、阿羅漢。
法の清渠—佛慧佛力を涵こる池
同上
總論—十二因縁四諦六達道

慈悲十力無畏より起り

三

六紫金の暉を示し

月旋の毫相日光の頂

浄眼明鏡の如く上下に胸ぎ

唇舌赤紅丹華の如く

額廣く鼻修く面門開け

手足柔順千幅を具へ

臂肘長く指纖く

蹠膝露れ陰根蔽れ

表裏映徹清淨無垢

げに莊嚴の三十二相

されど實には相非相なく

無相ながらに有相の身なり

おのが姿もさあらんと

衆生善根の因縁に出づ

照曜明徹の御姿

紺青の旋髮肉髻の頂

眉睫紺に舒び口頰方正し

白齒四十珂雪の如し

胸は師子臆屬字を表し

腋下掌中に細纒を握り

皮膚細軟に毛右に旋る

細筋の膈脹肉の膊

濁水深ます塵著かず

八十種好を拜みまつる

有相の眼に絶對し

一切衆生を歡喜させ

深心敬禮歸依しまつりて

自高我慢を除き去り

八萬の衆皆共に

思想意識を滅したまへる

戒定慧解脫知見聚なる

梵音雷の如く八種に震ひ

四諦六達十二因縁

受け聞く衆生は意開け

修め習ひて果を進め

無生無滅の菩薩と成り

無礙樂説の辯才あり

法の清渠に遊戲澡浴し

或は水火に出没し

如來の説法は是の如く

我等は共に誓首して

妙色の軀を成せしむ

誓首歸命し上る

象馬調御無着の聖に

難思議妙種法色身に

微妙清淨深遠なり

衆心に應じて説きたまふ

無量生死の結を断ち

無漏無爲の緣覺と成り

或は無量の陀羅尼を得

甚深微妙の偈を説いて

或は飛躍袖足を現じ

方便力身自由なり

清淨の功德思議し難し

時宜の教に歸依しまつる

の故を以て堪へたまふ難言はこ
(論通聖思想の批判の序)

内外に一心にも色にも
法王一佛のこと、佛は國王の王
に非ず法家の玉皇玉皇理王なり。

根に入れり、心の奥底まで御存
知である。
その徳行に勝依、本座に於て阿
羅漢は如何なる修養の人なるか
菩薩は如何なる修行の人なるか
かも説いてあるが主とする所は
講師である。佛の覺ること種
々なり、人の覺ること種々
なり、容易ならざる徳行の指針である
が我等菩薩は佛様の如く成れる
かどうかと尚る心を起す事が本
番の要諦である。

梵音聲に歸依しまつる
五、世尊は往昔無量劫

普く我等天神人

よく諸の捨て難き

捨てて内外に悩みなく

皆悉く人に施し

命にかけて破りたまはず

つひに瞋恚をなしたまはず

心を攝め靜に處ひ

智慧は衆生の根に入れり

今法王と成りたまふ

勤め難きを勤めたまひし

緣諦達に歸依しまつる
衆の功徳を脩したまへり

一切衆生を救はんため

財寶妻子國城を

頭目髓腦に至るまで

諸佛の清淨戒を持ち

刀杖惡口罵詈を受けて

歷劫身を挫いて倦むことなく

遍く一切の道法を學び

かくてぞ自在の力を得て

我等は共に誓首して

その徳行に歸依しまつる

第二章

勝妙の徳、前章の佛の通り佛の
徳は妙が上にも勝れて妙なり、
如來の法、佛は眞如より來ると
て如來と稱し故は眞理をより出
づるとして法と云ふ故に如來の法
とは佛の故なり。但し法の字は
種々用法あり、追つて註すべし。
佛の覺を法と云ふ場合最も多し。
故と云ふ場合は寧ろ希なり。
減度、漸進去
法門、教の科目、佛覺へ導く門

三、學習、修得なり、知るのみに非
ず。

四、一切諸法、宇宙一切の事物値し
格段には人心を指すこと勿論な
り、佛教は物理学や天文学には
非ず。

第二章 無量義

- 一、誰か勝妙の徳に肖りまつるの心を生さざらん。大莊嚴菩薩は八萬の居士と共に、謹みて佛に向ひ、「世尊よ。我等八萬の衆は今、如來の法に就て、問ひ上りたき事あり。恐ながら世尊聽許したまふや否や」と白すに、佛は「善哉善哉、善男子。善く時を知れり、恣に問へ。如來は久しからずして減度に入らん、我が減度の後、一切に疑を餘させざらんがため、問に應じて皆説くべし」と仰せらる。是に於て、大莊嚴菩薩等は共に聲を同うして問うて曰く、「世尊よ。菩薩が世尊の如くに疾く無上覺を成ぜんと思はば、何等の法門をか修行すべきか」
- 二、佛告げたまふ、「善男子。一の法門あり、大覺の直道なり。菩薩もしよくこの法門を學習せば、必ず疾く無上覺を成し得べし」。
- 三、「世尊、その法門を何と名くるや、その義如何、また如何に修行すべきや」。
- 三、「善男子、この法門を無量義と名く。之を修學せんには、先づ『一切諸法

菩薩の十地一十位あり

- 第一地 歡喜地
- 第二地 離垢地
- 第三地 發光地
- 第四地 焰慧地
- 第五地 極樂勝地
- 第六地 現前地
- 第七地 不動地
- 第八地 善慧地
- 第九地 法雲地
- 第十地 法華地

因

當下に端坐一この下座を宿とす
 る。坐禪するけれども六年間坐
 の切りではない。翌日町に出て
 活動したかも知らぬ。
 眞實一ツソ本當ではない。方便
 に對して言ふ。方便では迷に大
 覺を得られた。本當に大覺に到
 る方法を眞實と言ふ。傍説く蓮
 華なり。
 得道得果差別一一定の道を行じ
 相當の修養成績を得る。然しこ
 んな事では何時まで放へても眞

或は暖さを感じ、或は勝れたるを知り、又は世第一と悟り、漸く佛弟子に入り、
 或は苦を脱して聲聞と成り、或は無明生死の因縁を悟りて緣覺と成り、或は大
 道心を發して菩薩の第一地、第二地、乃至第十地に登りき。世尊が往日説かせ
 られし事は已に是の如し。而も今説かせたまふ事と、何等の異なるありて、今説
 無量義のみ、菩薩修行せば、必ず疾く無上覺を成じ得べしと言ふや、この事不
 審なり、唯願くば世尊。一切を慈愍し、廣く衆生のために分別して説き、普く
 現在及將來世の聞法者に疑網餘をからしめたまへ。

五 善哉善哉、大善男子。汝よく是の如き甚深無上大微妙の義を問へり。汝は
 大に世を利益し、人天を安樂し、衆生を拔苦する者なり。これ眞の大慈悲なり。
 如何となれば、汝が正直に不審を佛に問ふことは、自ら疾く無上覺を成じ、亦
 やがて今世來世の一切衆生に無上覺を成就さするの因縁なるべければなり。
 善男子よ。我は道場菩提樹下に端坐すること六年、自らこの無量義を證得し
 て、無上覺を成就せり。佛眼を以て一切諸法を觀するに、一概に宣説し難し、
 諸の衆生性欲不同なればなり。性欲不同なれば應ぜる種々の説法を説さざるべ

の大覺には成れぬ。何とか成る
 なくては(法實(眞實)を説く必要
 を暗示す。但し蓮華は時機熟せ
 ねば説いても受け付けぬから今ま
 で説かざりし。

法一佛の覺の力なり故と解する
 勿れ法を小出しせる場合のみ
 が放なり説法なり。

塵勞一辛苦・煩悩

五人一阿若拘隣等如須菩提
 十力四無所畏太子
 以上蓮華太子出世以來お供
 せし人太子が聲聞菩薩行に究切
 き付けられし時皆去りてあり
 し。

からず。我種々に説法するは方便刀を以てす。而も四十餘年未だ眞實を顯さず。
 この故に衆生の得道得果差別して、疾く無上覺を成じ得る者なかりき。

善男子よ。法は譬へば水のよく垢穢を洗ふが如し。井水、池水、江水、河水、
 溪澗、大海の水、皆能く有らゆる垢穢を洗ふ。我が法の水もまた能く衆生の諸の
 煩惱の垢を洗ふ。さて善男子よ、水の性は一なれども、江河、井池、溪澗、大
 海は各別異なり。法の性もまた是の如く、塵勞を洗除すること差別なれども、
 受くる者の根根性欲異なるがゆゑに、或は僅に暖さを感じずるあり、或は漸く勝れ
 たるを知るあり、或は時に世第一と悟るあり、次で佛の弟子と成り、次第に脩
 學して、聲聞・緣覺・菩薩に進むあり、得道得果同じからず。善男子。水は皆
 洗ふと雖も、井は池ならず、池は江ならず、溪澗は大海ならず。如來の自在の
 説法も亦是の如し。初中後の説、皆よく衆生の煩惱を洗除すれども、初は中
 らず、中は後ならず、言辭は一なれども、義は浅深各々異れり。我樹王を起ち
 て、波羅奈鹿野園に至り、阿若拘隣等の五人のために、四諦を説きし時、諸法
 は本來空寂なり、而も代謝して住せず、念々に生滅す。と説きき。中間同所及

方專大般若菩薩一佛智の高遠を説き、摩訶修行を要すと教ふ信仰を中にとせざるが故に成道の可能に性動ありし。

餘の處處に於て、諸の僧並に衆の菩薩のために、十二因縁六達道を宣説せし時も、諸法は本來空寂なり、而も代謝して住せず、念々に生滅す」と説きき。今此にまた「諸法は本來空寂なり、而も代謝して住せず、念々に生滅す」と説く。善男子。是の如く、初中後の説、言辞は一なるものあれども、義無量なるがゆゑに、聴受の衆生、各その性欲に従つて解異り、得道得果同じからず。

善男子よ。我初の四諦を説きたるは、聲聞を求むる人のためにせるなり。然もこの教を聞きし者は、必ずしも皆聲聞と成らず、八億の諸天は直に菩薩の心を起しき。性欲勝れてありしがゆゑなり。中ごろ、處處に十二因縁を説きたるは、縁覺を求むる人のためにせるなり。然もこの教を聞きて、必ずしも皆縁覺と成らず、性欲勝れたる者は、菩薩の心を發し、劣れるものは、聲聞に住りき。次に方等、大般若、華嚴を説いて、菩薩の歴劫修行を教へしかども、百千の億萬億の人天、無量の衆生は、必ずしも皆菩薩に進まず、聲聞縁覺に住れるもの多かりき。善男子。是を以て知るべし、説は同じけれども、義は無量別異なるがゆゑに、衆生の解異なる。解異なるがゆゑに、得道得果また異なることを。

今日に至るまで、一今までの處では摩訶修行ばかり説いて具體業は示さなかつた。汝が言ふ通り、何時も同じやうな事であつた。この義に於ては、(具體的には)菩薩の實教を顯すけれど、この摩訶般若に及ばない。二言なし。我この般若を究了して居るから、この無量不可思議の境界があるのだ、それが何時でも佛の實力である。

(備考) 原本無量義經に於ては、本師に續いて此界及十方世界六種に變動し天華天寶の供養あり、諸の菩薩隨俗男女各法益を得て皆大道心に起せり。記す、今是經を蓮華經に編入するに、この記事は第三章の瑞相と重複するを以て之を削除せり。

六

(備考) 一 本師は無量義經十功德品の初一部分なるが前品に續くべき性質の別等なれば、因として之を採用す。原本之に續いて突然汝摩訶薩是經復有十不思議功德云々、と言ひ出す句讀は後人の添加文と見ゆ。何れにせよ蓮華を説く以前に十功德を言ふは蓮華經に相應しからず、之を削除せり。所を説かん、一可なりの間ひ方で

善男子よ。我は成佛已來今日に至るまで、大法無量義を演説せるに、未だ曾て苦空、無常無我、非眞非假、非大非小、本來不生、今亦不滅、一相無相、法相法性、不來不去、生住異滅を説かぬことなかりき。この義に於ては佛に二言なし。能く一音を以て無量の義を演べ、普く衆生の聲に應じ、能く一身を以て百千萬億無量無數恒河沙の身を示し、一一の身の中に、また若干百千萬億無量不可思議恒河沙の種々の類形を示し、一一の形の中に、また若干百千萬億無量不可思議恒河沙の形を示す。善男子。是則諸佛不可思議甚深の境界なり。この境界は唯佛と佛とのみ、よく究了したまへる法にして、所詮聲聞縁覺の知らざる所、十地の菩薩もなほ及ばざる所なり。

六 その時に、大莊嚴菩薩は肅然として白す。「世尊よ。世尊の所説は微妙不可思議、甚深甚深、眞實甚深なり。一法の中に一切の法あるがゆゑに、よく諸の衆生を利益す。一を得ることは誠にこれ大覺の直道なり。然れども世尊よ。この事甚だ難し。我等せのてはこの法に向ふべき所を聽かんと希ふ。世尊よ。この法は何所より來り、何所に至り、何所に住して、是の如き無量不可思議力

ある。
諸佛室宅の中より來至住す！こ
れ本章の眼目より法は法は衆生
の道心に至り菩薩の行を助け大
覺を成せしむる。この御語を斷
き得たるは大壯嚴菩薩摩訶薩の思
ひ授けぬ大收獲。本書終りまで
忘れてならぬ華嚴野が蓮華經に
無量義經を採擷するものこの來
至住三字の勝り。
住す！正遍の國に神宿ると云ふ
如き意味のもの

を現すや。

佛告げたまふ。「善男子。汝善く諦に聽け。この法は本諸佛室宅の中より來り、
去つて一切衆生の發道心に至り、諸の菩薩所行の處に住す。善男子よ。この法
は是の如く來り、是の如く至り、是の如く住して、よく是の如きの無量の功德、
不可思議の力あり。衆之に依て疾く無上覺を成す」。

第三章

(高考)一 原本は此からか妙法蓮
華經なり。

結跏趺坐一坐禪の時の特殊の起
脚法なり。曼陀羅經を正し、想
氣を靜め故に制する。
無量義經三昧一無量義の一法に
專念したる三昧

阿鼻地獄一梵語アヴィチ、各世
界の最下方に在り苦難聞まられ
は無間地獄とも云ふ
阿迦尼吠天一梵語マロニシヤ
各世界の最上方に在り、無色究竟
界有頂天とも云ふ
般涅槃一説法終りて心残りなく
逝去さる、こと大往生。
舍利一梵語シマリヤ、靈骨
七寶一金銀珊瑚真珠如意(摩尼)
寶珠等類

第三章 瑞光問答

一 佛は是の如く來至住とて意味深長の語を遺したまひ、そのまま結跏趺坐し
て無量義處三昧に入り、身心不動におはしけり。滿山靜なること空しきが如し。
その時に、天より曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華雨りて、
佛及大衆の上に散じ、佛の世界は普く六種に震動せり。會中の僧俗男女、天、
神、人、非人、及諸の轉輪聖王、大王小王等、皆未曾有を感じ、歡喜合掌して
一心に佛を見上れば、佛は眉間白毫相の光を放つて、東方萬八千の世界を照し
たまへり。各世界は下阿鼻地獄より上阿迦尼吠天に至るまで、照されざる所な
く、この世界の人々は、かの世界に六種の衆生を盡く見、またかの土の現在の
諸佛が法を説きたまふを見、また僧俗男女が諸佛の教を聞き、若は所説の經を
讀誦して、諸の行を修し、各々刀に應じて得道するを見、また諸の菩薩が種々
の因縁、種々の信解、種々の相貌を以て菩薩の道を行するを見、また諸佛が般

皆見る。他の世界に於ても此所と同様な事のあるを見る佛の神力無言の証明なり、実相を照す。茲に經を讀誦してとあるが、お經を讀むことは中々滿願にされない大功な事人の徳説はいけな、經の成文に依れ。

三、親近供養。私淑奉仕、轉依者台。佛の行徳信心の發露である。是等しては一切の修行成就せず。

偈

淫弊したまふを見、又は諸佛滅度の後、菩薩が舍利を奉じて七寶の塔を起つるを皆見ることを得たり。

二、時に、彌勒菩薩は四衆天神が皆この光明神通の因縁を聞かんことを希望せるを知り、思ふやう、佛は今三昧にましますゆゑ、問ひ上るべからず、この不可思議希有の事を誰にか問はん」と。また「文殊師利法王子は曾て無量の佛に親近供養せり、必ずや知ることあらん、我今彼に問ふべし」と。即ち文殊師利に問ふ、「佛の放ちたまふ大光明が東方萬八千の國土を照し、我等はかの國の莊嚴を悉く見る。何の因縁にて、かゝる神變あるや。」

一、文殊師利導師よ

大光普く世界を照し

栴檀香風薫しく

しかもこの土は六種に覆ひ

二、萬八千の東方諸國

阿鼻地獄より有頂まで

佛の眉間白毫相の

天より妙の華雨り下り

地悉く莊嚴す

四衆の歡喜限なし

照されて皆金色なり

六趣輪回の衆生が

善惡業縁受報まで

生れつ死につ往く所
此より悉皆見ゆるなり

三、諸佛が微妙に方便して

甚深の意趣解し難けれど

種々の因縁譬諭をも

眞實の道を示さるるに

何の國にも皆見るなり

四、生老病死に悩む人には

昔諸佛に値ひまつり

勝れる悟を希ふ人には

世のため盡す心より

六達道を説きたまふ

五、文殊師利導師よ

千億限なき中に

無數の菩薩を教へたまふ

清淨柔和の音聲に

法を照し暗を開き

衆生衆ひて聽聞するを

聲聞道を教へたまふ

教を聞きし福ありて

緣覺道を説きたまふ

無上慧を求むる人には

我等が見聞するかの土の事

恒沙の教の菩薩衆が

法を照し。実相を照し眞理を説き、佛の譬を明瞭とする。

眞實の道。佛の說明でよく、覺にはく覺の實踐道。

聲聞道。四聲聞道。十二因縁。

恒沙。恒沙の砂、無量。

佛道のため一佛に成る道佛と同
道を導んがため或は評道持理の
ため
六、
無上の道に求む一佛道の最上を
行はんとする
佛の智慧に當はば一大善功徳を
するには佛の智慧を所有する
要あり、故に之を導んため大
の犠牲を厭はず

八、
思惟一聞思修の内思なり
五通一第一尊高ニ註六通中滿
通を修むる者思惟五通は
深門で滿通のみが佛の道加
である

九、
大道の士一菩薩の道に従ふ人

新より光を放ち一人格の光と俗
にも言ふ、これにも唯して實際
光がさす
修行一願半成立行の地持なり
お経論を修むる者行するのではな
い

- 六、 佛道のため種々行ぜる
或は施行する者あり
碑磔磔礎金剛の諸珍
侍女僮僕を附添はせ
頭目身体妻子をも
惜しからじとて皆捧ぐ
七、 覺の道を門はばやと
捨て、樂土の宮を出て
鬚髮を剃りて僧衣を被
八、 勇猛精進深山に入り
欲を離れて空を觀じ
禪に安んじ合掌して
佛を讚美するもあり
聞いて悉皆持つもあり
- そのあらましを教ふれば
金銀珊瑚眞珠摩尼
四馬の寶車に欄干華蓋
布施して無上の道を求む
佛の智慧に償はば
常に愛する臣妾を
佛所に詣る大小王が
經典讀誦するもあり
佛道を思惟するもあり
深定五通を得るもあり
千萬億種の偈を歌ひ
志念堅固に要を問ふ

- 九、 禪定智慧を具足して
大道の士を引き隨へ
法陸堂々進むもあり
心に甘んずることなく
佛に讚歎さるゝもあり
一〇、 或は身より光を放ち
又は林間に經行し
佛道を求むる者もあり
戒を持ちて威儀を具し
二、 忍辱の力に注し
皆よく堪へて佛道を
戲笑懸震なる輩を避け
念を攝め萬億歳
美膳飲食種種々湯藥
- 種々の譬論もて説き教へ
魔の兵衆を打ち破り
天人に恭敬さるれども
寂然として黙に行じ
地獄を濟ふ者もあり
不睡不眠に精進して
明珠の如く清淨に
佛道を求むる者もあり
智上慢の意罵挫打も
求めて止まぬ者もあり
智者に親み一心に
佛道を求むる者もあり
千萬無價の上衣服

衆僧一諸元主

寂滅法相一法の相は寂滅何とも
のんとも説明出来ぬ、中正平等
虚空の如し、起心相應、

幢幡一はたほこ

天の樹王一切利天の波利質多樹

智慧神刀カ一勿論然り、実物で

梅檀の寶舎殊好の卧具
佛及衆僧に

心を盡し歡喜して

一三、或は寂滅法相に入り

虚空の如しと觀じつゝ、

種々に衆生を救済し

一四、又は佛の滅度の後

無量恒沙の塔を起つ

一々の塔に千の幢幡

諸の天神人非人は

舍利の塔廟を嚴飾す

天の樹王の忽に

五、佛の眉間の一淨光に

種々の殊妙の顯るゝは

豐盛の園林清淨の浴池を
布施供養して厭なく

佛道を求むる者もあり

諸法は本來二種なく

一切無著の妙慧して

無上の道を求むるあり

菩薩は舍利を供養して

高五千里廣二千里

珠の幔幕金の鈴

香華を供へ樂を作し

國內自然に殊好にて

華さき匂ふが如くなり

無量の世界皆照され

佛の希有の智慧神刀カ

あつても無くとも構はぬ、見た
物は真理の通りである。神刀で
見せられた。

大法一無上道の根據たる大法則
本經説く所の蓮華がそれなり
授記一佛道成就を保證し、成佛を
許す豫言
何事ぞ一彌勒は知らずして問ふ
のでは無く文殊師利の答へりも
豫應して居たろう、會賢全部の
爲に問ふのである。

妙法一諸法実相佛留まり、説明
は不可能なれど蓮華大法を開展
すればその中に見聞することを得るもの

我等は感歎未曾有なり

この瑞相の因縁を

我等を歡喜させたまへ

一六、何をか利せんと思しめす

我等に授記したまはんとや

國土に諸佛を見上る

見よ見よ文殊師利菩薩

解説如何にと待ちわぶるを

佛子文殊よ願くば

説いて衆疑を解決し

大法を説きたまはんとや

衆賢清淨莊嚴の

いみじき相は何事ぞ

四衆天神に者を瞻て

三

文殊師利菩薩は、彌勒菩薩及諸の居士に語る。「善男子よ、我惟ひ付るに、

世尊は今大法の雨を雨し、大法の螺を吹き、大法の鼓を撃ち、大法の義を演べ

んと思すならん。我は過去の諸佛の所に於て、かゝる瑞相を見上りしが。佛は

この光を放つて諸の佛土の莊嚴を照明ありて後、大法を説きたまひき。今この

光明も亦、佛が一切世間難遭難信の妙法を我等に見聞させんと思すためなるべ

し。

四

四 無量無邊不可思議劫の昔、佛在^たしき、日月燈明如來佛世尊と號す。法を説いて衆生を導きたまふに、初中後の三段あり。その義深遠、その語巧妙、純一無雜、具足清淨なり。初段には、四諦を説き、聲聞を志す人に、生老病死の苦縛を脱して、涅槃を得させ。中段には、十二因縁を説き、緣覺を志す人に、無明生死流轉の理を悟らせ。後段には、六達道を説き、菩薩を志す人に、無上道に於て、本智を啓發させたまひき。次に佛在^しき、また日月燈明と名く。次にまた佛在^しき、同じく日月燈明と名く。是の如く二萬億の佛皆日月燈明と號し初佛後佛、等しく初中後の三段に法を説かせたまひき。

最後の日月燈明佛が、轉輪聖王として在家の時、八王子ありき。一を有^う意と名け、二を善^{ぜん}意と名け、三を無量^{むりやう}意と名け、四を寶^{ほう}意と名け、五を增^{ぞう}意と名け、六を除^ぞ疑^ぎ意と名け、七を響^{きやう}意と名け、八を法^{ほふ}意と名く。各四天下^{しやうてん}を領して、威徳自在^{いざい}なりしに拘らず、父が無上覺を得たまひしを聞き、皆榮位を捨て、出家し、父に従ひき。この王子は過去千劫の佛の所に於て、已に善本を植えたる因縁ありて、疾く大道の心を發しき。

大道の心一師の如く二行せんとする心。佛教を守つてその教體に自己の徳を養ふとする心とは大に異なる。

五

因^{いん}つて、補助せしめて、要するに菩薩の活動なしには蓮華は演じ難し。
妙法蓮華教菩薩法解所護念一蓮華なり前後に附したる句は蓮華を形容又は説明するの文、妙法を宛せたる蓮華爲蓮行の訓練所たる蓮華佛が最も大切に護念したまふ蓮華。蓮華とは佛の法界の國体思想なり。第六章より華を追ひて漸々に分る。俗に法華とあるは法の華の意ではなく華に

日月燈明佛は、久しく種々說法ありて後、諸の菩薩のために、無量義と名くる法門を説かせられ、説き已つて、大衆の中に於て結跏趺坐して、無量義處三昧に入り、身心不動^{ぶどう}に在^あり。この時、天より種々の妙華雨りて、佛及大衆の上に散じ、佛の世界は普く震動せり。會中の僧俗男女、天神、人非人、皆未曾有^{むじやう}を感^かじ、歡喜合掌して、一心に佛を見上れば、佛は眉間白毫相の光を放つて、徧く東方靄八千の三千大千世界を照したまへり。而して照されたる國々の有様は、今見る所の諸の佛土の如く、また二十億の求道の士が、光明普く照すを見て、その因縁を知らんと希望せしことも、また今日の衆の如くなりき。

五 時に菩薩あり、妙光^{めうかう}と名く、八百の弟子あり。日月燈明佛は、三昧より覺め、妙光菩薩に因^よつて、妙法蓮華教菩薩法佛所護念と名くる大法を演説し、六十劫の間、座を起たせたまはず、衆もまた一處に坐して六十劫なれども、身心不動、佛の說法を聞くこと、一食^{いちじやく}頃^{けう}の如く請^{けい}ひ、一人も懈^{けい}倦^{けん}を生ずる者なかりき。
日月燈明佛は、蓮華を説き已り、諸の天神、及沙門、婆羅門等を網羅せる大

妙法蓮華の巻であった。

佛法を授け持す一教を持ち、法力を授けて實踐し、師教を履かす。蓮華の中に一蓮華と云ふ治ける。思想體内には師住したまふ。蓮華を持つ者には佛現在なり、今別れを悲しむなかれ。妙光等一妙光が先驅なるゆゑ、妙光等に言へど徳藏も告げ。

無量壽佛一第二十八章に再びこの佛名出づるの佛が標榜とある。諸聖一聲聞緣覺菩薩を含む諸聖

衆の中に於て、如来は今日中夜に於て滅度に入るべし。と宣はせらる。衆は聞いて皆深く悲めり。徳藏と名くる菩薩あり。佛諸の僧に告げたまひしは、この徳藏菩薩は、よく佛法を授持す。わが滅度の後にも、常に我を蓮華の中に見ることを得て、大道を行じ、將來必ず我が如く佛となり、號して淨身如来佛世尊と曰はん。と。授記し已つて、妙光等にこの大法弘通を囑し、中夜辭に滅度に入らせたまひき。

その後、妙光菩薩は蓮華經を持ち、八十劫の間、人のために解説せり。佛の八王子は皆妙光を師とし、よく無上道に堅固なりき。この諸の王子は、その後無量百千萬億の佛を供養し、法師となりて、蓮華を持ち、大道を行じ、轉次に佛と成られけり。最後の佛を燃燈佛と曰ふ。皆諸聖の師として、大に衆生を利益したまふ。また妙光の八百弟子の中に、求名と名くる者あり、常に各利に貪着し、幾度も教經を讀誦すれども通利せず、多く忘却せるを以てこの名あり。されどこの人は、妙光に教化され、爾來漸々に菩薩の善徳を積み、無量百千萬億の佛に値ひまつり、供養、恭敬、尊重、讚歎して、遂に授記さるゝを得たり。

是を以て惟ひ付る。妙光の説の如きを宿世因縁と云ふ。事實を説き理窟を言はずに結論に達むは佛敎經典にもあること。平易にして同時の語になんを脱服せしむる巧妙なる詠法なり。

六

六 諸の善男子よ。その時の妙光菩薩は豈に異人ならんや、我文殊師利なり、求名菩薩はこの彌勒なり。さて今の瑞光は、我が先に見しものと異らず。是を以て惟ひ付る。今日の如来も必ず妙法蓮華教菩薩法佛所護念と名くる大法を説かんと思すなるべし。

- 一、思ひぞ出づる過去無量劫 日月燈明佛世尊は 佛慧に導きたまひけり
- 無量の菩薩を教化して 微妙の法門を説かせられ
- ある時佛は無量義とて 諸佛室宅の中より來り
- この法は甚深難解 菩薩所行の處に住して
- 一切衆生の道心に至り 寶語と思しく聞えしが
- 不可思議の力を現すと 乃至日輪の出でんとし
- 衆には眞寔定かならず その體未だ乘山に
- 光西山に及べども 隠れて見えぬが如くなりき
- 二、佛はそのまゝ結跏趺坐し 無量義處三昧に入りたまへば

天の華降り天鼓鳴り
 佛の眉間白毫相の
 國に普く輝きて
 生死業報の有様まで
 照されたりし國を見れば
 衆寶清淨莊嚴せり
 佛に供養するもあり
 巨身金色の如來となり
 眞金の像を瑠璃の中に
 各の世界に佛おはし
 大衆を教へたまふに
 精進持戒するもあり
 明珠を把き破らじと
 無量恒沙の菩薩たち

この土大に震動し
 光は東方萬八千の
 かの土の一切衆生の
 悉皆照し出されたり
 瑠璃顯黎色も燿に
 諸の天神人非人が
 法を持ち道を成じ
 いとも妙なるその相は
 映して見るが如きもあり
 深妙の義を敷演して
 無數の聲聞林中にて
 その有様はさながらに
 拳々服膺するに似たり
 或は施行忍行し

六 偈

法を持ち佛法を支持し
 道を成じ成佛するまで修行を
 たり遂げし

寂滅相を觀じつゝ

功德を積みて無上慧を

かの諸の國々に

菩薩を教へ世を救はする

四衆は大に歡喜しつゝ

因縁如何にとあやしめり

安詳として三昧を出で

汝は世間の眼なり

佛の法をよく持つ

たゞ汝のみよく知れりと

妙光菩薩を歡喜させ

六十劫に満ちたりき

この大法を受け持ち

或は深く禪定に入り

説法教化して衆を救ひ

求めて退轉せぬもあり

六、燈明佛に照されたる

何も佛ましまして

莊嚴の相同じきを見て

さしも奇しき瑞相の

七、その時日月燈明佛は

妙光菩薩をさしまねき

一切衆に歸信され

種々の敵の意をは

深慮畏き讀め言に

蓮華を説かせたまふこと

妙光法師は慕しく

八、諸法の實相の義一諸法は蓮華に依つて実相が知れる、故に諸法の實相の義とは蓮華なり

九、實相に通達す一蓮華を心得たらば實相の大綱を捉つた事なり

八、衆も等しく聴聞して
 佛は大衆に告げたまふ
 もはや演説し已りたり
 汝等一心に精進し
 佛は億々萬劫にも
 情も深き訓誡に
 かりそのならぬ縁なるに
 御在世の短きを
 四衆を安慰めたまふやう
 九、滅度を屢ふること勿れ
 説の如くに行じなほ
 この徳藏菩薩こそは
 わが滅後にも我と住み
 後には必ず作佛して

歡喜せぬ者はなかりけり
 およそ諸法の實相の義は
 我今日中夜に滅度せん
 放逸を去り修行せよ
 値ひまつること難きぞと
 佛子等今更悲みて
 はや滅度させたまふかと
 歎けば聖主法王は

蓮華の中に我は住む
 佛を見るは難からじ、
 蓮華に心堅固なり
 よく實相に通達し
 淨身如來と號しつゝ、

一〇、蓮華一佛滅後蓮華思想を世に傳ふる事、譬此する、大事なれば特に高弟妙光に先づ御命あり
 燃燈佛御在世の時恭敬尊重する心と等し、恩徳を思ふがゆゑに燃燈佛信仰心なり

衆生を救ふ身なるべしと
 佛は蓮華を妙光に
 新燃え盡き火滅し
 滅度に入らせたまひけり
 舍利を分布し塔を起て
 倍々精進して道を求む
 奉持して八十劫の間
 佛に八人の王子あり
 佛の滅度ありてより
 よく無上の道を習ひ
 隨順供養せしほどに
 第八王子は燃燈佛
 諸聖の師となり無教徳の
 妙光法師の弟子の中に

授記の手本ぞ頼もしき
 蓮華あらせて中夜靜に
 煙も見えずなるが如く
 恒沙の数の僧尼僧
 佛を燃燈佛仰し
 妙光法師は所囑の法を
 廣く蓮華の經を説く
 父に隨ひて沙彌たりしが
 妙光菩薩に開化され
 無數の佛に値ひまつり
 皆相繼いで作佛せり
 光明世間を照しつゝ、
 衆生を濟度したまへり
 たまたま一人の憍怠者あり

一三、彌勒佛一、愚人も逐には成辦する
一四、但し良師の導にこそ依れ

一三、蓮華を説き授記し通囑し一諸佛
は出世して必ずこの段取りを實
行したまふ
大聖一四、第十二因縁等、高深難備
教前を済まし、是より蓮華を説か
んとする大聖
本相今相相同じ一、百も今も同じ
前に十方同じを言ひ此所に古
今同じを言ふ、佛の神力光明
と文殊の教に依り會聚は固然と
して、深奥の化儀次第の半ひ難き
を變え合掌して待ち奉る氣持と
作る、これ本章の目的蓮華開始
の序なり。

一四、待ち上れ一、無量義説法では善く
分つた人はない、何としか論じられ
ればならぬ、此は三昧に入られ
て居る間に彌勒の問も善ければ
文殊の答も善い、とうく蓮華

を聞く段取りになつた。

第四章

一、その時に一、今までは序前であつ
た、大伴蓮華説法の様子も、唯して
來たが、是から本式に蓮華に違ふ
安詳一、次第よく詳々と
由來一、その事由を言は、
蓮華一、政法の難
高深の徳一、徳を附つること深奥
甚深未曾有の法一、宇宙一切の究
相及その力用
成就一、覺つて我が物にする、是で
佛の智慧に成る

二、それ如來の方便は一、方便して衆
の善を離れしむと言つたが、この
方便が、抑も偉いのだ、と言はんと
する。
佛知見一、佛智慧の力
一切未曾有の法を説せり一、究竟
甚深と云ふに同じ、其無畏權巧解
脱三昧等皆立派な法であるが、こ
れだけ多く、一物の法を究竟透
徹して居ると言ふ。
説可一、成る理と感服せしめる、
要す以て之を言は、一、要するに
法も智慧も知見方便も、本は同
じ物で、是が佛の無量無匹未曾有

常に名利に貪著し
習ひし經は通利せず
妙光法師の化を受けて
諸佛に隨順供養して
六達道を具せしゆゑ
求名は汝彌勒にて
蓮華を説き授記し通囑し
大事の前の瑞相に
諸佛世尊の方便にて
かるがゆゑに推し付る
蓮華を説いて寶相の義を
一四、諸人合掌して待ち上れ
道を求むる人々に
清涼を得しめたまはん

求めて富貴の家を訪ひ
名をも求名と呼ばれしが
やがて蓮華の信念に入り
無上の道を修習し
彌勒佛とて授記されき
妙光は我文殊なり
一切世間を利益する
大光明を放ちたまふは
本相今相相同じ
今の佛の光明も
演べんと思すためなるべし
世尊はやがて法雨を雨し
善く澍ぎ充ち潤し
聲聞縁覺菩薩の學者

もし疑怖あらば今日こそは 悉く皆除き盡せよ

第四章 諸佛所成の法、知見方便力

一、その時に、世尊は安詳として三昧より覺め、諸の菩薩大衆の前に於て、智
者舍利弗に告げたまふ。「諸佛の智慧は甚深無量、その智慧の門は難解難入、一
切聲聞縁覺の知ること能はざる所なり。由來佛は百千萬億無数の佛に親近し、
久しく勇猛精進して、盡く諸佛の無量の道法を行じ、名聲普く聞えて、倍々高
大の徳を累ぬることに依り、甚深未曾有の法を成就したまへり。諸佛の智慧は
實に是の如き法の所成にして、佛が宜に隨つてその門を説かせたまふに、淺行
薄徳の輩は所著多くして、之が意趣を解せず、入ること亦難し。
二、されば舍利弗よ、我成佛已來、常に種々の因縁、種々の譬論を以て、廣く言
教を演べ、無数に方便して衆生を引導し、先づ諸の善を離れしむ。

の法である。佛の偉い所以である。

三

佛と佛一凡夫には説いても分らない。第二重固にも言へる如く諸法実相は佛國の境界にして十地の菩薩も及ばぬ所なり。巧て佛に譬の如く深き哲學ありと言ふ事は佛敎の第一の強みである。これこそ佛敎は永く人類文明の教導が出来た所處までも行きづまらぬ事か向上発達の嚮導する所以である。古來佛敎學者が哲學研究を怠らざるは類もしい。然し我々は先づ佛の示したもふ敎に隨ふが聲明ならん。さればにや説くも詮なからん。佛意は寧ろ信仰を勧めたまふ。本末究竟等一研究の佛敎者は之を本末究竟して等しと讀み未の佛本の帯を一つとて感心した人もあるけれどもそれはまだ早過る。後の研究として置いて此所は本末如何に究竟するものなりや等と、等とエトセラの意に取らば文法上及佛との約會上檢当である。恐らく本經終まで哲學的に考へねばならぬ所は一つもあるまい。敎は皆佛の哲學が基礎になつて居ることを確信して置けばそれで宜しい。自分の哲學に佛敎を引寄せやうとする

る勿れ、本意は照らさうすれば善いかと疑問を注せしめて次に進むが目的である。

二 偈

この妙法一甚深微妙の法

覺の道一覺は説き難い道に依る外はない。道は覺單の中に在り。されば第六卷に行つて明さる

四

最後身一漸を離れたることに於てはこの上もなき處

それ如來の方便は皆究竟透徹の佛知見を以て具足す。舍利弗よ。如來の知見は廣大深遠、無量、無礙にして、力、無畏、禪定、解脱三昧、深く無礙に入り、一切未曾有の法を達せり。如來はこの知見方便力を以て能く種々に分別し、巧に諸法を説き、言辭理に順ひて、よく衆生の心を悦可し、普く一切を濟度したまふ。舍利弗よ。要を以て之を言はば、佛は無量無邊未曾有の法を悉く成就したまへり。

三

止みなん舍利弗よ。また説くも詮なからん。如何となれば、佛の所成の法は最勝希有にして難解なり。たゞ佛と佛とのみ能く諸法の實相、所謂諸法の如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等を究盡せさせたまふ。

一、世雄は量り知り難し

誰か佛を知るあらん
如來の知見方便力を
無数の佛に親近し

人天一切衆生類

力、無畏、禪定、解脱三昧
測るは難きことぞかし
行具足して得たまへる

二、諸法の種々の性相は

道場に坐し果を成せり
この妙法は説き難し
示す辭もなきゆゑに
信力堅固の菩薩のみ

見るに難くするに難し

無量億劫行を修し
我と諸佛とのみぞ知る
たゞ寂滅と言はんより
凡夫は解すること能はず
覺の道に預らん

三、諸の弟子聲聞は

漏を盡し苦を滅し
この妙法を解せんこと
よしや世界の一切の人
共に思を致すとも

諸佛に親近供養して

悟り得たりと思へども
力及ばぬ事ならん
舍利弗が如き智者となり
佛智を測ること能はず
皆舍利弗の智慧ありて
集めて共に究むるとも

四、十方世界の聲聞衆

餘の十方の佛弟子を
又は無漏最後身を得て

利智勝れたる縁覺衆

佛の實習一佛の所成の法その物
なり方便權用に對して言ふ

五、
新發意一初心

六、
道を行じ一從來の佛道でなく違
華の大道を修行しての意より、速
早では佛を縁とし佛力を信らざ
るは道に非ず從て功累徳も出
來ずと云ふ、第六韋蕩第十七篇に
行けば分る

七、
眞實一大小諸道の滅るべき根本

八、
思慮違事大法、中々説かぬぞよ
と云ふのである、因を見て妙法
が説いてあるとしたら、本經は讀
み進むことが出来ずおは母にな
る

九、
種々の善より出離一因の先づ諸
の善を離れしむに應ず、
眞實の意趣一妙法は説けぬと仰
せらる、それならどうして下さ
る御意趣かと云ふが分らぬ第六
因の明かざるべし

十方世界に充滿し

佛の實習を想ふとも

五、
新發意の菩薩たら

あらゆる義趣を了達し

徧く十方世界に満ちて

妙慧を以て一心に

久しき勤修の果報なる

六、
不退の位の菩薩衆は

思量を以て佛智慧を

さすが悟れる堅固心

勇猛精進倦むことなく

佛の甚深の智慧はたゞ

七、
清淨不思議の妙法を

十方諸佛もまた然なり

無数劫共に一心に

少分だにも測り得じ

無数の佛を供養して

説法巧なる人の

稻麻竹藁と立ち並び

無数劫共に量らんも

佛智は遂に知り得まじ

恒沙の教にも超えぬべし

求めんとする愚さを

道を行じて已がじし

樂つて積功累徳す

功德に應ふと知るゆゑなり

娑婆にては我のみ成就せり

佛の語は異らす

世尊は久しく種々の道を

眞實は明したまふらめ

佛の方便力をもて

種々の善より出離して

されども未だわが教の

覺の道は遙なり

八、
汝等聲聞緣覺は

説きし隨宜の教により

菩提を脱れ涅槃を得たり

眞實の意趣を知らぬゆゑ

第五章 舍利弗敬信を誓ふ

善法に惑ふ。惑ふも道理なり。彼等は道の大小高低ばかりを問題にして居る。今佛が善法と仰せらるる事は何れの道でもない。彼等の期待と究竟道との違背を述べた。

方便は甚深。方便は出たものの間に合せではない。佛知見より出た甚深な慈悲だ。蓮華に依れば方便の真諦味が分る。空等なる聲聞の理解でも蓮華を分れたら空等なものだ。之を知らぬ舍利弗が疑ふは是非もない。疑者も亦然らん。

一、その時に、憍陳如尊者等、諸の聲聞縁覺千二百人、並に聲聞縁覺を學ぶ僧俗男女は、惑を起して私に思ふ。「世尊は何故に纒々方便を稱歎して、佛の智慧は甚深にして解し難く、その言説の意趣は測り難く、一切聲聞縁覺の及ばざる所なり」と言ふや。我等は佛に解脱の義を聞き、それに依て涅槃に到り、已に眞實を得たりと思へり。然るに今世尊の語を聞き上れば、我等が悟は眞實しからず、我等俄に義趣に惑ふ。

二、舍利弗尊者は四衆の疑惑を察し、己も亦了せざる所ありて、佛に白す。「世尊よ、如何なる因縁あつて、特に慇懃に、諸佛の方便をば、甚深微妙難解の法と稱歎したまふや。我等は昔より、世尊に従ひ、聞知せること多きも、未だ曾て是の如き事を聞かず。今四衆は皆疑あり。願くば世尊。このことを敷演して説き明させたまへ。」

一、慧日大聖尊

佛が道場に得たまへる

不可思議の覺は測られず

二、問はねども

佛の方便を稱めたまひ

煩惱盡させる阿羅漢も

諸天も相見ためらひて

たゞ御解説をば待ちてあり

三、世尊は我を憍中の

しかも我々は惑あり

我等が道は何所ぞと

合掌して待ち上る

如實に解説したまはらん

四、恒沙の菩薩天神衆

萬億國の輪王まで

秘のし眞實を明されよ

力無畏三昧定解脱

及なければ問ふ人もなし

世尊は自ら説き出でて

佛の智慧を歎へたまふ

堪へずして皆疑悔を増す

世尊を仰ぎ茫然と

智慧第一と稱めたまふ

究竟の法は如何ならん

佛口に生れし子等が皆

あはれ微妙の御聲もて

三、目傳

佛口にまれし御説法に竊ちた

四 眞定の道一優は善い善悪であらう。第六巻に行けば分るが道は運筆に根據を有して眞定する運筆にしては道は死物である。舍利弗未だそれを知らぬと問ふ言葉は運筆を顧ふことに當る。

三 説くべからず一言は必方がよからう。對の中に皆道の常観で信ぜられぬ事がある。それは我々の法は來至して不思議の力を現すと云ふ事である。法力は運筆の命脈活力と成る者である。信じて當ふより外ない。信するや否やに後悔したまふ。

五 増上慢一增上慢は上法優は優に上法と云つて優化するの義も正しい。

四 止みなん一また念を釋したまふ。

眞定の道を聞かばやと
切なる心をめとせばせ

合掌して仰ぎ見まつる

三 世尊は舍利弗に告げたまふ。「止みね、止みね、説くべからず。もしこの事を説かば、一切世間の諸天諸人は皆驚き疑はん。」

四 「たゞ願くば説かせたまへ、たゞ願くば説かせたまへ。この會の百千萬億無量の衆は、皆曾て諸佛に値ひ上りし福あつて、諸根猛利、智慧明了なり。世尊の語を聞いて、必ずよく敬信すべし。」

あはれ法王無上尊
この會の無量の衆は皆
佛語を信じ上らん

五 「止みなん舍利弗よ。我もしこの事を説かば、一切世間の天人神が驚き疑ふのみならず、諸の増上慢の僧は、聞いて誹謗し、その罪に依り地獄に墮つることあらん。」

止みなん止みなん我説くまじ
法は妙なり思はれず
覺は深し測られず
道を説かんも人信ぜず

増上慢の諸の僧

聞かば誹謗の罪を作らん

六 舍利弗誓をなして重ねて請ふ。「否々世尊よ。この百千萬億無量の衆は、已に世世の諸佛に従つて、教化を受けし者なり。もし愍みて説きたまはゞ、必ずよく敬信し、利益する所多くして長夜安穩の想あらん。願くばこの衆のために佛の眞實を明させたまへ。」

一、無上兩足尊

第一眞實の法は如何

今諸の弟子に代り

畏みて問ひ上る

二、この會の衆は已に世々

佛の化導を受けし身の

誰か佛語に背くべき

一心に聽受敬信せん

三、我等聲聞弟子のため

分別して説きたまへかし

無上の覺の道を聞き

皆大に歡喜すべし

四 偈

一 眞實の法一舍利弗の問ふ言葉が愈々本物に近く成つて來た。法を從來の苦學でなく何の特別の大法則と考へ始めた。

三

無上の覺の道一今眞實の法は已に言つた後にこの語も聲に當つて居る。舍利弗の問聲疾い所まで來た。

第六章

第六章 諸佛出世の一大事因縁、一佛道、蓮華

我豈に説かざらんや。今まで坐して待ち居たる人々、さうらお始めに成ると善んた状態を成さる。巧て注意して置くが蓮華は慈悲とか報恩とか忍辱とか佛性とか、種種を従来縁に成り、成れた徳目で面説するのが主ではない。もつと特別に諸君に初耳の事があるんである。

よく思念せよ。邪見ではないけ、正見高潔な心で聴きよ。分らぬ事は、小言を自己安樂主義など頭に成さぬがよい。問難は大いせよ。

退くも佳なり。後日悔い改めて來る事あるべしと、極存しなり。唯然と畏りました。

妙法。此所では妙法蓮華の意、形容詞のみを用ひたり。是より以下因までに大徳蓮華の輪廓を説き終る。

三千年一度、

それに咲く花のほひに目かれす。また三千年とせし待つも度

一 世尊は舍利弗に告げたまふ。「汝至心に請ふこと三たびに及ぶ、我豈に説かざらんや。汝今諦に聞き、よく思念せよ。」

二 この時、會中の僧俗男女五千餘人、座より起ち、佛を禮拜して退去せり。

この輩は罪根深重の増上慢なり、未だ得ぬをば得たりと謂ひ、未だ證らぬをば證れりと謂ふ、是の如き失あるがゆゑに、舍利弗が敬信を誓ひし事を快とせず、座に墮へざりし者なり。世尊はこれを見たまはし、默然として制止なかりしが、やがて舍利弗に告げたまふ。「彼等増上慢は退くも佳なり、今は會中に枝葉なく、純ら眞實の者のみなり。汝よく聴け、我汝がために分別して説くべし。」

唯然世尊、我等謹みて聽き上るべし。

三 是の如き妙法は、時機相應せざれば聽されず、譬へば優曇華は靈華とて、三千年に一たび咲くすら希なるが如し。汝等我を信ぜよ、佛語は虚妄なし。

我を信ぜよ。一特に法力のチカラのこのだけは理屈おやない信するより外なき事案だ。

一大事因縁出現。さうらから我は打ち捨て置くに忍びず思案あつて出現した。理屈を言ひに出で來るのではない。人格を以て信に導か行せしめ、而して覺り得しめんためである。以下それを解説した。

佛知見。佛智の力、法清淨。無垢完全因の如き清淨の社會を造化する。

開示悟入。佛は證得である。佛知見法を成就せしむる。示は佛知見を示して受け行せしむる。信は認めるである。佛知見を信じて難有いと取信せしむる。入は佛知見の在る所の道に歸り入る。道に入り始めたり。開き成就するが修行の終りである。入信示開が順序である。佛智の教を開示又は佛道を開示と言ふ場合と用法が異なる。從來の字義新しくせしめられたため、本書の諸君に頭倒しにせしめようである。

菩薩。本經に於ては信と誓とを有すれば入道の初から菩薩である。信なくしては如何に六度萬行の力行でも菩薩と曰はぬ成るべく多くの人菩薩に成れ。

舍利弗よ。諸佛の隨宜の説法は意趣解し難し。我無數の方便、種々の因縁、譬論、言辭を以て諸法を演説すれども、法そのものは汝等が思慮分別の能く解する所に非ず。唯佛のみ之を知しめせり。

さりながら舍利弗よ。諸佛世尊はたゞ一大事因縁を以て、世に出現したまふ。如何なるをか諸佛世尊は、たゞ一大事因縁を以て、世に出現したまふとなすや。諸佛世尊は衆生に佛知見を聞かせ、清淨なることを得させんと庶幾ふがゆゑに、世に出現したまふ。衆生に佛知見を開かせんがため、衆生に佛の知見を示したまふ。衆生に佛の知見を示さんがため、衆生に佛の知見を悟らせたまふ。衆生に佛の知見を悟らせんがため、衆生を佛知見の道に入れたまふ。若し佛が世に出現し、身を以て導かせたまふことなくば、衆生はこの道に入り難かるべし。舍利弗よ。是を諸佛はたゞ一大事因縁を以て世に出現したまふとなす。諸佛の種々の所作は、常にこの一事のためなり。たゞ衆生をこの道に入れ、この道に於て法を信ぜしめ、法を行せしめ、法を成せしめて、世の清淨を得しめたまはんとす。これ一切の教の意趣なり。知れよ舍利弗。道とは佛に隨順歸信して、

教を聞き徳に熏じ、心を正し身を修め、佛の智慧を習ひ、佛の法力を受け、精進して世を浄め、功を積み徳を累ね、業報究竟して佛と成り、佛知見力を以て限なく救世の大業を行せんとするに外ならぬことを。道は成佛の一途なれば、之を一佛道と稱す。その進歩せるを大道又は無上道と曰ひ、初歩なるを小道又は諸道と曰ふ。成佛を願して一佛道を修行する人を菩薩と曰ふ。諸佛如來はただ菩薩を教化したまふ。

四 過去の諸佛が無量の方便、種々の因縁、譬諭言辭を以て、説法せられしは、皆一佛道のためなりき。諸の衆生は佛に従つて教を聞き、この道に於て菩薩の行を具足し、究竟して皆佛知見を開きき。將來諸佛が世に出でまさんとき、また無量の方便、種々の因縁、譬諭言辭を以て説法せられん。これ皆一佛道のためにして、諸の衆生は佛に従つて教を聞かば、この道に於て菩薩の行を具足し、究竟して皆佛知見を開かん。現在十方の無量の世界に、各佛世尊ましまして、衆生を利益し安樂ならしめたまふこと多し。この諸佛が無量の方便、種々の因縁、譬諭言辭を以て、法を説かるるは、また皆一佛道のためなり。諸の衆生は

佛知見を開きき。一應計本には、一切衆生を得たりと成つて居る。前節との約合はたゞ佛知見を開ききと試した。佛知見は一切衆生を開き得である。

十方の衆生。佛に従ふ者佛知見を開かざるの例なし。蓋せば十方で可能を明かす。

救世の大願。作佛の願とも云ひ得るが目的は救世の一筋なり。自分かどう成らうと願ふのはない。佛教は他家の如くに細かい修業を教へ、事を行居いて居るけれども、救世の大願を目的として導くものである。

佛に従つて教を聞き、この道に於て菩薩の行を具足し、究竟して皆佛知見を開くべし。佛に従つて教を聞き一佛道に於て皆佛知見を開くことは、三世十方の實例あることなし。

舍利弗よ。諸佛はたゞ救世の大願を起せる菩薩を教化して、佛知見を開かせなむと思しめす。之がため衆生に佛の知見を示したまふ。之がため衆生に佛の知見を悟らせたまふ。之がため衆生を佛知見の道に入れたまふなり。

五 舍利弗よ。我も亦是の如し。衆生に種々の欲、深心の善あるを知るがゆゑに、その性に應じて、種々の因縁、譬諭、言辭、方便力を以て、隨宜に説法す。是の如きは皆一佛道、佛知見のためなり。十方世界には、別に二道若くは三道あることなし。

六 諸佛は別けて五濁の惡世に出現したまふ。五濁とは、一に劫濁、所謂時代爛熟して、飢饉、疾疫、刀兵、暴動等の恐慌を免れぬ弊なり。二に煩惱濁、所謂貪、瞋、痴、慢、疑、增長して、發欲、憎惡、闘諍、詭曲、虛偽多く、邪法に心伸悩む弊なり。三に衆生濁、所謂人倫乱れて、父母尊長に孝敬ならず、齋法

諸佛は別けて惡世に出でたまふ。惡世に善根の國を括り、聖人の所を説き、諸佛は然らず佛の世動して救世せらる。今此等惡世界は衆尊が御覽になれば、濁世とは言へ淨化の元とみあふのであり。餘所に極樂を求むること勿れ。我が佛國は佛の御國に現世に出現せられてこそ河の御國手は出来ぬ。佛の御國に現れぬ。我等佛の教化國内に生れ會へり宜しく感蒙樂喜を致して佛軍を助けよるべし。

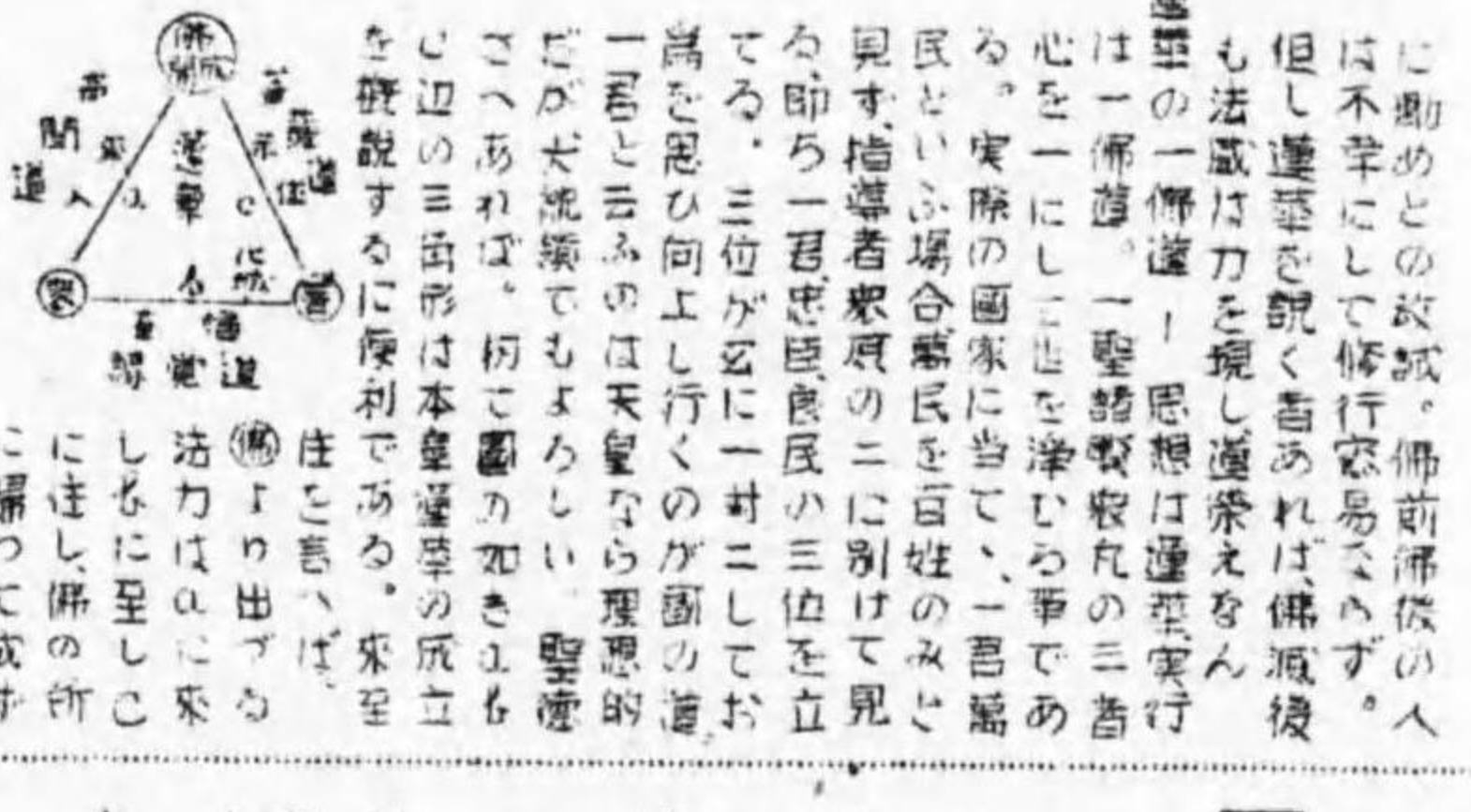
永受住、第二章の終に暗示されし事、茲に明示す。法力來至住して世々入信示明の作用を繰り返す。

體一佛菩薩衆生の三位を以て組織し法力充塞せる治体、この位は三位ある事が特徴である。普通佛の宗教意識は佛対一切衆生一對一であるが本體では佛は対菩薩衆生菩薩は対佛衆生衆生は対佛菩薩で一對二してある。三位一対二は二條かに新陳代謝する無量衆生の天下である。

菩薩一之を法界の國体と言ふことを得べし。是は輪廻である。この菩薩の中の活動その功徳等は是より造りに説かれて内容衆生の運華が露れる。本體を終へたまで漸々し認識を深むるに努むべし。

無量の功徳一運華の体内には法力充溢す故に無量不可思議の功徳力あり。第二章因にも言へり、唯徳難難し是の意。

わが弟子一運華に照し聲聞弟子等の行の足らざるを責め給ふ。菩薩出來れば三位確はぬ。現前に佛ながらんには一今の内



に勤めとの故誠、佛前佛依の人は不幸にして修行容易ならず。但し運華を説く者あれば佛滅後も法威は力を説き運華を身運華の一佛道一思想は運華實行は一佛道一思想は運華實行の心を一にして世を淨むる事である。實際の國家に當て、一言一語民といふ場合國民を百姓のみと見ず指導者衆生の二に別けて見ると即ち一君臣民の三位を立てる。三位が各に一対二して高を起し向し行くのが運華の道一而して三のものは天聖なら運華的はた大流弊でもよからしい。聖運はつたれば、初て國の如きもこの位の三位形は本運華の成立を解説するに便利である。來至

を修せず、因果を畏れず、功徳を作らず、社會の秩序破る、弊なり。四に見濁所謂偏見邪見多くして、思想不安に墮つる弊なり。五に命濁、所謂壽命短く、欲望多く、識らず識らず、惡業を造る弊なり。是の如き等の弊惡漏乱するがゆゑに、衆生は垢重く、徳薄く、不善累積し、國土破る。諸佛は世に出現して、まづこの弊惡を濟はんがため、方便力を以て、分別して三道を説かせらる。これ蓋し一佛道のためなり。

七 舍利弗よ。佛は世を清淨にせんがため、法力を以て無量の衆生を弊惡苦聚より救濟し、引導して佛道に入れ、菩薩を教化したまふ。衆生は法の威徳に依り、心を一にして佛を信奉し、菩薩に敬順し、戒を持ち道を行じ、自ら菩薩と成る。菩薩は佛の守護を被りて、佛の事業を輔佐し、衆を救ひ世を淨め、國を榮す。かくて功積み徳累り、究竟して佛果に至り、彌々無量の衆生を濟度し、また諸の菩薩を教化す。是の如く轉展して、佛善く故へ、衆生善く信じ、菩薩善く行じ、榮昌無窮、世々一佛道の美を濟すはこれ佛の法力の來至住する相にして、その體を名けて運華と曰ふ。諸佛の常に護念したまふ所、無量の功徳皆

この中に集れり、一切衆生の大安穩處、大信心處なり。

八 舍利弗よ。わが弟子聲聞緣覺、もし諸佛は運華のため主として菩薩を教化したまふ謂を聞かず、知らざるものは、眞の佛弟子にあらず、非聲聞非緣覺なり。自ら阿羅漢果を得て、それを最後身究竟涅槃なりと謂ひ、進んで無上覺を求めぬ者は皆これ増上慢人なり。何がために阿羅漢と成りしかを知らず。若し實に阿羅漢ならば、即ち運華の中に於て、佛の法力に信頼し、一佛道の菩薩行に邁進して、作佛を期すべきなり。舍利弗よ。佛には値ひ難し。また佛滅後に於て、運華を説く者は希なり。されば、わが滅度の後、現前に佛ながらんには、何の世にかは佛道を決了し得んや。汝等一心にわが語を信解受持せよ、諸佛如來の語は虚妄なし、諸道は唯運華の一佛道に歸す。

- 一、増上慢の僧尼僧
 - 俗男俗女五千人
 - わが身の瑕疵を護ひ惜み
 - 悔ゆる心のなきゆゑに
 - 佛威を恐れて座を退きぬ
 - 衆が中なる糟糠にて
- 小智を恃み戒を缺き
- か之輩は福徳薄く

は法眼破れ三昧は蓮華の体を保たず阿の教も無効に成る。故に佛は衆生に二法ニすむが故に大巧にする。佛法佛の三法を教ふとは是なり。この三法は蓮華より衆生の功徳あり。好機を尚教くことせん。

二

諸り得こせんため十長行目に開くは五に同じ。この佛を熟讀して佛が佛の智慧方便力を衆に傳はしたる世に出現して入悟示解の御心盡し文々蓮華の相に注意せよ。佛説たを翻し流すかされを演説こと悟するかは説きの根根次第で有らう。長行が理窟を説いて廣く引揚へるに在りては佛を著して佛の所多く而も佛が智慧を知り時佛を究て深説さるゝのであるから衆生敬つて講依せば法力を未至任して我等が賢行を助けたまふこと。長行で用は出されたる蓮華は佛を熟讀すること依り蓮華を佛の次第に思解の蓮華を説ゆる。餘り六つかしく考へたるが如くして信解し易し。衆を説くは佛の智慧も蓮華に比ぶれば諸善性意の心を説み

- 一、眞實を受け聽く力なし
- 二、諸佛所成の微妙の法
- 三、衆生に證り得させんため
- 四、はじめ佛は衆生の
- 五、前世の善悪業因果を
- 六、種々の因縁譬諭言辭もて
- 七、或は師弟宿世の縁
- 八、或は神力不思議を顯し
- 九、生死に著し愚にも
- 十、無数の佛に逢ひながら
- 十一、衆苦に悩む人のため
- 十二、衆生の性に隨ひて
- 十三、遂に佛慧に導くなり

- 一、残の衆は枝葉なく
- 二、善哉舍利弗いざ聽けかし
- 三、諸佛無量の方便力
- 四、佛は世に出でたまふなり
- 五、種々念、種々行、種々欲性
- 六、皆悉く知しめし
- 七、或は詠じ、或は誦ふ
- 八、又は先佛の功徳を説き
- 九、引いて佛道に入れたまふ
- 十、たゞ苟且の樂を追ひ
- 十一、深妙道を行ぜずして
- 十二、佛は涅槃を説きたまふ
- 十三、初は小道涅槃を説けど
- 十四、習學久しき汝等に

一度に今言ふにすむ勿れ。この佛で法自在の佛と無上道の菩薩と佛の衆生と成道の佛を一にする三位一心が分れば先づ衆生上まである。天台の深説と衆生とを説く。

六

深妙道を行す人のため一あるは佛の衆生と成道の佛を一にする三位一心が分れば先づ衆生上まである。天台の深説と衆生とを説く。

七

妙法具足の教、妙法は佛智なり。佛智を以て具足せる教は蓮華なり。蓮華を妙法と云ふことあるは、妙法具足の蓮華の異なり。佛智に蓮華と深説するも勿れ。

- 一、なほ成道を許さざりしは
- 二、自高我慢の心を去り
- 三、時は正しく來にけらし
- 四、自ら佛の子と知りて
- 五、孝順の心一筋に
- 六、ために佛は蓮華を説き
- 七、至心に佛を念じつゝ、
- 八、作佛は何時か叶ふと聞き
- 九、心の行をよく知りて
- 十、妙法具足の代が教の
- 十一、聲聞にまれ菩薩にまれ
- 十二、普き十方佛土の中に
- 十三、二もなく三もなければども
- 十四、無量無数の名を以て
- 十五、時到來すと見えしゆゑぞ
- 十六、まこと敬信を誓ふ上は
- 十七、いでや説かまし眞實の法
- 十八、衆生に教の義を悟り
- 十九、深妙道を行する人の
- 二十、佛道成就を許すなり
- 二十一、よく清淨の戒を持ち
- 二十二、歡び勇む人々の
- 二十三、ために授くる無上法
- 二十四、一語一句だも聞かば
- 二十五、成佛疑なきぞかし
- 二十六、眞實の道はたゞ一つ
- 二十七、かりの方便は二三回
- 二十八、衆生を引導なしたまふ

九、 無上の法を轉して、佛の智力を
滅へ流して、これ唯作佛せしむ
んが目的である。小道を以て覺
心する人は作佛の覺をなし、覺
心も偽しい。
作佛は、救世の實力を完全に備ふ
ること。

二二、 根の根を断ち、故の大小よりは
寧ろ法力を發揮することが覺の
根本である。それを疑念に改良
して。

- 九、 諸佛が世間に出でまして
たゞ一寶の佛道に
作佛を説かんだためぞかし
行くへも知らず有らぬ道を
一〇、 自ら大道を成就して
慳貪の罪免れじ
如來は欺誑貪嫉せじ
一一、 久しく説きし方便の
世の誤の根を断ち
説きたまふゆゑ十方に
一二、 我は無數劫積み成せる
光明世間を照しつゝ、
諸法實相盡なき
一三、 一切衆生を我が如く
定、慧、力莊嚴せるは
無上の法を轉して
二道の人となり果て、
彷徨ふことぞいたましき
人に小道を勤めなば
もし人佛に信歸せば
など隠さんや眞實の法
教の意趣をうち明はて
淨めあげたる一寶を
遊行して憚畏なし
功德に身相莊嚴し
無量の衆に尊まれ
覺の道を説くものなり
佛にせんとの誓願は

蓮華を説いて一切を

無上の道を説きしかど
信ぜぬ人の多かりき

愚癡恩愛に悩され
又は六賊に輪回して

娑婆に生れて老ゆるまで
薄徳不幸の人として

外道の説に捉れたる
議論百出果しなき

今は定んで満足す
無上の道に入らしめん

一四、 さても我昔より
無智なる心の惑亂れ
心の無智は何故ぞ

一五、 五欲に著し徳薄く
罪を作りて三惡趣
つゞきに苦毒を食くるゆゑ

一六、 胎内微形となりてより
くり返しくり返し
衆苦の迫に逢ふゆゑに

一七、 有と言ひ又は無と言ひて
断常四見六十二
深き林に迷ふゆゑ

一四、 無智は佛の聖功が分らぬ

一五、 原因因縁は、無明にからむ愚癡は
疑念である
二惡趣は、地獄、餓鬼、畜生
三惡趣は、畜生、地獄、餓鬼、畜生
四惡趣は、畜生、地獄、餓鬼、畜生
五惡趣は、畜生、地獄、餓鬼、畜生
六惡趣は、畜生、地獄、餓鬼、畜生

一六、 衆苦くり返すは二のたのみに十二
因縁を説く

一七、 有無の言ひは佛の聖功は疑念に
からず
六十二の因縁は内外大小内外小
内外大内外小内外大内外小
内外大内外小内外大内外小
内外大内外小内外大内外小
内外大内外小内外大内外小
内外大内外小内外大内外小

六十に斷常二見を加へて六十二なり。などとき「二日を断して、試驗を出す。」

大體一蓮華一佛國の中進歩せる
二、
三、

- 一八、世俗の樂に貪著し
得意の類はよけれども
法の威徳を知らぬゆゑ
- 一九、千萬億劫經るとても
教に値はん便もなく
度する機會のなきゆゑに
- 二〇、苦にこそ人は惑亂まどふなれ
信じ受くべきやうなれば
煩惱を断つ法を教へ
それを涅槃と名けしも
諸法本來の寂滅相は
- 二一、佛子等今は涅槃を悟り
この上はたゞ一心に
眞實相に自在を得て
- 二二、
三、
- 二四、
二五、
- 二六、

榮耀えいごう榮華に日を送り
心は詔曲てんきよく不實にて

佛と言ひし名も聞かず
不善の社會に住みなれて

かくては大道を説くとても
我は方便して苦の困なる
道に遮る魔を拂ひ

涅槃は眞の悟ならず
佛ならでは悟られず

疾く大道に入る身なり
行を勵めて佛果を期し
無量の衆生を濟度せよ

説く權實ごんじつの方便は
疑ふ勿れ諸人よ

皆一實の佛道なり
衆生の欲性を知しめし

巧に諸法の相を演べ
佛慧に引き入れたまひたり

縁なき衆生は度し難し
人はもとより佛の子なり
必ず佛果を成就せん

教を聞いて戒けいを持ち
種々福徳を世に布施し
常に諸佛に讃められつつ

増上慢の心なく

二三

第一の義一佛國ではない。蓮華
思想を捨す。佛も佛は一切衆生
を皆幸福ならしめんと願ひたま
ふ。種々の境地の衆生に悉く仕
ふ。諸佛は世の衆生の願を起せし
力を求めし。佛は世の蓮華の中に
安住して教へたまふ。即ち蓮
華思想が第一義である。蓮華の
へ得れば実相の妙法は得易し。

二四

法は佛に在り。佛已に諸法実相
を究盡し所有したまふ。蓮華は宇
宙に常めずとも佛に在りては便
利なるべし。佛に歸信せよ。二三
項まで蓮華上巻を勤めしが是
より衆生歸信を勤む三五項まで
勤めよ。

二六、諸佛滅度の後の世にも

法を習ひし羅漢たち

或は石廟いしやう或は瓦廟かわらやう

造り營み佛舍利を

いと厚かりし人々は

様々ながら相を彫り

心盡し、人々は

或は鑰鉅赤白銅

もしくは膠布を用ふるも

佛像作りし人々は

畫像えがきに寫して拜まんと

常に頓直柔和にて、
皆佛道を成就しき

二七、或は金銀珠玉の塔

又は泥沙でいしやの塔なりとも

供養しまつる志の

皆佛道を成就しき

二八、種々像形しやうけいを建立し

佛の徳を表あらわさんど

皆佛道を成就しき

二九、或は七竅を用ふるも

白鏡鉛錫鐵木泥

等しく恭敬の心もて

皆佛道を成就しき

三〇、如來の百福莊嚴相を

法を習ひし羅漢たち

或は石廟いしやう或は瓦廟かわらやう

造り營み佛舍利を

いと厚かりし人々は

様々ながら相を彫り

心盡し、人々は

或は鑰鉅赤白銅

もしくは膠布を用ふるも

佛像作りし人々は

畫像えがきに寫して拜まんと

錦彩にしんさいり畫きたるも

草木の枝や指をもて

佛を敬ふ心なり

功德を積みて大慈悲の

皆佛道を成就しき

無量の衆を大道に

三一、寶像ほうざう畫像えがき塔廟たつやうに

華香を捧げ或はまた

又は歡喜の心より

手向けし花の一枝も

皆佛道を成就しき

三二、佛像供養の心より

或は片手を舉げたるも

縁あればこそ心あれ

または童子の戯に

心々に描きたるも

僅の善の漸々に

心を圓滿具足して

知見方便力をもて

導きしこそ尊けれ

佛を憫あはひまゐらせて

種々の伎樂を奏せしも

歌ひし讚美の一節も

見佛聞法の縁となり

禮拜又は合掌し

又は少しく低頭ひだうけるも

何時か佛に遭ひまつり

二九、
騰布とうふ、油あぶらしめたるはち

三三、
華手けしう供養
王師おうしのゆく手に送おくらすはひにち
ごめは佛道ぶつだうきたるも
(華手供養)

三三、一人も成佛せぬはなし
 いくたびかまた世に出でし秋の月
 あまねき影は人ももらじ
 (花山院入道前大政大臣)

三六、家には蓮華の一佛道一葉より六
 の項まで蓮華の一佛道と説くこと
 の前佛の慈悲観文の情を觸し声
 韻を善護化させ満足の意を表し

- 三三、皆佛道を成就して
 廣く無量の衆を度し
 何心なく行く途に
 たゞ南無佛と一返の
 皆佛道を成就しき
 - 三四、過去の實例はかくぞかし
 衆の利益は異らず
 皆佛道を成就しき
 - 三五、舍利弗よまた將來も
 方便説法なしたまはん
 まづ衆生を度脱して
 もし御教を聞くあらば
 - 三六、己が行せし佛道を
 諸佛は誓ひたまへるぞや
- 心残のなきまでに
 寂然として滅度しき
 たまたま御堂を見出でつゝ
 稱名なせし人々も
 - 佛在世にも滅後にも
 もし聞くことを得し人は
 無量の佛が世に出でまし
 一切諸佛は方便して
 後に佛慧に入れたまふ
 一人も成佛せぬはなし
 普く衆生にすすめんと
 たとへ千箇億衆の

三三、

法は性なし一切諸法は本來虚
 空の如し佛性とも地獄性とも言
 へぬ。隨いて言はざるは衆の狀態に
 依りて何世でも存在する。十界でも
 百界でも化合せる白紙的アブス
 トラクトのものである。縁に依
 つて分ちされ縁に従つて組にも
 定にも成る。佛を縁とすれば佛
 が現出する。蓮華に佛が現出する。蓮
 華に入りて佛に縁すれば佛現出
 す。是から蓮が榮える。人にも
 本來佛性ありと言ふ事は佛を縁
 とする事が條件である。信仰を
 忘れたる佛は縁は絶たぬ。蓮
 華には善なし左方の手と出合つ
 て毒が出る。

三八、

諸法蓮華に住すれば蓮華の
 通りに絶すればと解すれば足ら
 ぬ。氣まぐれに哲學を考へて佛を失
 ふ勿れ。蓮華体内に住する者身
 はこれ安全にして、此はこれ確定
 ならんと言ふのである。
 有難一因縁に縁するもの。
 安穩處一蓮華・因に出づ。

- 三七、法は性なし縁に依り
 佛は皆よく知しめし
 佛種を育みたまふにぞ
 - 三八、諸法蓮華に住すれば
 無常ながらに常住を
 耳にも目にも値ひ難く
 導師は作佛の根本を示し
 - 三九、現在無数の佛たち
 十方世界に在せども
 たゞ衆生を安穩處に
 諸法の眞實相を知り
 - 四〇、種々の道を説きたまふは
- 實には蓮華の一佛道
 皆成佛の縁なるべし
 性を理す理を
 この大法を縁として
 道常住に榮ゆらん
 その實相は有爲の世の
 教へたまへる姿なり
 遣へども知らぬ衆生のために
 方便説法なしたまふ
 天人衆に供養され
 衆の意趣は皆一つ
 導きたまふばかりなり
 無量の方便力をもて
 畢竟一佛道のため

四一、人の行念業、欲力

種々の因縁、譬論、言辭もて

四二、諸佛の如く我もまた

種々方便の故もて

四三、常に衆生の欲性を觀

闡くものは皆歡喜して

四四、六趣衆生の様見れば

生死の險に迷ひ入り

深く五欲に執着し

あたらし心の眼も瞑み

斷苦の道も得聞かず

苦を以て苦を逃れんと

四五、この有様をうち觀やり

衆生濟度の願を發し

諸根利鈍を知しめし

隨應引導なしたまふ

衆生を安穩ならしめんと

佛道宣示する者なり

方便して説き教ふれば

道に來らぬ者なき

心貪しく福慧なく

斷え間なき苦に惱みつゝ

常に貪愛に蔽はれて

力と頼む佛は見えず

邪見は邪見を増長し

安き隙なき哀さす

大悲の心やみがたく

我は三界に身を現せり

四四、
苦を以て苦を逃れんと、
こりもせず浮世のやみに迷ひながら
身を思はぬは心よりけり
(四行法華)

四五、
三界一盤露門教で欲界色界無色
界と世間を見た、その語を轉用
して世間を三界と云ふ

身を現せり、出世の一大事因縁

四六、

信ぜしめん、入信示開てきへは
信は信の所に相當する。

四六、はじめ道場樹下に坐し

つらつら思ひめぐらしぬ

甚深微妙のわが智慧を

四七、その時梵天帝釋天

眷屬百千萬の衆

我に説法を請じけり

四八、惟ふに我もし初より

成佛救世とのみ説かば

不信破法の罪を作り

見るも憂ければ我むしろ

もとの滅度に入りなまし

四九、さはさりながら往昔の

次第を思へば我もまた

後一廣さうら明けん

三七日がその間

衆生は鈍根愚痴瞑盲

如何にしてかは信ぜしめんと

護世の天王自在天

合掌恭敬禮拜して

たゞ大道を讚美して

迷ふ衆生の常として

三惡趣に墮せんこと

説かて止みまん疾に

諸佛の隨宣説法の

まづ三道に分別して

方便ぞ佳きと思ひ入る

四八、
信に救世、天は六趣輪回の迷衆
中

五二、
三と説く。五明道、縁覺道、菩薩道を個々の道として説く。蓮華一界道を善く前に元づ三と説いた。

五三、
菩薩——此は三道の菩薩に非ず、蓮華一佛道の菩薩勝力を極る菩薩。蓮華三位の菩薩

五四、
因縁なり——別けて漏世に出現したまふ。

五五、
五人の僧——第二巻圖に註す

五七、
又しき間——深備教員も長い時を費して、もう善からう。諸菩薩に成つて呉れ、三位の内菩薩が足りまいでは困る。

五八、
時到れり——五境で「來にけらし」と言つたが今は正に來た。

五〇、時に十方の諸佛たち俱に妙なる御聲に

五一、善哉釋迦牟尼大導師

善く衆生に示さんと導きたまふ大悲かな

衆生に悟り得させんため

五二、小機は小果に満足して

隨宜に三道諸果を説く

二果に安穩らひたる人を

人々菩薩に進みなば

五三、舍利弗よ我この妙音を聞き

大道までの小道と

方便説法することは

五四、我はかやうに思ひ定め

わが面前に現れて

護め慰めて言ふやう

御身無上の法を覺り

隨宜に方便分別して

我等もまたこの妙法を

まづ分別して三と説く

作佛と説けど信ぜぬゆゑ

我等三果を説くと雖も

敢へて菩薩を樂はずなり

引いて佛果を得さすべし

南無と唱へて喜びぬ

諸佛は保證したまへるぞ

惡世に出でし因縁なり

樹下を立ち出で波羅奈に往き

五人の僧を教へしかど

言語に宣示し難ければ

道に區別はなけれども

弟子に差別はなけれども

五五、煩惱の衆生を導きて

涅槃の道を説きたること

五六、その効ありて嬉しさよ

佛の方便説法を

慢心もなく恭敬して

皆わが前に集れる

五七、これ等奇特の人々は

如來出世の本懐は

今は正しく時到れり

五八、鈍根小智の人々や

もとより諸法の實相は

隨宜分別して説きぬ

方便なれば涅槃とも云ひ

悟によりて羅漢とも名く

生死を出離させんため

なかなか久しき間なり

佛子を見れば今ははや

聞いて涅槃を得し身にて

ひたすら佛果を希ひ

その数無量百千億

すべて菩薩と知られたり

作佛の法を説かんため

著相憍慢なる者は

心いふらふ事もしし一菩薩の
出来れば蓮華が構成されぬ
四六でも如何にせん」と心配
した。今は安心して、是船は本
身の修業也。
方便を捨き一菩薩に成つたなれ
ば最勝菩薩教の方便は不要な
り、是から菩薩実用向きの方便
だけによつてそれが無上道であ
る。是を菩薩の心は勿れ無上道
は蓮華の中の一瓣蓮のその一節
なり。但し蓮華を空傳する行は
無上道なるべし。

六二、
諸佛世に出でまさんこと
たまたま出でますことあるも
佛は説かせたまへども
會座に列ること難し
受け聴くことは難からん

（それの花は松の花十年に一度
（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（百）

（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（百）

この大法に稱ふまじ
蓮華の相現れぬれば
方便を捨き正直に

五九、この法を聞き成佛を
千二百の羅漢たちも
皆諸共に作佛せよ

六〇、三世諸佛の説法も

儀式次第は異らじ
後無分別賢を説く

六二、諸佛世に出でまさんこと
たまたま出でますことあるも
佛は説かせたまへども
會座に列ること難し
受け聴くことは難からん

菩薩大願堅固にて
思ひわづらふ事もなし
たんだ無上の道を説く
疑はぬこそ菩薩なれ
自ら菩薩の行を修し

わが今宣ぶる説法も
初は分別權を説き

（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（百）

六三、汝等疑ふこと勿れ
たゞ一實の法を以て
我が所には聲聞なし
今は諸佛の秘要なる
衆生濟度の願を發し
求むる眞の菩薩なり

六四、五濁惡世の衆生は
佛道を求むる心なし
法の威徳の義に迷惑ひ

一切天人樂ふにも
咲きて知らぬが如くなり
唯一言も讚美せば
功德に勝る功德あらん
優曇華よりも珍しき
我は諸法の王なるぞ
菩薩を教化するゆゑに
汝舍利弗聲聞衆
この妙法の功德を知り
佛の知見方便力を

常に諸の欲に染み
將來世の惡人は
不信破法の科により

六四、
賦の上り、宣傳せよ。六二項に
一言、讚美とあるが、今、宣傳する
万箇に廣めよと教ふ。

六五、

疑念を除きぬべし。四で吐かれ
た理由もよく分つたらう。それで
宜しい筈で歸しな。
作佛は一定、二蓮の人も作佛す
な。

三つの川一つの海となることは
舍利弗のみぞまづ流りける
(釋教大師)

六四

三惡趣に墮落せん

敬ひ信ぜん人のため

六五、かく驚億の方便もて

諸佛如來の御意趣は

汝等今ぞこの調を

皆大に歡喜して

慙愧清淨の心もて

廣く蓮華を讀めよ

隨宜說法なしたまふ

習學せば知り難し

解りて疑念を除きぬべし

いづれも作佛は一定と知れ

第七章

一

照して濟度するや、我等に授記
下らぬ事から考ふるに我等が
習つた世尊の教にウソが何ん
ではあるまいか。佛を疑ふ疑持
本據、何に依るか大覺を成就せ
んとするに佛の法力を頼みに一
無道實行より外なし。それは蓮
華と名くる城を據とするを
根據とせざる大道は各の次にし
て悉くし學なり。第六章を讀い
た舍利弗は「法界諸佛の法威の
下に心を一にし力を合せ、一定の
理想に進むべきである。自分の
み悟り願では相濟まぬ」と云ふ
事を預解したらしい。蓮華は三
位一心の法界であるが、眞の大
道はこの中にのみ任るのである。
舍利弗が預解して次の偈二句佛
の功徳の中に住み」と悟つたら
尤づ嬉處である。
我等は眞の佛子、佛を親と稱ふ
杖柱と思ふ信心。

第七章 舍利弗の領解

一

その時に、舍利弗尊者は、歡喜踊躍し、起立合掌し、尊顔を瞻仰して白す。
我等は今如來の眞實を聞き上り、未曾有の利益を得たり。願れば我等昔佛に
從つて教を聞きし時、諸の菩薩は授記を被り、我等はこの事に預らず。如來の
無量知見に漏れたりしを甚だ遺憾とし、山林樹下に於て、坐行經行しつゝも、
常に思ひけるは、我等は如來の教に依り、皆悟道せり。然もこれ果して我等を
濟度する大道なりや、疑なき能はず」と。然るに今知る、これ我等が咎にして
世尊の偏頗にてはなかりしことを

我等は若し大覺成就の本據を示さるるまで、正直に待ちてありせば、必ず眞
の大道を以て厚脱せられたらまはしを。愚にも、佛の隨宜方便の意趣を解せず、
初の佛の教を聞いて、偶然信受し、輕忽に思惟して證を取り果を得たるなり。
世尊よ、爾來我等は終日竟夜、この事を悔い、毎に自ら責め苦みしが、今日、

十カ一 第一章傳二に註す

解脫一 八解脫あり、第十ニ章傳二に註す

十八勝一 佛の勝れたる徳を教ふるに色々な場合に色々言ふが十八教ふることもあり

- 一、身無失
- 二、口無失
- 三、念無失
- 四、無漏根
- 五、無不定心
- 六、無不知已捨
- 七、彼無説
- 八、精進無減
- 九、念無減
- 一〇、慧無減
- 一一、解脫無減
- 一二、解脫知見無減
- 一三、一切身業隨智慧行
- 一四、一切口業隨智慧行
- 一五、一切意業隨智慧行
- 一六、智慧知來世無礙
- 一七、智慧知來世無礙
- 一八、智慧知現在世無礙

五、人を助くる一救世する

六、大道に入る門一
 今ど聞く鹿鳴く野々に響はれて
 もとこし道もへだてまじとは
 (鹿鳴、野辺は鹿野鹿の小道説法)

未だ曾て聞かざる妙の法音に接することを得て、始めて諸の疑惑を断除し、身意泰然、快樂安穩なり。世尊よ。我等は眞の佛子なり、佛口に生れ、法化に育ち、佛法の分を得たり。自今以後永久に、蓮華に安住して作佛を期し、衆生濟度を願とせん。

- 一、妙の法音を聞きまがり
心に歡喜充滿し
 - 二、たゞに御聲を聞くにすら
ましてや尊き法を聞き
 - 三、我等は漏盡と思ひしが
御教により清淨と
 - 四、山谷林間に坐經せし
小果を取りて我足れりと
無漏の悟に入るのみにて
三十二相八十種好
- 未曾有の利益を覺えたり
疑は皆除れぬ
人は惱を除くなり
誰かは漏れん大覺に
なほ餘ある憂き身の雲
拭はれしこそ嬉しけれ
その間々に悔しきは
自ら欺く罪なりき
無上の道に進まずば
十刀、解脫、十八勝

大勢威徳を得んことの

五、佛が大眾の中にまし

衆生を利益したまふを

我の女悟り得頭にて

いかで功徳のあるべきや

六、世尊は常に諸の

我等が漏るゝは何故ぞ

心を碎く間にも

無漏の教は方便にて

さて道場の限なき

七、我もと多く邪見に執し

世尊がそれを憐みて

聞いて邪見を除き去り

大悟徹底と思ひぬる

頼も永く失はん

御名十方に轟きて

見上れば羨し

人を助くる業なくば

我過てり取けり

菩薩を稱歎したまへど

問ひまつらんと日毎に

教は隨宜に説きたまへり

大道に入る門と知る

廣さを見れば恥しや

外道の人の師たりしかば

涅槃の道を示されしを

無漏空想に安堵して

ことこそ今はあさましき

八、大悟は佛の果報なり
 菩薩佛道を成就して
 天神人の衆にまで
 大智神通力をもて
 大悟の人とはいふべけれ
 佛の深き御意を

九、初は佛語を疑へり
 魔や變化して世尊となり
 されど佛はなほ慈に
 別けて異る説もなく
 御心察く大海原の
 畏む外はなかりけり

一〇、過去の諸佛の御教も
 今の世尊と異らず
 後諸佛の御教も
 出世出家成道し

諸道は作佛の道ぞとは
 我を惱亂するならんと
 方便説法したまひて
 たゞ修行して作佛せよと
 静けき如くにましまししは

九、異る説もなく一佛道とて
 も方便を廢するものではないと説
 西諦も十二因縁も六度道も説
 きになる、然しその間異なる事は
 佛に歸信せよ法力を承けて我に
 導へ救世を悦の生活とせよ作佛
 を期せよと仰せらるゝ点である
 舍利丹は冥物に氣付いて今更の
 如くそれが強度に肝に響き響ん
 だ。つまり説は異らざるも心持
 次第で蓮華の大蓮に叶ふことに
 成る。

一一、佛の功德の中、法力來至任する
 蓮華の中に安住する信にせども
 善い善い徳に入信示開中の徳だ
 から示を受けたる菩薩に成るので
 ある。曰に言、大覺成就の根
 據本城に住す。菩薩としての一
 對ニ

自ら作佛の範を示し
 衆生を導きたまふ事
 無上の道の鏡なり
 わが疑ど願なりける

一一、柔和深遠微妙音
 聞いて心に大歡喜
 佛の功德の中に住み
 天人に敬はれつゝ
 菩薩を教化し申さんことを

隨宜方便願なく
 すべて佛の實の慈悲
 などか世尊が魔におはさん
 清淨眞實無上法
 疑を断ち安穩に
 後は必ず作佛して
 常に無上の法を説き
 固くぞ誓ひ上る

二

昔汝を教へ一諸五尊國にて、舍利弗は我等已に世々佛の教化を受けし朝と云った。今佛も前世に舍利弗を教へたと仰やる。

我が法威の中一我が授記我が法力の勢力範圍統が代

三

親近供養皆履行一この二つは作佛資格の必須條件なり。本經中別む所に之を見る。佛の二對二なり。即ち親近供養が第一であるけれども、それから皆履行が生じて正行せば蓮華胎に成らぬ。

一 佛は舍利弗に告げたまふ。「吾今天人沙門婆羅門等、大衆の中に於て宣言す。舍利弗よ。我昔汝を無上道に入れんがため、二萬億の佛と現じ、方便して常に汝を教へしかば、汝は日夜、我に従つて學びき。この因縁を以て、汝は今また我が法威の中に生れたり。」

舍利弗よ。汝はかの時無上道を志願せしが、この頃悉くそれを忘れ、涅槃を得て、自ら満足の想をなせり。されば、我は汝に昔の願を憶ひ起させんと思ひ、諸の聲聞弟子のために、妙法蓮華教菩薩法佛所護念を説く。汝今よく領解したれば、成佛已に決定す。これ我が甚だ喜ぶ所なり。

二 舍利弗よ。汝は將來無量不可思議劫に亘りて、數々王子と生れ、若干百千萬億の佛に親近供養し、蓮華を奉持し、無上道の願堅固に、菩薩の行を究うして後、作佛することを得べし。名を華光如來佛世尊と曰ひ、國を離垢と稱す。

三角は作佛の方に通つて行かぬ。作佛することを得べし。五ター本師の如きを授記と言ふ。作佛せる人の法威の盛なるは所化のものを授記する事まで深きし世々一佛道の美を濟す來世蓮華を成へてある。その外文々々如第六、第四と照合して、是れ理徳の蓮華の相なるに注意せよ。是の如き世界を念願するに注意し、佛の文明開化の世界相。

正法一正法とは蓮華堅固にして法威盛なる事なり。目に見えぬ佛の心の活きて居る事なり。蓮華の思想明瞭なるに依つて法威盛なり。法威盛にして進行は進行はれ、國安し。立正安國とはこの正法を立つること。佛の威光を輝かすこと。佛の心を活かすこと。故の善し悪しを言ふより先づ佛威が根本。大美名分の思想。

國土平正にして清淨莊嚴し、瑠璃を地となす。八叉の大路あり、金繩兩側を界し、寶樹整列し、華果常に多く、安穩豐樂にして天人榮えん。華光如來出世の時、さして惡世にあらねども、佛は本願なるがゆゑに、まつ分別して三道を説き、後一道に歸入して、大に菩薩を教化せん。代を大寶莊嚴と名く、菩薩を國寶とするがゆゑにこの名あり。菩薩多きこと無量無辺、算數譬論も計極し難く、佛の智慧ならでは、その限を知る能はざらん。菩薩行かんとする時は、寶華足を承ぐ。この諸の菩薩は、華光の時、始めて道心を發せるものにあらず。皆久しく善根を植ゑ、無量百千萬億の佛の所に於て、淨行を修し、常に諸佛に稱歎され、よく佛慧を修めし者なり。大神通を具し、一切の法門を知り、算直無偽、志念堅固、よく華光の佛事を助く。舍利弗よ。華光佛の在世は十二劫にして、人民の壽命は八劫ならん。佛は滅度に臨み、堅滿菩薩に授記して、華光安行如來佛世尊と名け、その國の莊嚴等、皆華光如來の國の如くなるべしと説かん。舍利弗よ。華光如來の滅度の後、正法世に住すること三十二劫にして、像法世に住することまた三十二劫なるべし。正法の時法威照曜し、佛道正し

偈

王家に生れ一統尊も王家出身なり
佛に成る程の人は本来華いと
言ふ者、方と成世の大願の故に
衆生に益著せすと云ふ意とに意
味あり。

大菩薩摩訶薩所遊一華光佛の世は
釈尊ほどの慈世に非ず、佛事を助
くる菩薩多しとて舍利弗を祝す

く行はれ、蓮華體を保つ。像法の時は法光闍維し、佛道漸く衰へ、蓮華影微なり。

- 一、來世に佛ましまさん
王家わうけに生れさせられしが
樂華らくわを捨て、城を出で
無上の法に安住し
十力等の徳を得て
無量の衆生を度したまふ
- 二、代を大寶莊嚴と曰ひ
清淨の地に瑠璃を敷き
七寶しちほう雜色ざしき樹じゆ々々茂さかり
皆諸佛に親近して
志念堅固の大菩薩
その數無量無邊なり
- 御名を華光如來と曰ふ
救世の大願やみがたく
無救の佛に親近し
菩薩の行を具足して
無教劫を経て成佛し
國を離垢と名くべし
金繩をもて道を界し
華も果實こくみも多からん
衆の徳を修めつる
今は華光の所化として

三、壁光の在世は十二劫

正法滅び盡き、時は抗し難きも
の早し過し何時かは正法衰ふ。
之を永滅せしめんとする努力が
立正運動である。立正の方法如
何と言ふに蓮華を弘むべきのみ
但し弘むることが実は中々大つ
かしい。まごまごして居れば像
法も亦になり益々弘め難くなる。

- 滅後三十二劫まで
よく衆生を濟度せん
像法猶も世に住り
佛の舍利を廣く分佈し
かの佛とは汝なり
清淨莊嚴の蓮華の世に
いかに衰おとろきことならずや
- 民の壽は八劫なり
正法世間に住りて
正法滅び盡きぬれば
三十二劫がその間
天人昔く供養せん
大願成就の魁さきがけして
倫たかし匹し希まれなる面足尊

三 帝釈梵天一衆尊の人々は第一身
の通り會座に列して居る。會座
から天に命令が通じて、天衆天衆
を兩した訳になる。

三 その時に、四部の衆、僧俗男女、天神、人、非人等は、舍利弗尊者が、面前、
授記されたるを見て、踊躍歡喜し、各上衣を脱いで佛に供養せり。帝釋梵天無
数の天子は、妙華を雨し、妙衣を散じて、また佛を供養せり。妙華妙衣虚空に
回轉し、その中より、百千種の天樂一時に聞ゆ。
諸天は相語って曰く、「佛は昔波羅奈に於て、初說法ありしが、今や無上最大
の法を説きたまふ。」

目録

一、嬉しさよー覺を覺がず覺り得るを確信す。歡喜生活。

三

佛自ら導きたまふ。高き處に先立つ人と見るからに。後も行くとて道を知りて。 (急録)
見佛の功德：佛の出世に生れ會ひ直接指導を受けて得たる功德

一回一回し向ける。所得を私せず佛道に貢獻する。

第九章

涅槃を究竟さす。悟の極地に達す。

三 譬めて「普通我々なら」約束が違ふかやないか敬信を著つた處に」と立腹する所。方便説法。目的の爲め必要適當の手段

- 一、佛は昔波羅奈にてまた生滅を分別してしかも甚深微妙の法は許させたまはざりしかど嘉納あらせて眞實を蓮華の中に一切の佛智は難信難解なれど我等はやがて覺り得る舍利弗が授記されしを見て我等も後には作佛して佛の道は遙にてされど佛が御自ら巧に導きたまふゆゑこの悦よろこびにいざさらば
- 二、始めて四諦の教を説き遠離の道を説きたまへり久しく學びし我等にさへ敬信を誓ふ誠心を明されしこそ畏けれ佛の功德ありとかやこの大法に逢ひぬれば身の上と知る嬉しさよ皆人隨喜し上る
- 三、世尊と言はるる身とならん行けども行けども累かさね知らず隨方便説法して衆生は安穩やすやすく行道ぎやうだうす我等が先に積みし福をも

今見佛の功德をも

皆佛道に向向せん

第九章 火宅三車の譬論

一 舍利弗尊者白す、「我は今疑悔全く除れしがゆゑに、親しく授記を被ることを得たり。然るにこの會の心自在なる千二百の聲聞中には、昔學地に住せる時、佛が『我が法は能く生老病死を離れて、涅槃を究竟さす』と、教へたまひしを聽受して、各自勉學し、我見及有無の見等を捨て、生死を出離し、已に究竟涅槃を得たりと謂へる者もあり。今世尊にこれ究竟涅槃にあらすと聞上り、恐らく皆疑惑に墮せん。善哉世尊。願くば四衆のために、その因縁を説いて、疑悔を除かしめたまへ」。

二 三たびまで請うて敬信を誓へるに拘らず、淺智の者は、あまりの大説法に驚き、己が悟に著し、解脱を惜みたるなるべし。佛は怒みて舍利弗に告げたまふ。「我先に言はずや、諸佛世尊が種々の因縁譬論、言辭を以て、方便説法なした

習者一此所は唯軽く皆さんと云ふ意馬鹿でない限り。

まふは、皆菩薩を教化して、佛知見を得させんがためなり』と、汝の懇請あるに依り、我今譬諭を以て、更にこの義を説明すべし。諸の習者、解することを得ん。

ある國邑に一老大長者あり。無量の財寶と多くの田宅僮僕を蓄ふ。廣大なる家に、多衆の眷属凡そ五百人を住はす。朽ち故びたる堂閣は牆壁傾落し、柱根腐敗し、梁棟危く傾けり。四面俄に火起りて、この宅を焼く。長者の子との數五十、未だ宅中にあり。長者は火を見て大に憂慮し、思ふやう、『我は安穩にこの家を出でたり。然れども、子供は皆火宅の中にあつて、嬉戯に樂著し、危急を知らず、覺らず、驚かず、怖れず、火難は身に逼れども、患ふる心なく、出づる意なし。之を救はんがためには、わが身手の力を以て、引き出すか、若くば花盆机案の珍阜を示して、誘ひ出すか、二途あるのみ。今この家は、出づるにたゞ一門にして、而も通行困難なり。子供等は遊戯に耽りて、自ら出づることを知らず、過たば眼前火中に墮落せん』と、直に家に入り、危急を告げ、『汝等速に出でよ』と誨す。

覺らず驚かず一驚かて今日もむましく暮れぬなりあはれ浮身の入相の空(唐文上人)

一門一どせ誰でも通らねばなすめこの一門大道へ出づる門方便に在るべし。

父が憐愍して、畏の如く諭せども、子供等は嬉戯に樂著せしがゆゑに、肯て信受せず。朽舎の厭ふべきを知らず、火の怖るべきを思はず、畏はれんとする自身を顧ず、東西に走り戯れ、父を見れども意に介せず。

長者は、この宅は己に大火となる。機を失せば、子供及我共に焚かれまん、猶豫すべからず。されど、我もしわが身手の力を示さば、子供は驚きて逃げ隠れもせん。寧ろ方便を設けて、災禍を免れさすべし』とて、繩に放へて曰く、『希有の好物あり、今もし取らねば後必ず悔いん。種々の羊車鹿車牛車は最も遊戯に適す、悉く門外に列りて汝等を待てり。速に出で、好に隨つて取れ』と。子供はこの詞を聞き、競つて父の所に馳せ、たちまら共に火宅の門を出で、廣き大路に到りて、皆安穩なることを得たり。各々父を繞りて、『父よ先に約したまひし羊車鹿車牛車を賜れ』と請ふ。

その時に、長者は子供に三車の何をも與へず。たゞ等しく與へしは、殊妙第一の大車なり。高廣にして衆寶莊嚴し、欄干の四面に鈴を懸け、幢蓋を張り、寶玉を鏤め、寶繩を絞り結めて、諸の華璽を垂れ、綵綵を敷き、丹枕を置き、

駕ぐるに白牛を以てせり。白牛は膚色充潔、形体殊好にして、大筋力あり、歩行平正にして、疾きこと風の如し。また多くの僕従をも侍衛させたり。長者の意は、自ら有する財寶は無量にして、府庫に充溢せらるに、何ぞ下劣の小車を與へて、わが意満足せんや。この幼童は皆わが子なり、愛するに偏党あることなし。是の如き七寶の大車は無盡蔵にして、之を全國民に分與するも、なほ餘あり、況んやわが子に何ぞ惜まん、等しく與へて差別なかるべし、と思へるなり。この時、子供は各々大白牛車に乗りて、未曾有の歡喜を得たること、所望の三車に比すべくもなかりき。

舍利弗よ。長者が子供に珍寶の大車を與へしに、虚妄の罪ありとせんや。」

三 「世尊よ。長者は子供に火宅の難を免れて、その軀命を全うするを得させたり。假令一小車を與へずとも、なほ虚妄ならず。方便を以て子供を救濟せんとせる長者の意已に眞實なり。況んや、子供を利益せんと思ひて、特に最妙好の大車を等しく與へたるをや。」

四 「然り、汝が言の如し。如來もまた是の如く、一切衆生の父なり。諸の怖

生老病死憂愁苦惱

胸に滿る思ひだにも擧れずして

煙と云ふんこと悲しき

明日まではあるべき物と思はねば

今日晩鐘の告げ悲しき

いにしへは月をのみこそ眺めしが

今は日を待つ我ぞ悲しき

覺束なまだ兒ぬ道を四手の山

雪ふみ分けて就えんこすらん

運れ難し一金持でも何時か必ず

食乏になる等

大解脱を求めず
いまだか我身ひとつの出でかてに
改悔かすむ月を見るべき
(反即歸娑羅)

(いまだか我身ひとつの出でかてに)

畏、哀惱、憂患、無明、暗蔽を斷除して、無量知見、力、無畏を成就し、大神力、智慧力を以て諸善方便を具足す。大慈大悲にして、常に憐愍なく、善事を以て一切を利益したまふ。而も自ら朽ち故りたる火宅の如き、苦の三界に生れさせたまへるは、親しく衆生を引導して生老病死、憂愁苦惱、愚癡暗蔽、貪瞋痴を免れさせ、教化して無上道に入れたまはんがためなり。諸の衆生は、生老病死、憂愁苦惱の火に焼かれ、また五欲財利のために、種々の苦あり。或は貪著し、或は追求するがゆゑに、今生には苦を受け、後生には地獄、餓鬼、畜生ならん。もし天上又は人間に生るゝことを得ん時も、貧窮困苦、寒別離苦、怨憎會苦、是の如き諸の苦を遁れ難し。その中に没在して、覺らず、知らず、驚かず、怖れず、厭はず、歡樂遊戲を追うて、敢て大解脱を求めざることを、恰も火宅の中にあつて、東西に奔馳せるかの子供の如し。

舍利弗よ。佛はこの有様を見せなはして、思ひ計らせたまふ。我は衆生の父なり。その苦難を抜き、無量無邊の佛智慧の樂を與へて、眞の安穩處に自在にさせべきなり」と。然れどもまた、我もし直に如來の知見、力、無畏を讚美せば、

保任す一うけ合ふ、責任を以て保任する。
 根力覺定禪三昧一阿れも三昧の著の著むる徳目、根は五根なり、信根精進根念根定根慧根、刀は五力なり、破邪信破疑信、破邪念破取乱心破煩惱。

衆生を度し難からん。如何となれば、この諸の衆生は愚にして深く世樂に著し、未だ生老病死、憂悲苦惱を免れず、三界火宅に焼かれんとするものなり。いかでかよく佛の智慧を求むるの餘裕あらんや。如かず先づ方便を以て、苦を抜き、然る後、佛智慧を與へんには』と。舍利弗よ。かの長者が身手に力量あれども之を用ひず、たゞ怨に方便を以て三車を説き、火宅の子供を救済したるが如く、如來もまた力無畏あれども之を顧さず、たゞ方便を以て三界火宅の衆生を救済せんとして、三道の聲聞道、緣覺道、菩薩道を説かせらるるなり。故に如來は言ふ。汝等三界火宅に住して何の樂かあらん。粗弊なる色聲香味觸を食ふこと勿れ、もし愛著せば焼かれまん。汝等眞に樂を求めんば、三道の聲聞道、緣覺道若くは菩薩道に由りて、速に三界を出でよ。我は今汝等がためにこの事を保任す、ただ勤修精進せよ』と。また『三道の教は皆、聖者の稱歎したまふ所なり。これを修行する者は、自在無繫にして依頼希求の心なく、自ら無漏の根力、覺道禪定、解脫三昧等を得て、安穩快樂無量なるべし』と。如來はこの方便を以て、衆生を誘致したまふ。

覺は覺支にして覺の根なり、七覺支あり、念覺支、擇法覺支、勤覺支、喜覺支、輕安覺支、定覺支、行捨覺支。
 蓋は八正道より、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定、禪七別名すれど、要するに徳道の自安とするもの、第一、無常ニ項三十七道品に属す。

言諸道一佛を求むると云ふ点に於ては運單の菩薩と同様なれど、法力の加護を受け付けずして、堅固修行で行かうとする三道の菩薩、譬の都合上第六、第七の菩薩と暫く區別したもの。

佛智自然智一自然智は諸法實相その物、それ佛の物に成れば佛智第四章曰の所成の法である。

舍利弗よ。聲聞道とは、聲聞と成らんとする修行にして、習性の衆生が佛世尊に従ひ、教を聞いて信受し、一心に四諦を勤修精進し、涅槃を得んとして、三界を出づるの道なり。子供が羊車を求めて、火宅を出づるに同じ。緣覺道とは、緣覺と成らんとする修行にして、衆生が佛世尊に従ひ、教を聞いて信受し、一心に六達道を勤修精進し、一切智佛智、自然智、無師智、如來知見、力、無畏を以て、無量の衆生を愍念安樂し、天人を利益し、一切を度脱することを得んとして、三界を出づるの道なり。子供が牛車を求めて、火宅を出づるに同じ。舍利弗よ。かの財寶無量なる長者が、子供の己に安穩に火宅を出でて、無畏の所に到れるを見て、特に三車の樂の何をも満足し、かつ勝りたる、大白牛車を與へたるが如く。如來は一切衆生の父におはし、無量億千の衆生が、佛の方便の門によりて、已に三界の苦、怖畏の險を出でたるを見ざるはしては、即ち

長大の鬼黒瘦裸形

咽鍼の如きの鬼

頭髪蓬に兇亂し

餓鬼畜生の飢渴に逼り

見るも無慙の極なり

三、主人はここを疾く出でて

わが家如何にと見返れば

四面一時に焰を上げ

墻壁崩れ落ちなんす

惡獸毒蛇毗舍闍鬼など

徳福なくて火に攻めらる

互に血を吸ひ肉を噉む

焼け死ぬるを見て諸惡獸

餓鬼の頭に火燃えて

嗷嗷叫呼し食を求む

首牛の如きの鬼

人肉狗肉を噉ふあり

窓より四方を闚くなど

安穩の地を得つれども

忽然として火起り

棟梁椽柱爆裂して

鬼神は叫び鳩槃荼周樟て

怖れて穴に隠るれども

さすが苦惱のあまりにや

野干の屬のいち早くも

競ひ來つて取り噉ふ

熱惱悶走するもあり

毘舍闍鬼一梵志ゴシヤリチヤカ
人及五穀の精を食ふ鬼

げに怖しき焦熱境

四、長者の子供三十人

衆難逼れる身を知らで

父は火宅に走り入り

ここは悪鬼毒虫多々

鳩槃荼鬼や百足類

憂怖苦惱の絶間なし

大火せまりて焼かんとす

諦せど子等は怖れず知らず

出でずば今にも焼かれまん

さも悉に吉げけるは

今門外に裝備へたり

次郎の好む鹿車

望に任せ得さすべし

深くこの家の内に居て

遊戯に耽る愍さよ

聲を限に呼びけるは

毒蛇蛇蟻又は夜叉

飢渴に逼り荒れ狂ひ

それさへあるに今はまた

患苦はやがて身の上ぞと

出づる氣色もなかりけり

かくてはやまじ親の慈悲

珍寶殊好の三種の車

稚子には羊の車あり

太郎の喜ぶ牛車

疾く出で來り來り遊べと

聞くと等しく子供等は
 火宅の難を免れて
 六、長者はつくづく見守りて
 親の心知るや知らずや
 危き難を免れしは
 子供は父を圍み繞り
 約の如くに賜れと
 七、父には無量の寶藏あり
 なじか劣しき車を典へん
 種々の寶をちりばめて
 圓圓の欄に鈴をかけ
 錦綵る衆雜の
 眞綿の褥敷かに
 肥壯多刀の大白牛
 遊戲を捨てて馳り出で
 廣き大路に到りけり
 あはれや稚な無智のもの
 わが方便に誘はれ
 せめてもなりと座に直れば
 我等は出でたり三車はいづこ
 しきりに請ふぞ突止なりける
 故に墮ひ來し子等に
 金銀、瑠璃、硃、碼、碯
 飾れる數多の大車
 金繩珠網を上に張り
 華の瓔珞虚々に垂れ
 純白の氈を上に蔽ひ
 形体よきを擇みて曳かせ

乘りて四方に遊行
 此の法は三つの車にかけしかども
 一つの法のためにしは曳く
 (檀羅正水縁)

九、
 この三界は我が家、佛が三界の
 衆生を救護教導するは家裏なる
 父が我が子供を救護教育すると
 同義である
 子を愛ふ親の愛しみのなりのせば
 かりの抱りにまよひはてまし
 (大駒高経住)

從者も多く衛らせて
 望に勝る賜物に
 乘りて四方に遊行しつゝ
 八、聞くや舍利弗この譬
 佛は世間の父にして
 深く世樂に著せるは
 衆苦充滿の三界は
 生を病死憂患の火
 如來は一人三界の
 園林閑地に住せども
 九、この三界は我が家にて
 父ならで詰か救護せまし
 出でよ出でよと誨ふれど
 子供は信受せぬゆゑに
 一人一人に興ふれば
 子は極なく歡喜びて
 快樂安穩自在無礙
 故もまたかくぞかし
 衆生は皆その子供なり
 稚兒の遊戲に耽るが如し
 火宅の如く怖しく
 熾然不息の姿なり
 火宅を離れ安穩に
 衆生のことを懸念ある
 一切衆生は吾が子なり
 そこは患難多ければ
 深く五欲に貪著して
 遠離涅槃の樂を示し

作佛は疑なかるべし。日ひのやうに疑念に墮した人々よ。佛を父と慕んで一佛道を修することを知らば、それで善い。作佛疑ふに及ばぬ。

行けやわが道場！佛が實地に親生清度なしたまふ場所に行つて佛と一體に成れよ。華はせよ。無上の蓮に遊ばせよ。宝車に乗つて勇ましく。

方便の中に実智！然し方便は捨てられぬ。方便は佛の實の智慧が動作したる者であるから方便中に実智を習得し得る。佛を信じて修行する者は道の大小を問はず。皆菩薩なり。安んずる行とて漸々に進歩するを要す。

苦の三界を脱れさする
佛子等心決定し

縁覺菩薩となりぬれば

やよ舍利弗よわが本意

今の譬諭にて解りなば

一〇、微妙清淨無上法

禪定、慧、無畏、三昧等

諸佛はこれを愛でたまふ

歸命頂禮すべきぞかし

聲聞菩薩諸共に

直に行けやわが道場

餘車と問ひては影もなし

衆生に賜る御心ぞ

方便は長者の三車なり

三道はわが方便なりき

三界を出で六通の

行く途は同じ大安穩處

たゞ一佛道なることを

作佛は疑なかるべし

無量億千の力、解脱

佛の因果の功德あり

一切衆生も讚め稱へ

出づるを得たる佛子等よ

この大寶車にうち乗りて

十方世界を尋めども

佛はたゞこの寶車をば

隨宜に説法なしたまふ

一一、諦に聴け舍利弗よ

我は汝が父なるぞ

子供を濟み出さんため

汝等聞いて生死を離れ

未だ大智を成就せず

佛の事を見習ひて

諸佛は常に方便の

教は方便なりとても

一二、愛敬に執し樂を追ひ

多くの愚痴の人のため

ままならぬこと道理ぞと

聞く人げにもと歡喜して

世は苦と知れど何故に

苦の因縁を離れ得ず

汝等は皆わが子なり

衆苦充滿の三界より

説きし涅槃の教をば

安穩已度と思へども

この上はたゞ一心に

佛の智慧を思修せよ

中に實智を示したまふ

所化の衆生は菩薩なり

ままならぬ世と身をかこつ

諸行無常と説きたまひ

同情も深き御詞に

救を得たる想あり

苦の生るかを知らずして

苦に苦を累ぬる人多し

一三、夢の間なり。悟れりと思つても上を見ればまた上には上がある。自分の信は夢の如きであつてと知る。研究は無限向上だおしまひに休つてはいけぬ。不安の本が行きつまることは不安の本佛を縁と頼む。佛の偉大に觸れずして自力のみにてやつたらば成りぬかぬ程度まで行くかも知れぬが結局行き詰る。佛力だけは頼んで置かざるは安全なぞそれが安全である。否それではそれは運車ではない。

一四、夢の正體。佛の刀を運車の狭の中に入れてボテ切符の衆生に押し置く。頭を懸けてお守りさせよ迷信に利用浪費するは。運

欲を應しとにあらねども
 貪欲をだに減しなば
 されば努めて貪欲を
 もしこの道を修行せば
 解脱を得べしと説きたまふ
 一三、
 苦を脱れて悟れりと
 進んで無上の道に入り
 安穩者とは許されず
 法に自在の力あり
 大安穩の縁となる
 佛を縁と頼むこそ
 一四、
 舍利弗よ我勤求して
 蓮華に込めて彼の世の
 意を用ひて開き演べよ

貪欲は苦の因と知れ
 苦の生るべき所なし
 断つこそ苦滅の道ならぬ
 何の苦もなく安穩に
 これぞ四諦の教なる
 思ふは夢の間なり
 諸法實相を尋ねずば
 我こそは大覺者にて
 世に出で衆生に近くは
 大事の誓あればなり
 眞に蓮華の要なれ
 得たる覺の正体を
 衆生のために置し置く
 妄に人に説く勿れ

華の中に法力を満すること度々
 説いて通れ

我及弟子菩薩を見る。衆生の一
 対二
 深智の人。理智言ふ人は深智然
 つて敬ひ信する人が深智上根の
 人

一六、
 佛の因縁を断つ。一人には世の
 佛の因縁があるのでは無い佛に
 換すればそれが縁と成つて縁を
 せられし如くに佛を信する
 若し不信法せば佛を排斥する
 誤て佛を信する因縁を断つ

聞いて隨喜する人は
 もしよく信受せん者は
 故を聞きし福ありて
 我及弟子菩薩を
 これぞ深智の人ならん
 信解なければ説くも詮なし
 一五、
 およそ聲聞縁覺の
 解するは難き事ならん
 信もてこそは入りけるを
 もしこの法に隨順ひなば
 已が智分にあふかし
 一六、
 かるがゆゑに舍利弗よ
 かたるまじきはこの法ぞ
 聞けども解せぬのみならず

不退の菩薩と知れよかし
 前世に諸佛を供養して
 利根勝るる人なるべし
 見る想して聞くあらば
 浅智の者は迷惑し
 智力を以てこの法を
 智慧第一の汝すら
 況してや餘の弟子聲聞の
 こそは信心の力にて
 憍慢我見ある人に
 五欲に著し識浅く
 或は聲覺疑惑を起し

あたら佛種の因縁を

蓮華の法を誹る人

憎み恨みする人の

今生終る間もあらせす

絶えぬ苛責に一劫を

思へばまたも廻り

かく無数劫をくり返し

畜生界に拘となり

人に惡まれ嫉され

生きては楚毒死しては尾石

佛種を亂りし罪報ならん

重きを買ひ挫たれ

からくもつなき暮すらん

毀謗不信の罪作り
一切世間に断ち盡さん

一七、佛在世にも滅後にも

若くは行者を輕めて

罪報如何と尋ぬれば

地獄の底に墮ち往きて

過ぎて壽命の終かと

更に一切の憂きめ見ん

やうやう地獄を出でぬれば

頑瘦疥癩の身を受けて

飢渴にせまり骨肉すかれ

被る責の數々は

一八、驢馬や駝駝の身となりては

水と草とに身命を

毀謗不信の罪作り

一切世間に断ち盡さん

一七、佛在世にも滅後にも

若くは行者を輕めて

罪報如何と尋ぬれば

地獄の底に墮ち往きて

過ぎて壽命の終かと

更に一切の憂きめ見ん

やうやう地獄を出でぬれば

頑瘦疥癩の身を受けて

飢渴にせまり骨肉すかれ

被る責の數々は

一八、驢馬や駝駝の身となりては

水と草とに身命を

あたら佛種の因縁を

蓮華の法を誹る人

憎み恨みする人の

今生終る間もあらせす

絶えぬ苛責に一劫を

思へばまたも廻り

かく無数劫をくり返し

畜生界に拘となり

人に惡まれ嫉され

生きては楚毒死しては尾石

佛種を亂りし罪報ならん

重きを買ひ挫たれ

からくもつなき暮すらん

野干となりては身體腐り

村の童子に追ひ廻され

死せりと思ふ程もなく

五百里あまりの長大軀

腹ばい寝り轉びつゝ

眠られぬ程の苦は

一九、もし人間に生れては

盲・聾・瘖

言説くとても人信ぜず

貪賤にして人に使はれ

人を利するも酬はれず

もし醫の術を學び得て

病はいよいよ増長し

また自が病むときは

面服盲ひて無慙にも

打擲致死の苦に逢はん

またも隣の身と生れ

耳なく足なく氣はほうけ

小田に啞はれ夜も晝も

蓮華を誹る罪咎め

姓・健・肘癰

鬼魅につかれて根絶く

口より臭き息を吐き

病及痛ふれども頼なく

所得は直に失はん

方に頼ひ診療すれば

人の命を失はん

救療看護の人もなく

佛種を亂る一過華を誹するは佛

種発生の因縁を亂す

罪報一感と爲せば惡業が起る

惡業が起る、佛性は何處か分ら

ぬか行善者の身の上にも現れぬ

之を罪報と云ふ、罪報の分變と

形式は佛のみ御存知で凡夫には

分らぬ分らぬから憐れむべし、小

さゝ感業でも何かの因縁で大き

くなり、罪報として返る時意外な

ものに成る事も有らう。

良藥却つて毒とならん
 窃盗抄劫さまさまの
 無教億劫過ぐれども
 難所に生れ心狂じ
 貧窮諸衰に身を飾り
 布にはあらぬ病の衣服
 我見は深く瞋恚は増り
 禽獸に異らず
 罪の数々數ふれば
 哀と思へざる人に
 利根智慧明了に
 佛道求むる人に説け
 善徳多く積みなせる
 常に慈悲の事を行じ

或は眷屬の反逆し
 横難咎殃隣なけん
 佛に値はず教を聞かず
 地獄を終の極とし
 水腫乾癆癰疽
 垢穢不淨の氣に包まれ
 始欲熾なることは
 皆これ誅謗の報なる
 劫を窮むも盡きすまじ
 妄に説くなこの蓮華
 多聞強識よく持ち
 昔諸佛に親近し
 深心堅固の人に説け
 身命惜まぬ人に説け

二一、
 身命惜まぬ一慈悲を施すに不惜
 身命。若し自分主觀の主観が通
 らぬで獲にさほるとて不惜身命
 したるはそれはいけぬ

恭敬の心一筋に
 凡愚を離れ閑に處し
 惡友を捨て善智識に
 持戒清淨明珠の如く
 大悟を求むる人に説け
 常に一切衆生を思ひ
 誠心をこの方便して
 大智を得んとて八方に
 信行すること第一と
 佛を敬ふ心して
 外道に迷はぬ人に説け
 舍利弗よかかる相により
 縁ある怨は彌多く
 皆よく信解すべければ

賢聖の師に近きて
 世のため思ふ人に説け
 常に親むる人に説け
 佛子の務圓滿にて
 義理人情を心とし
 諸佛を敬ふ人に説け
 衆生を導く人に説け
 識者きたづね學びし未
 思ひ定めし人に説け
 妙經卷を頂禮し
 求道の人を尋ねなば
 縁劫までも盡きさらん
 畏れず説けよこの蓮華

二二、
 畏れず説け一四續にて妄に人
 に説く勿れとありしは徳せざる
 人の誹謗の難を憐むゆゑなり
 今信せん人は多ければそれが終
 には畏れず説いて弘めよとなり
 舍利弗善大法遠囉されし形、誘
 せられては怨ぶを要す又方便を
 以て導くを要す。然れども誘す
 る人に強ひて蓮華を説くは逆手
 なり、本経は逆手は勸めぬ。

第十章 四大聲聞の領解、窮子の譬

一 その時に、須菩提尊者、迦旃延尊者、摩訶迦葉尊者、目犍連尊者は、佛の未曾有の教を聞き、かつ舍利弗尊者の授記されたるを見て、歡喜踊躍し、俱に起つて衣服を整へ、右の肩を袒ぎ、右の膝を跪き、躬を曲げ、一心に合掌禮拜し、尊顔を仰いで白す、「我等は僧侶の中の長老として、共に年朽邁に達す。耻しや、已に涅槃を得て満足と思ひ、敢て進んで無上覺を求むる能はず。久しく教を蒙りし効もなく、漸く體疲れ、心懈り、たゞ空、無想、無願を悦び。未だ曾て自ら神通自在に活動して、佛の世界を淨め、衆生を利益せんとは樂はず。世尊が我等を三界より出したまひし意趣を悟らず、教菩薩法なる蓮華に就ては一念の興味をも起さざりき。然るに今世尊が聲聞に授記したまふを見、また火宅三車の譬論を聞いて、忽然として悟り、大善利を得たるを深く慶幸す。無量の珍寶求めずして自づから到る。世尊よ、我等今譬を以て領解を述べん。」

行處一五歳七十歳以上

譬一前巻も本巻も縁と留を語るが、前巻では縁を明いて窮子を出し發す。本巻では縁の縁を縁こと全部略す。但し蓮華の縁を兩載したるは、一佛道と悟るは前の舍利弗と同様。

二 ある長者に一子あり。幼稚にして家を逃げ出で、諸國に流浪すること、十年、二十年、遂に五十年なり。困窮甚しく、四方に勞役して食を求め、果なき月日を送れり。父は憂ひて子を捜索すれども逢ひ得ず、せん方なく、ある都に止り住せり。この人大に富み、廣く諸國と貿易し、賣買盛にして利潤多く、府庫に無量の寶あり。子と離別して已來五十餘年、毎に子を念へども、人には之を語らず、たゞ心に悔み恨みて、思ひ續けけるは、「無量の財物倉庫に充溢す、然れども委付すべき子なし。我は已に老いたり、一旦死没せば、財物は散逸を免れず。もし愛子に遭ひて委付することを得ば、わが心は快樂坦然なるべきに」と。

世尊よ、かの窮子は求職展轉して、たまたま父の住する都に到る。ある大邸宅の前に佇み、傭役を乞はんとて、門内を窺ふに、主人は師子の牀に倚り、寶札に足を掛け、眞珠瓔珞を身に着け、諸の文武の士恭敬圍繞し、吏民僮僕白拂を捧げて左右にあり。寶帳を覆ひ、華鬘を垂れ、香水を地に灑ぎ、種々の名華を散す。前に寶物を羅列し、出納取捨珍また珍なり。是の如き莊嚴あつて、威

徳持に尊し。窮子は遙にその大勢力あるを見て、うたた恐怖を懐き、自ら此處に來れるを悔い、窃に思ふやう、これ或は王か、または王の等か、ここは我等が備はれて物を求むべき所にあらず。如かず速に貧里に往き、心安く力を釋にして、衣食を得んには。もし久しく止らば、曾迫酷使されん」と。疾く走り去れり。

長者、ふと見れば、年來尋ぬる子なりけり。心中大に歡喜して、願ぞかなへり。府庫の財物を今は悉くこの子に付與することを得べし。我年老ゆるまで、久しく財産を秘藏せしは、偏にこの子のためなり」とて、直に傍人を遣して、伴ひ還らす。窮子は捉へられて驚愕し、我に犯せる科はなし、何とて捉ふるや」と怒み喚ぶ。使者はいよいよ急に索きて還る。窮子は「罪なくして囚となる、我必ず殺されん」と、惶怖悶絶して地に躡る。父は遙に之を見て怒み、使者に告げて曰く、「我は強ひてこの者を要せず、止むること勿れ。冷水を面にそ、いで醒悟させよ。また何事も語らぬ」と。父は子の志意下劣にして、富豪高貴を難るを知るがゆゑに、自ら父なることを明さざりしなり。使者は命により、

窮人を遣す一側近の大菩薩をして無上道を説かしむるに響ふ。下根の衆は驚過きて信し憚す。窮子捉へられて恐怖するが如し。

三

徘徊一佛に懸依せず唯自力研究のみして居ては到底悟は開かれぬ。窮子が徘徊すると同様なり。

二人一發問、疑覽、小道の師に響ふ。匹夫の権根に違す。

伴ひ入れ、一入信承前に入り。

この邸に留つて、淫祭は究竟だと思つて

窮子を放し、欲む所に行かす。窮子は大に喜び、地より起つて貧里に往き、また以前の如く、衣食を求めて徘徊せり。

長者は今自ら父と名のるとも、子は信すまじきを知り、方便を以て引導せんと思ひ、密に形色憔悴して威徳なき者二人を擇み、命じて曰く、「汝等尋ね往いて窮子に告げよ、良き傭役あり、而も賃金は倍給されんと。窮子もし承諾せば、伴ひ來つて使役せよ。もし何の作業ぞと問はゞ、汝を傭ふは除糞のためなりと答へよ」と。二人は往いて窮子を求め、つぶさに上の如く告げ、巧に長者の邸に伴ひ入れ、まづ勞賃を與へ、安んじて除糞の業に従事させたり。父は子を見て怒みかつ憂ふれども、暫く已が姿を示さざりき。

さて、窓の内より遙にわが子を見れば、羸瘦憔悴し、糞土塵全、汗穢不淨なり。長者は自ら瓔珞柔軟の美服装飾を脱ぎ去り、褻弊垢膩なる衣を被、塵土に身を全し、右手に除糞の器を把り、勤直なる傭人の如く装ひ、役夫の間に交りて、常に「汝等一心に勤作せよ、懈怠あること勿れ」と言ひて、衆を勵ししが、次第に子に近くを得て、閑に告ぐ。「汝は永くこの邸に留つて作業せよ、他に往

悪徳を喜み入悟示開の悟まり
出入無難一阿羅漢の位

衆物を知る一入悟示開の悟まり
心性向上一示されたら宝を使用
させて呉れるかなる難有いぞと
大志が生じる。菩薩の位

くことを思ふ勿れ。價銀は倍加して與へん。諸の須要の品、金器、米麵、塩酢の類は、遠慮なく隨時請求せよ。また老夫もあり、汝に屬して助力させん。汝心を安んぜよ、我は汝が父の如くなるべし、憂慮すること勿れ。我は已に老大にして、汝は未だ少壯なり、而も汝はよく勤作して、取怠、瞋恨、怨言なく、餘の役夫に勝る。自今我を父の如く思へよ」と。是より字を與へて兒分となせり。窮子は是の如き恩恵を喜び、常に除糞の業に甘んずること二十年、漸く心合ひ、體信みて、出入も難なきに至る。然れども、なほ自ら雇傭の賤人と思ひて、依然下劣の心を捨つること能はず。

時に、長者は病に罹る。やがて死なんことを慮り、窮子を召し寄せて、「我は當家の主人なり。金銀珍寶多くして、倉庫に充溢す、汝はその價格を詳にし出納を掌れ。わが心是の如し、汝よく我が意を體せよ。今我と汝と異るなし、用心して失ふこと勿れ」と訓す。窮子は主人の教を受けて、府庫の諸の金銀、珍寶、衆物を悉く知れども、而もなほ自ら下賤の身と思ひて、長者の一餐にも預るを欲まざりき、爾後漸く長者の意を曉り、心性向上して、先の下劣心を悔ゆるに至れり。

この子に屬すべし一入悟示開の悟まり

三苦一苦苦壞苦行苦なり。現に苦するがゆゑに苦苦に云ひ壞滅するがゆゑに壞苦に云ひ先行き不明なるがゆゑに行苦と云ふ。

長者は自ら臨終の近きを知り、兒に命じて、親戚、國王、大臣、貴族、富豪を招待させ、客の悉く集れるを見て、起つて宣言して曰く、「我今諸君に披露す、これはわが子なり、わが寶子なり。某城中に居住せし時、吾を捨てて失踪し、漂零辛苦すること五十年なりき。その本名は某、わが名は某。爾來我は憂を懷いて、本城を出で、尋ね索めしも得ず。やむなくこの地に止り住せる間、たま會ひ得たり。これは實にわが子なり、我は實にその父なり、わが所有の一切の財物は、今皆この子に屬すべし。彼は先に庫藏の出納を掌りしを以て、已に悉くその品を知る」と。窮子は父の言を聞いて、大歡喜を生じ、未曾有を感じ、「我もと求むることなかりし此寶藏を、父の大慈悲方便により、今自づから得たり」と。始めて父の大恩を悟れり。

三 世尊よ。大富長者は即ち如來なり、我等は皆窮子に似たり。三苦のゆゑに、生死の中に諸の熱惱を受け、迷惑無智にして、小道に樂著せり。世尊は我等の下劣なる心性に順應して、小道戲論の除糞の業を課したまへり。我等が勤修精

機根を導つてたまふ。『宝鏡を護
の興ふる機序手段として除糞の
華も護せられたり。早く大を求
むる心を起さざりしは恐地なり
き。父の如く思ふ。我が意を休
せよ。』の訓言正に靈華に引導せ
んが爲め、信を勧めたまひしな
り。入信示開で悟に達する所
汝が如きは。自力で智慧の研究
はすれども佛の嗣子として大智
慧を譲らるべき信念なき者は菩
薩行は出来まい。成佛不可成。
但し不可成とは誠のの語にして
佛の眞意には非ず。信念なき者
をも信念あるやう導かすには置
かず。

進して涅槃に至れるは、窮子が除糞に勞役して一日の價を得たるに等し。我等
はまた、涅槃を得て心大に満足し、勤修の効頗る大なりと喜べり。世尊は、我
等が是の如く弊故に著し、小を樂ふを知しめすがゆゑに、方便の中に於て、如
來寶藏の智慧を示しつゝも、我等がこれを相承すべきものは、暫く明したま
はず。我等はまた、如來の智慧に就て知識する事を、諸の菩薩のために演説せ
しも、自ら如來の智慧を得んとは願はざりき。かの窮子が府庫の衆寶を知れど
も、その一物をも欲しと思はざりしに同じ。佛は方便を以て我等の機根を導か
せたまひしに、その間我等は自ら佛の子なることを悟らざりき。今始めて知り
ぬ。我等は眞の佛子なり。世尊は秘藏の佛智慧を憍惜なく子に與へんと思しめ
す。故に我等もし大を樂ふの心を生さば、佛は必ず大法の藏を開いて大道を示
し、我等に一切の法寶を取らせたまふべきを。また世尊よ。佛は今教は唯蓮
華の一佛道と説きたまふ。されば佛が昔菩薩の前に於て、小道を樂へる聲聞を
毀訾して、『汝が如きは成佛し難し』と宣ひしことも、寶は大道のための激励な
りき。かくて覺王の大寶は求めずして自然に至り、佛子の得べきものを、我等

は皆已に得たるを覺ゆ。

渴

無上宝珠不来自得
まよひけるにもほろ、月影に
求めぬ王や袖にうつりし
五十年まよひ來にけるはかなき
まよひのりそめの華の曇り
(前大阿耨多羅三藐三菩提)

一、悟れども

阿羅漢果に満足し

校記させたまふ畏こま

無上の寶聚不来自得

佛果は及なければと

望絶ちたる聲聞に

希有の御教今日聞きて

二、この慶を譬へんに

遠く諸國に流浪ふる

父は憂ひて此處彼處

逢ひ見んことのすべもなく

住家を定めいとし子を

しばし慰め居たりけり

無智の幼童家を出で

五十餘年がその間

巡りて尋ね索むれど

とある都に止りて

待つとし聞かば歸らんと

三、金銀珠玉藏に満ち

商賈往來諸國に偏く

歸徳報の福を増し

馬牛車乘奴婢多く

出づるも入るも利息あり

常に王舌に垂んぜられ

群臣豪族に崇めらるる
老いゆく身には亡きあとの
心一に歎きけり

富貴の身にてありしかど
財寶を譲る子のなきを

四、かの幼童は家を出で

よるべ渚の捨小舟
あはれ果なき身となりて
諸所に雇はれ若カしつゝ
富の都に著きにけり

父に別れて五十年

津々浦々をさすらひの
餓に疲れ病に悩み
めぐりていつか父の住む

五、良き傭もと思ひつゝ

ひそかに内を窺ふに
華の帳を廣くたれ
或は財寶を出納し
豪富尊貴に見えければ
かかる所に佇みて

大邸宅の門に立ち

主人は師子の牀に坐し
眷屬數多侍ひ衛り
或は簿冊に記すもあり
こはこれ國の大王か
見咎められなば憂きめ見ん

安易く傭はれ作かんと

六、姿形は變れども

驚く胸を押えつゝ
窮子を捉へ連れ歸らす
この人我を捉ふるは
主人の前に引きたてて
泣きつ叫びつ伏し轉べり

見れば確に尋ぬる子なり

長者は人を遣して
窮子は恐れ慄きて
備ふ用事のありと偽り
頭を刎ねんためならんこ

七、かくては父と名のるとも

善き方便もあらんこと
やがて眇目の身長陋き
搜ね索めて告げさせしは
不浄を除く業をせば
聞きし窮子は喜びて

子は信受せんやうもなし

長者は彼を放しやり
卑しき相の者を遣り
我と汝と共に雇はれ
多くの價を得べきぞと
長者の邸に伴ひ歸り

八、長者は穢よりうち眺め
 費積掃除に従事せり
 知らで鄙しき業に慣れ
 いとと慰然に思ひやり
 除糞の器を手に握り
 巧に窮子に近きて
 書は冷しく足を塗れ
 飲食不足する勿れと
 或は優しき慈父の情
 九、かくてあること二十年
 家の執事に取立てられ
 金銀珠玉の出納まで
 窮子はまほも門の外
 貧しき身分とあきらめて
 本より富貴の分ある身と
 高きを厭ふ心根を
 自ら弊れ衣を著
 役夫の長に身を肖し
 よく働けよ賃價は増さん
 夜は暖に寝具を敷け
 或は厳しく勤作を勧め
 いと懇にぞ誨へける
 日々の務にいそしみしかば
 寶庫の鍵を預りて
 皆悉く知りたれど
 草の菴に起き臥しの
 富貴を餘所に羨めり

自ら弊衣を著し、降つて人間に交
 る。兼ては善徳に成れ、善徳は漸
 に成れと向上せしめらるると同
 時に、穢に成つたらぬに成生に降
 つて大業を行じ何時までも倦
 なきが、通年三箇の履轉運用であ
 る。第六卷(因)に「諸佛は別け
 て新世に出でたまふ」とも有つ
 だ。

一〇、長者は窮子が漸に
 財寶譲る時到来りと
 朝野の名士を招待し
 始めて明し言ひけるは
 失踪はれてより五十年
 はからすここにめぐり来て
 二十年間働きたし、か
 奴婢家來まで悉く
 用は意のまゝなれど
 一、さまよひぬれば中々に
 下劣の身にて果てましを
 無量の財寶賜りし
 忍んで自ら弊衣を著
 致へ導く方便は
 富貴を樂ふ様を見て
 親戚及國王大臣
 かねて秘したる大事をば
 これは實のわが子なり
 遠近流浪辛苦の末
 我に雇はれ父とは知らず
 今日たわが全資産
 この子に譲り與ふべし
 窮子は永く貧しくして
 たまたま父の所に還り
 歡喜は譬へんやうもなし
 二十年間倦むことなく
 一切の寶を與へんため

海より深く山よりも

一三、佛は父の長者にて

大を見れども樂はざる

作佛を許したまはずして

聲聞弟子とし説きたまひしは

一三、我等佛の勅を受け

佛を知れよと教へしかば

日夜に勤修せしゆゑに

作佛を許させたまひたり

説きし我等は授うで

一四、窮子乃父の寶を知らず

授る便なかりし如く

口には説けど樂はねば

一五、煩惱をだに減しなば

高きは父の恩徳なり

我等は不孝の窮子なり

我等の拙き心を知り

小道無漏を成就する

除糞を勤めし長者の方便

菩薩に無上の道を説き

佛子等寶直にそれを聞き

佛は菩薩に授記ありて

諸佛一切秘要の法は

習ひし菩薩に賜りぬ

自ら欲しと思はねば

我等は佛の寶藏を

身に添はざりしも道理なり

足れりと思ひ餘を求めず

一三、菩薩に無上の道を説き、此所で菩薩とは衆人の末道者である。之に対し物議りのお僧が無上道を教へた。菩薩は直ちに信行者になり先主のお僧より一足先きに成佛を許された。お僧は口で説くばかりで自ら無上の修行が解かつたからである。

一五、人を教化し世を救ひ

佛を慰めまゐらす

知らず我等は何事も

無大無小、無漏無爲と

三界の苦を免るるを

佛知見には貪著なく

涅槃は最後身にあらず

賜らんとは思はたれ

大をもとのて御意に

我等は菩薩に説法し

自ら願ふ心なかりき

我等に實利の分あることを

求むる心を生すまで

一七、窮子の賤しき心をは

國を莊嚴することこと

嘆の無上道なれとは

空々寂々無生滅

悟りて喜樂の情を断ち

究竟の業と安堵して

欲しとも思はず居たるなり

佛は我等に佛智をこそ

されば故の意趣を知り

稱ふ修行をすべかりしに

他人に佛道を勧めながら

導師はそれを御覽し

初は明したまはずして

暫時忍びておはしけり

方便をもて調伏し

空々寂々、無漏無爲、三界の苦を免るるを佛知見には貪著なく涅槃は最後身にあらず賜らんとは思はたれ大をもとのて御意に我等は菩薩に説法し自ら願ふ心なかりき我等に實利の分あることを求むる心を生すまで

一七、大智の寶藏一妙法充滿の遍學大法。前章では寶藏の中から一佛道を出して興へた。此所では寶藏をさつくり賜はる望である。

一八、徒にはあらで一小道は實に大道への順序として心奪りき。我等に小道を導し而も佛も自ら共に行じたまひし御心使ひが勿体ない。

一九、愚にて迷ひ出でし未にもそなたがてまことの道はありけれ(蘇摩宗旁)この尊に年へしほどの心には(蓮子内親王)路かへらんと思ひかけしや

不孝一君し小道に導して何時までも大心を定むらば實の心を知らぬ不孝言、三角形も構成出来ぬ。

さて財寶を興へたる

小のみ樂ふん々の

如來大智の寶藏を

一八、かかる未曾有の大利益

窮子が勤作二十年

守りし功の空しからで

法威の中に道果を進め

永く淨戒を持ちしは

無上大果に値ふ嬉しさ

廣く佛土を嚴淨し

一九、佛の御聲を世に傳ふる

一切世間の天神人に

我等は眞の羅漢なり

今は佛の御意に

長者の如く世尊もまた

心を調伏ありて後

賜ることぞ難有き

げに望外の賜物は

質直に父の教誨を

得たる寶に異らず

無漏清淨の眼を得

徒にはあらで今日はしも

願くばこの功德をもて

普く衆生を利益せん

我等は眞の聲聞なり

供養恭敬讚歎さるる

不孝の罪を悔い改め

稱ふ聲聞羅漢なり

三〇、大事の因縁ましまして

難度の我等を度したまふ

無量徳劫經るとても

手足頭目一切を

永劫佛を貢ひまゐらせ

美膳寶衣も湯藥も

恩山一度報じ得ず

二一、諸佛は無量不可思議の

諸法の王におはせども

忍んで凡夫の相をとり

諸佛自在の御智慧に

宿世の善根成未熟を

種々にはからみ分別し

説かせたまひし三道は

世に出で神通刀をもて

佛の希有の大恩は

いかでか報いまゐらせん

奉れども報い得じ

心の限り仕へまつるも

牛頭栴檀の塔廟も

徳海一滴謝し難し

大智神通力ありて

下劣を救ふ御誓に

隨宜の教を説きたまふ

人の欲樂志願力

皆悉く知しめし

無量の方便力をもて

畢竟一佛道なりき

二一、種々にはからみ一佛の御心配履が分れば我等はあつて居やれない、早く菩薩に成つて佛を助け奉らねばならぬ、佛道は行くべき所成ずまで行かぬはならぬと、三百一十の菩薩を悟つた

第十一章 一雨草木の譬諭

一 其の時に、佛は摩訶迦葉尊者及諸の大弟子に告げたまふ。善哉善哉。汝等

二 譬へば、三千大千世界の地に生ずる草木は、その種類多くして、性質各等

三 譬へば、三千大千世界の地に生ずる草木は、その種類多くして、性質各等

一 その時に、佛は摩訶迦葉尊者及諸の大弟子に告げたまふ。善哉善哉。汝等誠によく如來の眞實の功德を説けり。さても迦葉よ。如來の功德は廣大無邊にして、汝等無量劫に亘りて説かんと、盡し得まじ。如來は諸法の王にましまし、その教は皆實の利あり。智の方便を以て、演説する所の一切の教は、悉く實相に到る。如來は一切諸法の歸趣を觀となはすこと、究盡明了なり。また一切衆生の深心の欲行を知らしめすこと、通達無礙なり。衆生の如何なる機根の者にも、よく一切の智慧を示したまふ。教を受くる者、誰か終に成佛せざらんや。方便權教また輕んすべからず。

三 譬へば、三千大千世界の地に生ずる草木は、その種類多くして、性質各等

現世安穩、後生善處。此は實に望ましい事である。之を人民に得しめんがの御菩薩の御苦勞はまた格別。

べし。而してこの草木は皆大小上中下の差別ありて、受くる所の澤は量等しからねども、各種性に適して生長し、花開き果實る。一雲降らする平等の一雨、普く一地を潤して、よく差別の草木を成熟するなり。迦葉よ。如來の世に出でたまふは、恰も大雲の起るが如く。大音聲を出して、普く世間の天神人を救へたまふは、恰も大雲の雷鳴電光を發して、三千大世界を覆ふが如し。如來が大衆に向つて、我は如來佛世尊なり、未だ度せぬ者をば我度せん、未だ解せぬ者をば我解せん、未だ安んぜぬ者をば我安めん、未だ涅槃せぬ者をば我涅槃させん。我は三世の相を如實に知る。我は一切知者、一切見者、知道者、開道者、説道者なり。汝等天神諸人、皆來つて教を聽け。と宣へば、無量百千萬億の衆生、教を聽かんがため、如來の所に至る。如來はその時、衆生の諸根利鈍、精進懈怠を見せたまふし、よく適する所に隨つて、種々無量の法を説き、各歡喜させ、皆善利を得しめたまふ。諸の衆生がかくて現世安穩、後生善處の益を得、道德風をなし、聞法俗をなし、諸の障礙を離れ、教の中より各自の力に適するものを受けて、漸々に佛道に入ることを得るは、か

三

一相一味、「一法無量」別けて異る説もなく唯修行して作佛せよと言ふ事は一相なり。我々には色々教が異なる如く見ゆるも佛から言へば皆同じ若効能は一味なり成佛以外にはない。解脱相離相滅相、生死を出でたは解脱相離相を離れたるは滅相。離相も滅相も離れたるは滅相。是の如く六つかしい事を言ふがこれ等皆成佛解悟への一コマである。一相一味、唯如來のみ知しめす。第二章第四節第六節にもある。實相に歸す。佛に成る。佛が付添ふて居れば鬼にも蛇にも成らず安心せよ。

一雨にど雨みそめける (宗徳院)
將護教導一實相に歸すと言ふ理のみでは遠道に非ず。何處までも佛がお世話下さる所が蓮華なり。來住の法及入信示雨のお蔭なり。自分に佛性ありと信じて佛様に頼む心なきは邪見である。非蓮華である。

の大雲が等しく雨を雨せば、一地の草木、その種性に應じて、満足に潤を受け、各生長するに同じ。

三 如來の説法は一相一味なり。所謂解脱相、離相、滅相は皆究竟して佛智に至る、衆生は如來の教を聞いて、受持し若くは經典を讀誦し、説の如く修行し、皆それぞれ果を達せむれども、そが終に如何なる功德を成就すべきかは、自ら覺知せず。かの草木の一味の雨に潤ひ、自ら上中下の性を知らずして、各々生長するが如し。衆生の種相体性、種々の境地に住せる、そが何事を念じ、何事を思ひ、何事を修し、如何に念じ、如何に思ひ、如何に修し、何の法を念じ、何の法を思ひ、何の法を修し、將た何の法より何の法へ進むべきかは、唯如來のみ如實に知しめして明了無礙なり。我は我が弟子の已に解脱相、離相、滅相、乃至究竟涅槃、常寂滅相を現すに至れる者は、何も終に實相に歸すと知るがゆゑに、特更に佛智を説かず、その心欲を將護教導し、漸々に啓發さするなり。汝等迦葉、如來の教は意趣解し難く知り難しと諒して、よく信じ、よく受く、甚だ奇特なり。

三 偈

正見に入る。自己主義を止めて如來の智慧に從順に成る。蓮華を信じて得る心持。この心持を造るが方便の道。目的第六節(四)に「よく信念せよ」の註參照。

一、天雲覆り、佛が蓮華の威力を露したまふ有様。雲は蓮華、露は一味無量別離滅の雨を含む。

- 一、破有法王佛世尊
得させんために世に出でまし
衆生の欲に隨つて
善く衆生に如來習を
しかも久しくそれを秘め
種々に説法なしたまふ
- 二、高大深遠の如來習を
性欲習力種々なる人
永く邪見に迷ひ入り
眞の習者は信解もせん
俄に聞かば疑ひて
縁なき衆生と成り果てん
- 三、されば佛は衆生の
方便説法したまふなり
種々縁により正見に
力に隨ひ習に應じ
受け聞く衆生各々は
入りて如來の智慧を信ぜん
- 四、譬へば一天雲覆み
譬へば一天雲覆み
雷光耀き雷震へば
雷光耀き雷震へば
- 五、山川、險谷、幽邃の
地上たちまち清涼なり
大雨水然降り来れば
卒土隈なく充ち洽ふ
- 百穀甘蔗の類まで
大小の樹、上下の草
雲が霑す一味の雨に

皆ほどほどの澤を得て
枝葉根莖華果

豊に實り生ひ茂り
色香勝れて鮮光なり

六、佛が世間に出でますは

密雲天を罩むるなり

諸法實相を分別して

衆生のために説きたまふは

皇懸に悩む草木を

潤す一味の雨なるべし

七、來れ諸人我を見よ

唯我一人世尊なり

世間の樂涅槃の樂

安穩樂を興へんため

世に出でて甘露の法を説く

一味解脫涅槃の相

一音演ぶる無量の義

一切衆生作佛の縁

八、我平等に衆生を見

彼此愛憎の心なし

我平等に説法し

常に他事なく疲厭なし

一人に善く衆に善く

貴賤上下持戒破戒

正見邪見利鈍根

威儀具れるも與らぬも

等しく雨するわが法雨に

澤受けぬものぞなき

八、彼此愛憎の心なし

音聲はこもかももの聲も水も
わかず縁に結むるなりけり

(室水命宮大夫俊成)

(備考)一、原本はこの項に續いて
三草二木と入るる前三草二木通
故菩薩別教菩薩の五線に配當し
たる譬あり。拙劣なる者なり。
別へば菩薩の差理なるは菩薩で
も其身菩薩になり佛に成る者
然るに吾等の中草二木は大樹と
定むるは草二木は樹に成れぬゆ
ゑ是等は菩薩に成れぬことにな
る。従つて佛に成れぬ。其所が
まづい。三草でも二木でも實れ
ばそれが佛と説くべきである
恐らく此所は原本が羅什に付屬
さるゝ以前無量の小僧が心慮え

に對しては此處を行くたもの
を説く。依て菩薩經には之を
採明せし。

一〇、

方便一滴——一味の雨も一滴の露
種分なり。

實に成らず。一、成實は成佛なり。
衆生の人には菩薩までしか行けぬ
と大樹衆の人は成れば佛に
成れぬと言ふことにはない。草
二木で成佛し樹は樹で成佛する
草の佛と樹の佛とは異つても
實の内容は同じ。

(備考)一、此所にも原本では一草
二木を羅漢と二菩薩に當ては
た譬あり。くだらん事だ。是も
八境のと同じ理由で削除した。
削除する方が新舊をまじに全篇
文の意が明瞭である。

一一、

我が希望なり——蓮華三葉形の中
には一味の法が充滿して居ると
の法を受ければ世々も善行が
出る。皆さん早く成佛して異れ
我世の大業を備はして異れ。異
ばかりが我が希望なり。

九、佛の平等説法は
よく一切を饒益す

一地に潤ぐ一味の雨
衆生の性に隨つて

受け入る様の異なるは

かの草木の上中下

樹の大小の分に依り

潤やくるが如くなり

一〇、種々方便の説法は

佛智の水の一滴

蓮華の蕾す妙法は

大雲ふらする一味の雨

善く樹根を潤して

花も盛らせ實を成らす

力に隨ひ修行せば

佛果を得るは難からじ

一一、今最實の事を告げん

迦葉よ汝等大弟子は

佛の法を受くる身の

羅漢に果てなば悔しからまし

蓮華を道のしるべとし

菩薩の行を漸々に

習ひ修めて諸共に

佛果を期せよ我が希望なり

第十二章 四大聲聞授記さる、王膳の譬

一 供養恭敬云々一佛に値ひ供養恭敬重慶敷することは佛道修行の要件にして亦授記の充満條件として親近供養と云ふ。志業の心、

身隨聲聞多く一これ蓮華世界の持徴なり。聲聞も菩薩行の声聞教菩薩法の中の聲聞

聲聞一摩訶の民。慧い意味に非ず。

佛法を履る一佛の法威を離棄する。種々の教は知らずとも賢有い勿体ない事は分つて居る。蓮華三位中の衆生が法威を離棄して對佛菩薩すればそれが佛法僧の三宝を敬ふと云ふ事に成る。

一 世尊は是の如く愍愍に放誨し己つて、大衆に告げたまふ。この大弟子摩訶迦葉は、將來三百萬億の佛に値ひ上り、供養、恭敬、尊重、讚歎して、廣く佛の大法を宣べ、大道を行じ、最後身は佛と成ることを得べし。名き光明如來佛世尊と稱へ、國を光徳と名け、代を大莊嚴と曰はん。國土は平正にして清淨莊嚴し、金銀瑠璃を地となし、金繩を以て道側を界し、菩薩聲聞多く、魔事なけん。魔民ありと雖も皆佛法を護らん。光明如來の在世は十二劫、佛滅後、正法世に住すること二十劫、像法世に住することまた二十劫なるべし。

- 一、迦葉の將來明に
 - 世々三百萬億の
 - 法を擁護し道を修し
 - 最後に佛果を成就して
 - わが佛眼に見ゆるなり
 - 佛に親近供養して
 - 次第に無上慧を證し
 - 光明如來と號しつゝ、

大莊嚴の代の中に

- 光徳國を教化せん
- 道平に丘坑なく

二、國土は瑠璃に莊嚴し

- 寶樹金繩界をなし
 - 妙華好香珍奇なり
- 無量の菩薩國に滿ち
 - 調柔にして神力あり
- 諸佛の大法經典を
 - 奉持し讀誦しよく行ず
- 聲聞羅漢無漏の弟子
 - その數計り知りがたし
- 佛の在世は十二劫
 - 正像各二十劫

二 その時に、目犍連尊者、須菩提尊者等は、皆恐懼して一心に合掌し、尊願を仰ぎ見て、暫も瞬がす。異口同音に偈を歌ふ。

- 一、大雄猛世尊
 - 我等が心をあはれみて
 - 疑悔悉く除れて
 - 拭ふが如く如何ばかり
- 二、我等は常に小道の
 - 披記の御聲を賜らば
 - 甘露を灑ぎ熱惱を
 - 我等は清涼しき思あらん
 - 弊に馴染みし過を悔ゆ

佛の無上知見をば 目には見れども解り得ず
欲しとも思はず居たるなり 殊好の法味を知らずして

三、我等を作佛させんとの 荒蕪の國に住み慣れて
忽ち大王膳にあひ 驚きあきれうち眺め

四、佛語を深く信解して 佛の誓を疑ひしは
これわが嗜む常の食 曾て美食を知らぬ人の
大王自ら食すを見て 美味眞足すと語りつゝ、
美味を喜ぶ人の如し 始めて安堵し膳に着き

五、あはれただ投記し賜らば 我等が心は安からん
我等が行は樂しからん 世間を安むる雄猛尊
いざや投記したびたまへ 飢忍たる人は大王の

三得

心は安行は樂し投記を憚て信念
決定すれば、心安行樂、これ投
記の效能矢張り運轉の相恩徳安
定である。
いざや投記したびたまへ
承ん世の事のしらすほしきに
(後成)

故に美餐を味へり

三 世尊は大弟子等の衷心の願を知しめして、諸の僧に告げたまふ。「この須菩提
提は、將來三百萬億無量の佛に値ひ上り、供養恭敬尊重讚歎し、常に淨行を修
し、大道を完うすることに依り、成佛することを得べし。號を名相如來佛世尊
と曰ひ、代を有寶と名け、國を寶生と稱へん。その國の有様は、土地平生にし
て頤梨を敷き、寶樹莊嚴し、寶華地を覆ひ、諸の丘坑、沙磧、荊棘、不淨の類
なく、固く清淨ならん。人民は皆寶臺樓閣に任し、佛は常に虚空に處して、衆
生のために法を説き、無量無數の菩薩及聲聞を教化したまはん。佛の在世は十
二劫、正法住世二十劫、像法住世また二十劫あるべし。」

- 一、衆僧も共に一心に聽け 將來世々萬億の 佛に隨ひ行を修し
- 二、國の莊嚴倫比なく 大道を遂げて成佛し 三十二相八十種好
- 三、名相如來と號すべし 端正殊妙寶山の如く いや榮る名を寶生と曰ひ

虚空に處し一廣大平等

偈

端正殊妙寶山の如く
行末はつるに佛の位山
かひあかむを今日に聞くらん
(安家)

八解脫一八でも九でも種々多様と見れば宜しい。八の場合左の如し。

- 一、内有色相外觀色
- 二、内無色相外觀色
- 三、淨皆捨身作捨
- 四、虛空處皆捨
- 五、識處皆捨
- 六、無所有處皆捨
- 七、非有相非無相處皆捨
- 八、滅智捨皆捨

金光如來一迦薩延の授記に國名と代名とを述するは羅什訳の時還漢せしか。世と約り合ひよ欲しき所。然し無くも世支はまい我が訳譯も國は波婆と言へど代は阿とも名けてまい。

衆生は快樂安穩に
佛は無量の衆を度し
聲聞は三明六通を得

三、無量神變不可思議と
恒沙の數の天人衆
代は有寶とて名も高く
正法住世二十劫

四

諸の僧よ。この大迦薩延は、將來八十萬億の佛に値ひ上り、種々妙好の具を供養し、恭敬尊重讚歎せん。諸佛滅度の後は、塔廟高千里、縱廣方正五百里なるを起て、金銀琉璃磚磑碼碯真珠玫瑰を以て台飾し、衆華瓔珞塗香抹香繒蓋幢幡を供養し、復また二億億の佛を供養すること前の如くせん。是の如くして菩薩行を具足することに依り、作佛して閻浮那提金光如來佛世尊と號すべし。國土は平正にして、傾欒を地となし、寶樹莊嚴し、金繩道を界し、妙華地を繞ひ、周く清淨にして、見る者皆歡喜せん。地獄、餓鬼、畜生、阿修羅なく、天人多く

法を擁護し師を敬ふ
菩薩は不退に法を説き
八解脫して威儀を具す
現する佛の說法を
皆合掌して聽受せん
佛の在世は十二劫
像法もまた同じからん

聲聞菩薩無量無億にして國を莊嚴せん。佛の在世は十二劫、正法住世二十劫、像法住世もまた二十劫なるべし。

- 一、一心に聽け衆僧たち
この大迦薩延は
世々の諸佛に供養せん
七寶合飾の塔を起て
最後ちよちに等正覺たうじを成じ
二、金光の光明たうひ等倫なく
一切の有うを断たずれば
四惡趣なく天人榮え
地平に瑠璃を敷き
十方の衆生遙に見て
諸の僧よ。この大目犍連は、將來種々の供具を以て、八千二百萬億の佛を供養し、恭敬尊重せん。諸佛滅度の後は、塔廟高千里縱廣方正五百里なるを

五

起て、七寶を以て合飾し、衆華、瓔珞、塗香、栴檀香、燒香、罍盤、幢幡を供養し、最後身は佛と成るべし。號を多摩羅跋梅檀香如來佛世尊と曰ひ、代を喜滿と名け、國を意樂と稱す。國土は平正にして、地は傾穢の如く、寶樹莊嚴し、眞珠華を散じ、周く清淨にして、見る者皆歡喜せん。天人多く、菩薩聲聞無量ならん、佛壽は二十四劫にして、正法像法各四十劫なるべし。

一、この大目犍連は

八十二百萬億の

常に教を奉行せん

二、諸佛滅度の後もなほ

金の旛軒高く揚げ

菩薩の行を究うし

・多摩羅跋梅檀香佛と

無量の衆を教化せん

三、天人恭敬して教を聞き

身を捨ててなほ道のため
佛に親近供養して

七寶合成の塔を起て

華香伎樂を供養して

意樂の國に佛となり

名も薫しく喜滿の代に

聲聞三明六通を得

佛の在世二十四劫

菩薩精進して智慧を修す

正像各四十劫

第十三章 師弟宿世の因縁

第十三章

二百弟子一舍利弗四大弟の次の次に二百の弟子あり、その内今出麻吉が五百人と同様ののである。

一

佛は五百弟子等に告げたまふ。「威徳具足の諸の僧よ。我と汝等と、宿世の因縁甚だ深きものあり。汝等よく聽け。過ぎし昔の事を知つて、自ら慚愧の心を生さば、やがて按記さるることを得ん。

二

無量無邊不可思議劫の昔、佛おはしき、大通智勝如來佛世尊と號す。國を好成と名け、代を大相と曰ふ。諸の僧よ。かの佛の滅度より已來、甚大久遠なり。譬へば人あつて一の三千大千世界を碎いて微塵となし、それを持ちて東方に世界を尋ね往き、一々の三千大千世界を過ぎて、その數一千に達する毎に、一塵を置き、次第に進みて、遂に所持の微塵を盡すに至らん。諸の僧よ。この人の過ぎたる世界は、實に一の三千大千世界微塵數の一千の三千大千世界なり。

今この諸の世界を共に盡く碎いて微塵となし、その微塵總数を以て劫数とせん
に、かの佛の滅度已來、それに過ぎたること、更に無量百千万億不可思議劫な
り。わが佛知見力を以てかの久遠を見るに、詳なることなほ今日の如し。

一、無量無邊劫昔

大通智勝如来とて

好成國に佛おはしき

大相の代の事も終へ

滅度に入らせたまひてし

彼の劫数を數ふれば

三千世界微塵數の

一千の三千世界をば

皆悉く碎きたる

微塵の數よりなほ多し

二、清淨微妙無漏無礙の

わが佛知見の力には

かかる久遠の昔なる

大通佛の滅度の事

聲聞菩薩の精進の様

今日の如くに見ゆるなり

三

諸の僧よ。大通智勝佛の在世は五百四十萬億無量劫なりき。佛は初め修
行者として道場に坐し、又しうして漸く煩惱障を破し已り、無上覺を得るに
至として、而も諸佛の法現在前せず。更に一劫また一劫、遂に十劫の間、結跏

現在前一有り有りとして眼前に顯れ
る。はつきり觀る。

坐す。修行するには坐するのみ
に非ず。日々所に出でて活動され
たると思ふ。修習靜慮の時坐す
るのであらう。

諸佛の法乃ち在前し。善覺は已に
得て居ても諸佛の覺と等しきや
否や明らならず。曠き修行の未
トウトウ有り有りと善覺を確め
た。

四

母は涕泣して之を送る。この句
見逃す勿れ。母の涙にも法力あ
り王子の心に任して大成を助く。

跏坐して身心不動に修行さるれども、諸佛の法なほ在前せず。帝釋天の諸の眷
屬は、高一里の師子座を供給し、菩薩よ。願くばこの座に坐して、安穩に覺
を開きたまへ。と白して行者を慰む。行者快く受けて座に坐すれば、諸の梵天
王は種種の天華を雨して廣百里を覆ひ、香風を送つて萎める華を除き、また鮮
華を雨して、常に道場を莊嚴し、絶えず行者を供養す。四王諸天も天鼓を撃ち、
天樂を奏して行者を供養す。諸の僧よ。この修行者は、かくて十劫を過ぎて、
諸佛の法乃ち在前し、無上覺を成就して、大通智勝佛となられけり。諸の梵天
諸王は大に歡喜し、佛の滅度に至るまで、常に是の如き供養を絶たざりき。

四 大通智勝佛は轉輪聖王の太子として在家の時、十六人の御子あり。第一を
智積と曰ふ。この諸の王子は、父の成佛を聞き、皆愛せる珍好の具を捨てて、
佛所に赴けり。母は涕泣して之を送る。祖父轉輪聖王も、一百の大官及百千萬
億の人民を率ゐて、十六王子と共に道場に至る。皆大通智勝佛に親近し、供養
恭敬尊重讚歎し上らんとて、佛を繞り、頭面に佛足を禮し、一心に合掌し、尊
顔を仰ぎ見て、頌め歌ふ。

一、大威徳世尊

佛と成りておはしながら
 凡夫と現じ行を修し
 示したまへる畏さよ
 一たび坐して十小劫
 寂滅無漏に安住し
 我等は大善利益を得
 二、衆生は常に苦に悩み
 解脱の便なきゆゑに
 善福夜々に損減す
 永く佛の御名だに聞かず
 今日ぞ佛は眼前
 開きたまへば人天共に
 我等悉く無上の尊に

無量億劫昔より

衆生濟度の本願に
 成道作佛の鑑をば
 善哉無上吉世尊
 身心不動三昧に入り
 佛道を成じたまふを見て
 猶へ慶さる
 盲冥にして導師を見ず
 惡趣は日々に増長し
 闇より出でて闇に入り
 放ち値はん時ぞなき
 最上安穩無漏の智を
 濟度を得たる想あり
 誓首歸命し上る

四偈

二、
 闇より出でて闇に入り
 くらきよりくらき道にぞ入りぬべし
 はるかに照せ山の曉の月
 (維政三女式部)

三偈

一、
 佛智を得しめたまへ衆生も佛に成
 り得んべし。この二語は立派なり
 世尊根性華天根性では言へぬ大
 道心なり。衆生ながら志望高し
 自己本位の所が無い。

五

十六王子は是の如く頌め歌ひ已つて白す。『世尊よ。願くば法を説いて、
 諸天人民を憐愍利益し、安穩を得しめたまへ。』

一、佛は世にも等倫なし
 無上の智慧を具へませり
 我等と衆生を教化して
 我等佛と成り得べくば
 二、衆生の智慧の力のほど
 世尊は皆よく知しめし
 唯願くば究竟の道に
 百福をもて莊嚴し
 願くば世のため法を説き
 佛智を得しめたまへかし
 衆生も佛と成り得ん
 欲望億福宿世の業を
 導く方便は種々ならん
 我等を満足せしめたまへ

六

また諸の僧よ。大通智勝佛が無上覺を成ぜられし時、十方各五百萬億の世
 界は皆六種に震動し、日月の光明も未だ及ばぬ幽冥の所まで、皆大に明なりき。
 その中の衆生は、始めて相見ざるを得て、皆驚き怪み、是等の衆生は如何にして
 忽然生ぜしや」と互に言へり。その時に、各世界の諸天の宮殿も六種に震動し、
 大光普く赫灼きて、諸天の常の光に勝りたり。

六
 光明一聖人出現して世間明かりし
 十方世界を照す。

東方五百萬億の世界の諸の梵天は、各その宮殿の光明照耀して常に倍せるを
見て、皆思ふ、『今我等が宮殿の光明、かほどに赫くは、昔より未だ曾てなき
ことなり。何の因縁にてこの相あるや』と、相會してこの事を議す。一大梵天
王あり。救一切と名く、衆梵のために唱ふ。

我等が宮殿常になく 曠くはそも何故ぞ
大徳の天生れしや 佛世間に出でませしや
十方照すこの光明 尋ね求めん諸共に

七 諸の梵天王は各衣祴に天華を盛り、宮殿に乗り、西方を指して尋ね往きけ
れば、果して大通智勝如來に値ひ上る。佛は道場菩提樹下獅子座に坐したまひ、
諸の天神人、非人が佛を恭敬圍繞し、また十六王子が佛に説法を請へり。是に於
て、皆佛足を禮拜し、百千返繞り、天華を散じて、佛及菩提樹に供養す。散華
積んで須彌山の如し。華の供養を已つて、宮殿を佛に獻じ、『我等を哀愍し満足
させんがため、この宮殿を納受あらせたまへ』と、一心同聲に頌め歌ふ。
一、値ひ上ること難かりし 佛を拜むうれしさよ

衣祴―貴人に華を捧ぐる時に用
ふる盛る器
宮殿に乗り―宮殿が移動性なる
は奇能だ、華の類か否宮殿な
り、こんな華は合理的にする必
要はない。繪にも書けず、彫り
もはまらぬ所が加つて東洋文学
の面白さである。
満足―法のための物徳的に立派な
供養をするが梵天の本懐。

無量の功徳を具へまして 一切を救ふ天人師
十方世界を憐みて 普く衆生を利したまふ
二、我等は榮耀の樂を捨て 五百萬億の國々より
佛を供養しまつらんため 遙々こゝに詣りたり
我等又しき福業に 嚴飾したるこの宮殿
今皆世尊に獻る 願くば納受あらせたまへ
八 是の如く佛を供養し已つて白す、『願くば法を説いて、衆生を度脱し、涅槃の道を開かせたまへ。』
世尊人天尊 唯願くば法を説き
大徳大悲の力もて 苦惱の衆生を度したまへ
時に大通智勝佛は、黙して唯うなづかせらる。
九 東南方の五百萬億の國土の諸の梵天王も、各その宮殿の光明照耀未曾有なるを見て歡喜し、相會してこの相の因縁を議す。一大梵天王あり、大悲と名く、衆梵のために唱ふ。

黙して唯うなづく―まあ待て、
皆が集つてからと喜ぶ心。

我等が宮殿の大光明

大徳天や生れしか

光を追うて往き見ばや

おそらく佛か世に出でて

如何なる因縁の相なるらん

佛や出世あらせしか

かかる未曾有の相あるは

衆生の苦を抜きたまふらし

○ 諸の梵天王は各衣蔵えぞうに天華を盛り、宮殿に乗り、西北方を指して、尋ね往きければ、果して大通智勝佛に値ひ上る。佛は菩提樹下道場師子座に坐したまひ、諸の天神人非人等が佛を圍繞恭敬し、また十六王子が佛に説法を請へり。是に於て皆佛足を礼拜し、繞ること百千返して、天華を佛及び菩提樹に散す。敬華積んで須彌山の如し。華の供養を已つて、宮殿を佛に獻じ、『願くば我等を慰みて、この宮殿を納受あらせたまへ』と、一心同聲に頌め歌ふ。

一、迎陵かろうりやう煩伽の御聲もて

聖主天中天尊を

一心歸命し上る

二、世尊は珍し欠速くそく經て

衆生を慰み教へたまふ
我等は恭敬禮拜して

まれに一たび出でたまふ

迎陵煩伽一梵起カラビンカ、人面ひとおもてで美声の天鳥

○ 偈

一百八十劫以來

惡趣蒙あまえて天哀ふ

三、折しも佛出でまして

世を統一し一切を救ひ

値ひ上る歡喜うれしさよ

佛おはさずありければ

衆生の師となり親となり

哀愍利益なしたまふに

○ 是の如く佛を讚歎し已つて白す。『願くば世尊、一切世間を哀愍し、法を説いて、衆生の苦を抜かせたまへ』

大聖世尊法を演べ

衆生を苦より抜き出し

衆生は如來の教を聞き

せめては六趣の上に居て

眞實相を顯示して

歡喜を生さしめたまへ

得道しては天に生れ

惡を減じて善を増さん

時に大通智勝佛は、答へずして唯うなづかせらる。

○ 南方の五百萬億の國土の諸の梵天王も、各その宮殿の光明照耀未曾有なるを見て歡喜し、相會してその因縁を議す。一大梵天王あり、妙法めうぽうと名く、衆梵

のために唱ふ。

宮殿の光明照曜くは

これ尋常の事ならず

百千劫を經る間

曾て見ざりし瑞相なり

如何なる因縁あるやらん

諸共にいざたづぬべし

大徳の天生れしか

佛世間に出でませしか

〔三〕 諸の梵天王は、各衣絨に天華を盛り、宮殿に乗り、北方を指して尋ね往きければ、果して大通智勝佛に値ひ上る。佛は菩提樹下道場師子座に坐したまひ、諸の天神人、非人等が佛を恭敬圍繞し、また十六王子が佛に説法を請へり。是に於て皆佛足を禮拜し、百千返繞りて天華を佛及菩提樹に散ず。散華積んで須彌山の如し。華の供養を已つて、宮殿を佛に獻じ、願くは我等を憐みて、この宮殿を納受あらせたまへ」と、一心同聲に頌の歌ふ。

値ひ難き破諸煩惱者

百劫あまり過ぎし今日

値ひ上る嬉しさよ

飢渴に悩む衆生に

法雨を雨らす無量智者

優曇華よりも珍しき

この諸の宮殿は

御光をもて飾られたり

大慈大悲願くは

我等が供養を受けさせたまへ

〔四〕 是の如く讚美供養し已つて白す。「希くば世尊よ。法を説いて、一切世間の天魔、沙門、婆羅門を度脱し、皆安穩なることを得しめたまへ。」

唯願くば天人尊

法鼓を鳴し法螺を吹き

法雨を雨して衆生を

悉皆度脱したまはらん

我等歸き請ままつり

深遠音を待ち上る

時に大通智勝佛は、答はなくして唯うなづかせらる。

〔五〕 西南方、西方、西北方、北方、東北方、及下方の五百萬億の國土の梵天王も、各宮殿の光明が、異常に感曜くを見て歡喜し、この相の因縁を尋ねて、共に大通智勝佛の所に詣り、讚美供養して教を請ふこと、また前の如くなりき。

〔六〕 諸の僧よ。上方の五百萬億の國土に於ても、諸の梵天王は皆各自の住する宮殿の、常になく光明感曜するを見て、歡喜踊躍し、相會してその因縁を議す。衆中に一大梵天王あり、尸棄と名く、衆梵のために唱ふ。

我等が宮殿何故に

是の如きの妙相は

大徳の天生るるか

光を追うて何處までも

威徳の光明耀くや

昔より未だ曾て見ず

佛世間に出でますか

諸共にいざ尋ぬべし

〔七〕 諸の梵天王は、各衣祴に天華を盛り、宮殿に乗り、共に下方を指して尋ね往きければ、果して大通智勝佛に値ひ上る。佛は道場菩提樹下師子座に坐したまひ、諸の天神、非人等が佛を恭敬圍繞し、また十六王子が佛に説法を請へり。是に於て皆佛足を禮拜し、繞ること百千返して、天華を佛反菩提樹に散す。散華積んで須彌山の如し。華の供養を已つて、宮殿を佛に献じ、願くば我等を憐みて、この宮殿を納受あらせたまへ」と、一聲に頌め歌ふ。

- 一、 ありがたや救世聖主尊
衆生を救ひ出したまふ
世の民草を愍みて
一切を導き入れたまふ

苦惱三界の獄屋より
智慧限なき天人尊
廣く甘露の門を開き

二、 無量億劫ふるとても

十方世界は常闇にて

阿修羅しきりに暴を増し

死しては共に地獄ならん

三、 戒を守らす悪を作し

罪業深うして樂を失ひ

常に地獄の底に墜ち

佛の化導に値はめゆゑ

四、 佛は世間の眼として

衆生濟度の本願に

正覺を成じたまひしを

けに無量なり未曾有なり

五、 御光に飾るこの宮殿

ただ愍みて納受たまへ

佛の出世なかりせば

三惡趣はいや多く

諸天は轉た福を減じ

邪見に執して智徳なく

姿も心も衰へて

匍ひ出ることも叶はめは

久遠にたまたま出でませり

自ら修行の範を示し

見まつる我等の欣慶は

今悉く奉獻る

我等が供養功德あらば

一七 過

皆、一切に及して、衆生と共に一
國獨一、王子の宮と共に昇るも立派
な言ひ分である。

普く一切に及して

衆生と共に成佛せん

皆清淨の道を習ひ

一八 是の如く讚美供養し已って白す。世尊よ。願くば法を説いて我等を度脱
し、皆安穩を得しめたまへ。

一、世尊よ自在の力もて

甘露の法の鼓撃ち

苦惱の我等を度脱して

安穩の地を示させたまへ

二、我等が切なる願をば

哀と御思し許されて

佛が無数劫習はれし

覺の道を演べさせたまへ

一九

四諦一四諦の道曰く苦は世間の
有らゆる苦の集は苦の集に
つる苦の集は苦の集の道は
戒定慧の道
十二因縁一自性主張の発作が輪
回する十二の因縁。無明を除け
し消滅する
一、無明は迷の根源
二、行は過去の業造作
三、識は諸別作爲自体に據する
餘の縁
四、名色は心身自体に止つて形
質出來る處とする

元 その時に、大通智勝佛は、十方の梵天王及十六王子の請を聽許ありて、即
時に、總に四諦の教を説かせたまふ。謂く、「これ苦、これ苦の集、これ苦の滅、
これ苦滅の道」と。また、廣く十二因縁の理を説かせたまふ。謂く、「無明は行
の縁なり、行は識の縁なり、識は名色の縁なり、名色は六入の縁なり、六入は
觸の縁なり、觸は受の縁なり、受は愛の縁なり、愛は取の縁なり、取は有の縁
なり、有は生の縁なり、生は老病死、憂悲苦惱の縁なり。無明滅すれば行滅す、

- 五、六入は六根
- 六、觸は感覺、生れて三月目に
出來り
- 七、愛は好悪、意識、五六才乃
至十二三才の萌起る
- 八、取は欲すると強ふとの差別
十八九才まで起る
- 九、取は執着、二十才已後生ず
る
- 有は善業の業未來の果を合
有す
- 二、生は阿かに生れる、異
三、老病死憂悲苦惱で破壞に至
る

二〇

大徳一阿羅漢元主等

深心の志願一救世の願、成佛の
大望。これ當世清淨の業の致す
所なるも亦賢母送別の業が時に
結ばるる念に非ざらんぞ。

行滅すれば識滅す、識滅すれば名色滅す、名色滅すれば六入滅す、六入滅すれ
ば觸滅す、觸滅すれば受滅す、受滅すれば愛滅す、愛滅すれば取滅す、取滅す
れば有滅す、有滅すれば生滅す、生滅すれば老病死、憂悲苦惱滅す」と。六百
萬億無量の衆生は、この教を聽き已つて、一切の執着なく、煩惱を離れて、皆
深妙の禪定、三明、六通、八解脱を得たり。第二第三第四の説法に於ても、千
萬億無量の衆生悟り得て、皆大聲聞となれり。

三〇 童子ながらも、出家して佛弟子となられたる十六王子は、曾て百千萬億の
佛に親近供養して、清淨の行を修せし福を有し。さすがに諸根通利、智慧明了
にして、志望もまた大なり。俱に佛前に出でて、「世尊よ、この諸の大徳は皆よ
く聲聞を成就せり。然るに我等は是の如きに満足すること能はず。唯希ふ所は
佛の知見なり。願くば無上覺の道を教へたまへ、我等聞き已つて、共に修行せ
んことを明す。世尊は我等が深心の志願を知しめさん」と請ふ。時に、轉輪聖
王の將ある衆の中の八萬億人は、王の許可を得て、十六王子に倣ひ、皆出家せ
り。

沙彌一切出家、未だ僧侶に列せぬ者なり。

大通智勝如來は、十六王子沙彌の請を受け、二萬劫を過ぎ、始めて四衆の中に於て、妙法蓮華教菩薩法佛所護念と名くる大法を説かせらる。蓋しこの法體の中にのみ無上覺の道はあるべければなり。大願堅固の十六沙彌はこの説法を聞き已つて、皆共に佛語を諷誦し、よく通利し、悉く信受して大道を行せられけり。時に、聲聞衆の中にも、また信解せしものありしが、餘の千萬億種の衆生は、多く疑惑を存せり。

佛は八千劫の間、この大法を説いて休廢^{ひん}なかりしが、説き已つて靜室に入り、寂然として禪定に入らせらるること八萬四千劫なりき。この間、十六菩薩沙彌は、交々法座に昇り、佛に代つて蓮華を説き、各六百萬億無量恒沙の衆生を度し、示放利喜して、無上道の心を發^たせたりき。

その時に、大通智勝佛は、永き三昧より覺めて、靜室を出で、法座に坐し、普く大衆に告げたまひしは、この十六の菩薩沙彌は甚だ奇特なり。諸根通利、智慧明了、曾て無量百千萬億の佛を供養し、諸佛の所に於て、常に淨行を修したる者にして、已に佛智の藏を收持せり。今それを開示し、衆生を導きて、そ

三二

開示して一第六卷の開示佛入の開示とは用法賢の、佛智の藏は蓮華より蓮華を開いてその中の一佛道を示すを開示と言ふ。智慧を説かずとも一佛道に於て自ら佛智を得る諸佛九尊火宅三尊の發智の趣り。

の中に入れんとするものなり。諸の聲聞緣覺及菩薩、もしこの十六菩薩に數々親近供養して、その教を信じ、收持して毀るまじきものは、必ず無上覺、如來智を得べし」と。

諸の僧よ、十六菩薩は常に樂つて妙法蓮華經を説かれしが、一一の菩薩の所化の中、各六百萬億無量の衆生は、この因縁を以て、世々生るる所、常に大菩薩に値ひ、それに従つて教を聞き、悉く信解し、爾來四萬億の佛世尊に値ひまつり、今なほ盡きず。

かの十六沙彌は、今皆成佛し、無量百千萬億の菩薩聲聞を隨へ、現在十方國土に於て、常に大法を説きたまふ。二佛東方にあり、一を阿閼^{あざ}と名け、歡喜國を本土とす、二を須彌^{しゆみ}頂と名く。二佛東南方に在り、一を獅子音^{ししうおん}と名け、二を獅子相^{ししうさう}と名く、二佛南方に在り、一を虚空住^{こくうぢゆう}と名け、二を常滅^{じやうめつ}と名く。二佛西南方に在り、一を帝相^{たいていさう}と名け、二を梵相^{ぼんさう}と名く。二佛西方に在り、一を阿彌陀^{あみだ}と名け、二を度一切世間苦惱^{たいつくせけんくなんらう}と名く。二佛西北方にあり、一を多摩羅跋耨檀香^{たまらばだうだんかうかう}神通^{じゆんたう}と名け、二を須彌相^{しゆみさう}と名く。二佛北方に在り、一を雲自在^{うんじざい}と名け、二を雲自

三三

菩薩に値ひ、佛世尊に値ひ、聲聞の一討二である。

在王と名く。東北の二佛、一は壞一切世間怖畏と名け、第十六は我釋迦牟尼佛にして、この娑婆世界を本土とす。

三

聲聞の域一対二どころか一對もせぬ人ならん形式だけ佛弟

この時の聲聞とは一本書二十三節に在る聲聞は此所を言はんがたぬなりし。加筆活字生を時に懸念するとの仰せ。
師弟宿世の因縁一
皆びおく世々の契もよが尊の
露のか、こにぬるる袖哉
(法印公題)

諸の僧よ。我等沙彌たりし時、已に無量百千萬億恒沙の衆生を教化せり。然るに諸の衆生の中、なほ聲聞の域を脱せぬものも、また多かりき。そもそも我に従つて教を聞くは、すべて無上覺のためなり。而も無上覺は難信難得にして、ただ蓮華の中に於てのみ達し得べきがゆゑに、我は今もなほ倦むことなく常に身を以て方便説法し、この諸人を蓮華に入れ、速に佛智を得させんと努力す。その時の聲聞とは、今の汝等諸の僧及將來の聲聞弟子の事なり。師弟宿世の因縁是の如し。

一、大通智勝佛その昔

無上の道を求めつゝ、
道場に修行せられしが
釋梵諸天龍神の
更に十劫修行して
轉輪王の太子にて
榮華を捨てて城を出で
十劫経れども覺られず
厚き供養に慰められ
遂に覺を開きたまひき

その時一切天人の
歡喜は限りかけり

二、佛に十六王子あり

僕に佛の所に往き
説法を請うて白すやう
法雨を雨したまへかし
たまたま出てますこの所に
衆生を覺悟させたまへと
皆一心に敬禮し
聖主よ我等一切に
世尊は値ひ上り難し
一切世間を震動して
志願は已に道なりけり

三、その時東方遙なる

梵天宮の光明は
諸天は未嘗有の相を見て
西方をさして往くほどに
皆歡喜して華を供養し
天の宮殿を奉獻り
佛はうなづきたまひけり
同じき瑞相あるを見て

四、三方四維上下の天も

同じき瑞相あるを見て

三 偈

二
阿彌陀は已に道一衆生を覺悟させ
こまへとは已に大道心なり救世
になり、刹已心に作す。

目
中天一無辺際の中は何處でも
中心と言へるが今は彼轉天より
見て佛の光が中天に在る關係

その因縁を尋ねんため
大通智勝佛のおはし
教を待ちてありければ
具足な道を聞かばやと
聲を合せて偈を歌ひ
五、無量慧世尊今ははや
始めて四諦の苦集滅道
涅槃に到る道を教へ
無明より老病死まで
禍福の業を作すと説き
六、この御教を聞きしより
多くの人々悟り得て
二度の説法ありしとき
また阿羅漢を得たりけり

中天をさして往くほどに
十六王子が佛を繞り
諸天は未曾有の歡喜に
華と宮殿を供養して
佛を讚美し上れり
時到れりと知しめし
貪欲を去り安穩に
或は十二因縁の
めぐる因果のその中に
種々に導きたまひけり
六百萬億兆の
皆阿羅漢となりにけり
恒沙の衆生邪見を離れ
なほ度々の説法に

八、
佛道を承し一足は入信示明の示

得道するもの多かりき
七、中に十六王子沙彌
習性も人に超えたれば
共に佛に願ふやう
たゞ大道を説かせたまへ
修め習ひて成佛し
世尊の如く成らまほし
八、宿世の善業あればこそ
佛はかくと知しめし
六達を説き神通を示し
妙法蓮華を説きたまひ
八萬四千劫なりき
九、十六沙彌はその間
無上知見の道を説き

さすが宿世の福多く
羅漢の悟に意滿たす
我等は佛の知見を求む
我等と我等の善業は
慧眼第一清淨に
王子は大き樂ふなれ
無量の因縁譬論をもて
眞實の教菩薩法
その後權定こゝるごと
法座に昇りて衆のため
佛の滅度の後までも

蓮華を説いて如來事を

各の沙彌の所化の衆は

一〇、やがて十六菩薩沙彌は

皆佛と成りたまふ

現在十方におはすなり

一一、昔蓮華を聞きながら

作佛を疑ふ人々を

倦まず佛道を説きたまふ

固き契ぞ頼もしき

一二、何か包まん我こそは

汝はその時の聲聞なり

今また此所に蓮華を説き

行ぜし功德多かりき

六百萬億恒沙なり

無上の道を具足して

各々所化の衆と俱に

なほ聲聞に止りて

ことに愍然と思しめし

幾劫までも師と弟子の

十六沙彌の一人にて

宿世の縁の深ければ

汝を佛慧に導くなり

宿世の縁の深ければ！此所を聞
いて感歎すれば本尊が分った人
である。五百人皆佛道を思ひ
慈愛を極めた譯。

二

第十四章 化城の譬論

一 佛はまた告げたまふ。諸の僧よ。將來に於ても、もし蓮華を聞かず、菩薩
行を知らず、覺らず、小涅槃を得て、自ら佛法を得たりと思ひ、更に精進する
の心なき者ありは。この人何國いづくにありとも、我は往いて出現し、作佛の範を示
し、引導して佛智を志求させ、蓮華を聞かせ、大道を修行さすべし。何となれ
ば、この道法に依てのみ、人は眞に大覺に到り得べければなり。但し小道と雖
も、如來の方便として皆佛道に屬す。要は佛道の一分を得て、中止若くば退轉
せざるにあり。

諸の僧よ。佛は自ら滅度の時到れるを知しめし、巨つ衆の已に清淨にして、
信解堅固に、空を了達し、諸の執着なく、思慮安穩、禪定に住せるを見たまは
して、ために蓮華を説き、大道を示したまふ。蓋し聲聞緣覺の道ののみを以て、
佛道を成就するものはあらざればなり。

二 諸の僧よ、如來の方便はよく衆生の性に入れり。如來は衆生の深く五欲に著し、心怯懦にして、大道に堪へざるを知らしめすがゆゑに、まづ小道の涅槃を説いて衆の心を安慰させたまふ。譬へば五百里の險難惡道あり、曠絶人なく怖畏多し。多衆この道を過ぎて寶の山に往かんとす。一導師あり、聰慧明了、諸善方便、よく險道通塞の相を知れり。衆を將導してこの難險を行くに、衆は半路にして懈り倦み、我等は疲勞極れり、もはや進む能はず、前路なほ遠く、且つ怖畏多し、寧ろ退き還らん」と曰ふ。導師は思ふやう、「この人愁むべし、何ぞ前方の大寶を取らずして還らんとするや」と。即ち方便を以て、行程約三百里の處に、一城を化作し、汝等怖るること勿れ、道は已に半を過ぐ、今にして還らんは不可なり。この大城に入らば快樂安穩ならん。もしまた出でて寶所に進まんど思はば、隨時に去ることを得べし」と誨ふ。疲憊の衆はこの語を聞き、今は惡道を免れて、安穩所を得べしと歡び、競つて城に入り、皆已度の想を生ぜり。その時に、導師は衆の已に休息して疲勞癒えたるを見て、忽ち化城を消滅し、「いざや來れ、寶所は近きにあり、曩の大城は實にあらず、汝等を休息させんがため、我方便して化造せるものなり」と告げぬ。

行程三百里一第六卷四註三節
 圖に就て場所を指せば(一)約八分の處に當る、一歩で(二)に成り、それから(三)は一連線、

三 如來もまた畏の如く、汝等が大導師にして、人の世の、生くるに苦く、死ぬるに苦き險難の長路を、如何にして越え度るべきかを知らしめせり。衆生はもし初より、教は成道の一途なりと聞かば、道は長遠なり、久しく勤苦すれども達し難しと思ひて、心に怖畏を生じ、佛を見んともせず、近かんともせず、導師に隨順つて行ずること能はざるべし。佛は衆生の心の畏の如く怯懦下劣なるを知らしめして、半路に於て休息させんがたの、方便力を以て聲聞緣覺の涅槃を教へたまふ。衆生が涅槃に息ひ已らば、如來はその時説きたまはん、「汝等が修行は未だ并了せず、但し佛慧は近きに在り、奮勵一番、觀察考究せよ。聲聞緣覺の涅槃は眞實にあらず、如來方便力を以て、一佛道の中に於て、分別して二道を説けるのみ」と。かの導師が衆人を休息させんがため、方便して大城を設けたれども、衆の已に息ひ得たるを知りては即ち、「この城は化造なり、實の寶所は近きに在り」と、告げしが如し。唯最後まで導師を見失ふこと勿れ。」

一、驚く勿れ懼るるな

道は遙と思はるれども

二道一聲聞緣覺道なり、其上に菩薩道を加へて合せて一佛道とす。菩薩道(三摩のこ線)に入れば、寶所(寶所)大覺を獲る地点)は近い。
 化造一聲聞緣覺の教を不要とするのではない。無上道に連絡して一佛道に成るから二道の名は消えると言ふこと

二 傷

良き宿次
 やすむべき宿をば思へ中空の
 旅も何かは苦しむるべき
 (血行法師)
 ぬち遠き半空にてや歸らまし
 思へばかりの宿ぞうれしき
 (唐寶玉母)
 ゆくべしと言ふてはつひに歸らまし
 ひなの賢路に宿なかりせば
 (源 光俊)

勳めば近し譬へまば
 沙漠を越ゆる旅衆が
 寶所を尋ね行くほどに
 患難いとど多ければ
 今は一歩も進みかね
 導師はそれを慰めて
 智慧神通の力もて
 二、は汝等が良き宿次
 數多の男女を召し使ひ
 諸人は喜びて城に入り
 三、その時導師告げけるは
 何時までかよく樂まん
 寶の山に達せよと
 四、我は世間の導師なり

五百里あまり道知らぬ
 強力明智の導師をためみ
 水草に飢ゑ毒獸に悩め
 身心やがて疲れはて
 還るを思ふ氣色あり
 衆の心を安慰めんと
 化の大城を作り成し
 高樓園林浴池あり
 歡樂隨意と教ふれば
 安穩得度の想あり
 二、は權作の城なるぞ
 汝等更に進み出で
 城は跡なく消えにけり
 覺をまむる衆生が

四

寶所の樂處
 此しよんて假のやどりに居めすは
 眞の樂處をいかで知らまし
 (赤源法師)
 かりのちたしはし居むらむかあは
 うひに眞の處に來りけり
 (源三位東政)

中路に止り倦み慵りて
 越え行く氣刀なきゆゑに
 苦寂第一と放へたり
 皆阿羅漢を悟りなば
 教の意誅は皆一つ
 五、今汝等に一書を告げん
 佛の一切智のために
 もし一切智十カ等
 三十二相を具へば
 諸佛は涅槃を説きたまへども
 愈ひ已るをみそなはしては

生死煩惱の險道を
 休息めんがため涅槃を説き
 涅槃の城に息ひ得て
 寶所の眞實道を説く
 二は方便の休息所なり
 汝が悟は完全からず
 大精進を發せよかし
 如來の功德を身に證し
 その時眞實の覺なるべし
 それは暫く息ふるため
 佛慧に導きたまふなり

天の衆生—この投記に限り、天と地と分けて書いてある。面白、法喜食—佛智を思ふ喜ぶ法が飯より好き、禪悦食—已心を修める悦び糧がより甘い、飛行自在—此所の文明は飛鳥も出来ないことと感服して居る。

し、國を善淨ぜんじやうと名け、代を賢明けんめいと曰はん。その世の有様は、瑠璃を地となし、平なること掌の如く、險山危深なし。七寶の高樓國中に多く、高く聳えて諸天の宮殿に至り、人天接近して互に相見あひまゆ。天の衆生は皆化生の身にして、端欲あることなく、常に二食す、一に法喜食ほふきじき、二に禪悦食ぜんえつじきなり。志念堅固にして精進力、智慧力あり。三十二相莊嚴し、大神通力を得て、身より光明を放ち、飛行自在なり。地には諸の悪人魔女なく、無量不可思議千萬億の菩薩あり、大神通無礙智を以て、よく諸の衆生を教化す。聲聞多きこと計り知り難く、皆三明、六通、八解脱を具す。是の如き無量の功德あつて天地を莊嚴し、佛壽無量劫ならん。法明佛の滅度の後は、七寶の塔國中に徧滿し、正法、像法世に住すると甚だ又しかるべし。

- 一、富樓那の行の貴きは よく方便を知れるにあり
- 大智を畏れ小道を 樂ふ衆生の性を見て
- もと大道の菩薩ながら 衆生を導く方便に
- 自ら聲聞緣覺と生れ 小智を求むる人の師となり

- 無量の衆を度脱して 涅槃の悟を成就させ
- さて彼大道の教を説き 引いて佛慧を求めさす
- 二、内に菩薩の行を秘し 外に聲聞の相を現す
- 常に方便の教を樂み 涅槃をことごとく喜ぶとも
- 實には無上の法にかまひ 自然に佛土を嚴淨す
- 三喜耶兒を現すも 衆生を導く方便なり
- 種々の權化えんけのことを言はば ごこそ不思議と思ふべし
- 三、富樓那は昔千億の 佛に隨ひ道を問ひ
- 法を護りて無上慧を 習ひ修めし功多く
- 今佛弟子の上に居り 多聞智慧者と現れて
- 無畏説法し衆を悦可し 佛事を助けまつるなり
- 四、大神通力無礙智あり 諸根利鈍をよく知りて
- 常に清淨の法を説き 無量の衆を教化して
- 皆大道に安住させ 絶えず佛土を淨むるなり

四 十二百の弟子―本傳は實は千二百の同級生に授記ありたるものなり、先づ富樓那に授記し次に千二百中の出衆者憍陳如等五百に授記し餘の全部を交代せしめらる。寶珠の譬を述べしも五百人なりし故本傳は出衆者の数を以て表裏とせるなり

- 五、將來もまたその如く
方便說法畏なく
無量の衆生を教化して
諸法の相を如實に現じ
- 六、奉佛護法の功を積み
七寶充滿の善淨國に
神通威徳の大菩薩
その數無量國に滿つ
純一無垢に化生して
法喜禪悅の二食の外
悪人廢女は跡を絶ち
法明佛の蓮華の世
- 四 其の時に、心自在なる千二百の弟子は、皆思ふやう、「我等は歡喜未曾有なり。もし餘の大弟子の如く、我等も授記を被ることを得ば、亦快からずや」
- 無數の佛を供養して
法を獲りて道を宣べ
皆一切智を成就させ
佛土を淨むることを努めん
富樓那は法明佛となり
寶明の代を治むべし
三明六通の聲聞衆
天の衆生は嬉欲を斷ち
相を具へて身を莊嚴り
餘の飲食を更に想はず
賢聖愈々多からん
語らば盡きじ富樓那の功徳

迦留陀夷―もと釋尊の射術の師
憍陳如―もと釋尊の御堂
多伽陀―同階の弟釋尊特許して
思を以て稱せらる、自分の名前も
念はざらん

- と。佛は疾くその心を知しめして、摩訶迦留陀夷尊者に告げたまふ。「我この千二百の阿羅漢に皆授記せん。まづその中、大弟子憍陳如、優樓頻螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、迦留陀夷、優陀夷、阿菟樓駄、離婆多、劫賓那、薄拘羅、周陀、莎伽陀等五百の阿羅漢は、將來六萬二千億無量の佛を供養して、成佛することを得べし。皆同一號にして、普明如來佛世尊と曰はん」。
- 一、この大弟子憍陳如は
不可思議劫を過ぎて後
號を普明如來と曰ふ
名聲普く世に聞え
常に無上の道を説かん
二、清淨の國土瑠璃の如く
如來に便し神通を
妙の樓閣に登り立ちて
無上の供具を供養して
- 無量の佛を供養して
等正覺を成すべし
大智大慈悲大神通
一切衆生に敬はれ
勇猛の菩薩充滿し
現する種々の技あらん
十方諸佛の國に往き
歡喜の念に溢れつゝ

須臾の間にもまた還りこん

三、佛の在世は六萬劫

像法は二十四萬劫

天人共に曇ひなん

四、五百の弟子等作佛して

轉次に授記して言はん

所化の國土の莊嚴も

皆わが今の世の如く

正像久住なることも

五、迦葉よ五百の羅漢等は

餘の聲聞もまた等しく

この會にあらぬ人々には

正法住世は十二萬劫

末世となりて法滅せば

同じく普明佛と曰ひ

わが滅後には某作佛し

聲聞菩薩の神通も

佛壽長遠なることも

皆また上の如くならんと

今は悉皆授記されたり

將來必ず作佛せん

汝爾く傳へよかし

五

斯くて、授記されたる五百の阿羅漢は、歡喜踊躍し、座より起つて、佛足を禮拜し、過を悔いて自ら責め、佛に白す。「我等は已に悟を究竟せりと思ひし

が、今その愚を知れり。我等は如來の智慧を求むべきことを忘れ、小智を得て自ら足れりとせるを耻づ。世尊よ。譬へば貪人あり、富裕なる親友の家を訪れて、饗應に遭ひ、酒に酔うてうち伏せり。親友は公用あつて他出せしが、その際、高價なる寶珠を、竊に酔へる貪人の衣の裏に繋ぎて去りぬ。貪人はそれを知らず、覺らず。夜も明けしかば、起き出でて、この家を辞し、他國に遊歴して、衣食を求む。辛苦艱難、僅少を得て、甚だ喜となし、更により良きを求むるの心まかりき。或る日、かの親友この貪人に再會し、その依然として貧しきを見て、憫んで告ぐ。咄哉男子、何ぞ衣食に汲々たるや。我は汝に安穩を得させんがため、某年某月日の夜、高價の寶珠を汝が衣の裏に繋ぎ置けり。然るに汝未だそれを知らず、用ひずして徒に自活に苦辛す、癡愚なるかな。その寶珠は今なほ有らん、速に財物に易へて、意の如く所要を辨せよ」と。

五

一切智―大財物
阿羅漢の悟―小財

佛もまた是の如し。往昔王子菩薩にておはしし時、我等を教化して、一切智の願を發さしめたまへり。然るに我等何時しかそれを忘れて知らず、覺らず、阿羅漢を得て、自ら成就の想をなせるは、かの貪人が袂に珠あるを知らず、資

一切智の願一袂の珠信心
佛の善根一戒律の源因となる善
一切智の願を達する行、信心を
満足する功德、つまり菩薩行な
り。

信心願察一袂の珠の價值を認め
ず、大財に易へやうと努力せぬが
不信心なり、少財に満足するが
不願察なり、即ち一切智の難願
恭敬信樂向上に、珠あるを知る
のみならず、之を財物に交易せん
とする愚思希望努力が信心願察
である。

生艱難、少財に満足せるに異ならず。されど一切智の願を失せざるを視ざるは
し、今世尊は我等を覺悟して言ふ。『諸の僧よ、汝等が涅槃は未だ眞の覺ならず。
我久しき以前、汝等をして佛の善根を植ゑて、一切智に向はしめ置けり。然る
に汝等今方便の涅槃を得て、實に究竟の悟と思へることの愚さよ』と。世尊よ、
我等今正に信心願察に甦り、菩薩の自覺を得て、直に披記を蒙る、何の幸か之
に過さん。

一、我等は披記に歡喜して

佛の智慧をば悉く

少分涅槃に安堵せし

二、譬へば衣食に窮する人

友は喜びて美餐を饗し

客の酔ひ伏したるを見て

衣の袖に密に繫ぎ

我身は行事繁ければ

無量智世尊を禮讃す

覺るべき身と知らずして

無智蒙昧の過を悔ゆ

友なる大富長者を訪ふ

夜深く酒を酌み交す

無價の寶珠をその人の

心は人に殘れども

中夜靜に餘所に往く

三、後には獨り貪人が

別を告ぐべき友はあらず

諸方に流離顛沛し

僅の財を得て喜べる

四、かかる所にかの長者

會しきさまは依然たり

袖なる珠を放るれば

珠を懐に引き替へて

五、世尊が大慈大悲もて

願を植ゑ置きたまひしを

小智涅槃に慢心して

袂に珠を裏し持ちて

六、佛は常に誨したまふ

無上慧を得て成就すと

朝になりて醒めて見れば

淋しく宿を立ち出でて

袂の珠は見ず知らず

愚鈍は貪の慍ゆる

再びめぐり會ひ見れば

愚さを責め苦切に

貧人驚きかつ喜び

忍ち富裕の身と成りけり

我等を教へ無上慧の

覺らず知らず愚にも

餘を求めざりし我等こそは

貧苦に悩める人の如し

涅槃は成就の處ならず

今は佛語をよく信じ

因問

四、

袂なる珠を放る

嘆きかへすわしの山嵐なかりせば

衣のうらの玉を脱ましや

立ちかへり問はずばいかで唐衣

うらにかけたる玉も知らまし

いつかけし衣のうらの玉に

しらでうき世に迷ひきめらん

（性嚴法師）

醉のうちにかげし衣の珠をとも

昔の友に逢ひてこそぞ

王かけし衣のうらをかへしてそ

おろかなりける心ぞは知り

（赤塚新門）

六、

常に誨したまふ

常に願察向上

心を勵したまふ

第六卷四、第

十一章、四、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

四章、佛五、第

昔の願に甦り
莊嚴の事を承る

つぎつぎ作佛を許されて
我等が歡喜限なし

第十六章 二千の弟子授記さる

第十六章
二
仰ぐ所は唯如来一人は侍者一人は弟子共に仰ぐ如来を唯一の稱と仰ぎまゐらすこと應たさる事
法藏を護持し一多聞第一として記徳も記録も多く教の法字引また経典も多少は出来て居たと認るべし、經典を護る。

一 その時に、阿難尊者、羅睺羅尊者は「我等も授記を蒙らば、如何んが快からん」と思ひて、佛前に至り、佛足を禮拜して白す。「世尊よ。我等もまた應分の資格なからんや。我等仰ぐ所はただ如来にして、一切世間の天神諸人に知識さるる者なり。阿難は侍者として常に法藏を護持し、羅睺羅は佛の實子として孝行の模範たり、共に因縁淺からず。佛もし授記したまはば、我等の所願は成満せん。衆の望もまた然らん」。

二 初學了學の聲聞二千人もまた座より起つて、共に右肩を袒ぎ、佛前に到り、合掌して世尊を仰ぎ見、阿難、羅睺羅に倣つて、授記を請ひ、已つて一方に注

立みぬ。

三 佛は阿難に告げたまふ。「汝は將來六十二億の佛を供養し、法藏を護持することに依り、佛と成ることを得べし。名を山海慧自在通王如来佛世尊と號し、二十千萬億無量の菩薩を教化して、皆無上道に入れん。國を常立勝幢と名け、土地清淨にして留瑞の如く、代を妙音徧滿と稱し、佛壽は千萬億不可思議劫ならん。正法住世は佛壽に倍し、像法住世は正法に倍せん。阿難よ。山海慧自在通王佛の功徳は、十方諸佛の共に稱歎したまふ所なるべし」。

一、衆の僧皆聽けかし 持法者阿難は彼の世に

諸佛に親近供養して 行を具足し道を成じ

山海慧自在通王佛となり 妙音徧く世を救はん

二、國土は清淨莊嚴し その名を常立勝幢と曰ひ

菩薩は國に充満し 佛の威徳は世に震ひ

慈悲の無量なると同じく 佛の壽命も無量ならん

正法住世は佛壽に倍し 像法は正法に倍せん

國 佛
三
意の無量なると同じく一
かぎりなき命にならぬもなべて世の
物の無量なればなりけり
(後成)

無教億の衆生法威の中に 皆成佛の縁を結ばん

四 その時に、新發意の菩薩八千人は、皆心私に、「佛は諸の大菩薩すら受け難き授記を、今多くの聲聞にたまふ。これ如何なる因縁ならん」と疑ふ。佛はその心を知しめして、告げたまふ。「諸の善男子よ。我は昔、阿難と共に、空王佛の所に於て、同時に無上道の心を發しき。當時阿難は常に多聞を樂み、よく憶持し、我は常に阿難に問うて専ら勤行精進せり。この故に我は疾く無上覺を得たり。而して阿難は今我が弟子と成り、法藏を護持す。將來もまた諸佛の法藏を護持して、諸の菩薩を助くべし。これ阿難の本願にして、而も特殊の功なり。故に我は彼に授記せり」。

五 阿難尊者は面前授記され、目つ己が將來の國土の莊嚴を聞き、大に歡喜し、願て過去を思へば、無量百千萬億の佛の教、悉く腦裏に浮びて明なり。而も皆今の世尊の教に異らず。自ら佛の侍者として多聞憶持することは、昔より己が本願なることを識れり。偈を歌ふ。

一、世尊神通力をもて 我等が過去を照したまふ

思ひぞ出つる前の世の 無量諸佛の御教は

今の教に異らず

二、我今何をか疑はん 唯佛道に安住し

多聞憶持を樂みつゝ 己が使命を侍者として

佛の法を護持しまつらん

六 佛は羅睺羅に告げたまふ。「汝は將來、十世界微塵數の佛の出現毎に、常にその長子と生れ、孝行すること今日の如くし、後に佛と成ることを得べし。號を鷲七寶華如來佛世尊と曰ふ、國土の莊嚴、壽命の劫數、所化の弟子、正法像法、皆山海慧自在通王佛の如くなるべし。但し汝の成佛は、汝が山海慧自在通王佛の長子と生れたらん後なりと知れ」。

一、我太子にてありし時 羅睺羅はわが長子たり

我佛と成りしかば 汝今わが弟子となる

將來諸佛の代に生れても 常に佛の長子となり

一心に佛道を求めなん

因 偈

願らず一教に疑実と信ず

因

山海慧佛の從一阿難は佛の從弟
我か子羅睺羅と名をまはしにし

因得

密行一本より大道の善行であるが、それを外に現すと小道の相に見せて置く。羅睺羅は努めて佛の弟子たることを求むる修行せり。もうともには、いかにける衆のゆかりの海も、心でしらるる。

寂然として佛を見上る。木の梢より出でて、澄むべき月影。まづと知らずる秋風の聲。(平々時)

二、羅睺羅の密行は我のみ知る

行するにこそ衆の鏡

今佛道に安住して

後の踏七寶華佛なり

子と成りては子の道を

功徳は千萬無量なり

佛慧を習ふ汝が身は

七 時に、二千人の弟子は、その意正直に、寂然として一心に佛を見上れり。

佛は阿難に告げたまふ。「この諸人は、將來五十世界微塵數の佛を供養恭敬尊重し、法蔵を護持し、最後に同時に佛と成ることを得べし。皆同一號にして、寶相如來佛世尊と曰ひ、佛壽一切、諸方に於て、各一佛世界の教主となり、無量の聲聞菩薩を以て國を莊嚴せん。正法、像法皆悉く同等なるべし。」

- 一、この二千の聲聞衆は
 - 法を護りて道を修し
 - 何も寶相如來と曰ひ
 - 二、國士の清淨なることも
 - 國を莊嚴することも
- 無數の佛を供養して
- 同時に等正覺を得て
- 十方世界を教化せん
- 無數の聲聞菩薩ありて
- 佛の在世の永きことも

正像住世の久しきことも

三、諸の神通力をもて

一切衆生を引導し

各聲世間に同く聞え

八 二千入皆感激して、頌の歌ふ。

世尊は智慧の燈明なり

胸に溢るる歡喜は

二千入皆等しかるべし

種々方便の教を説き

皆佛道に安住させ

蓮華を説いて滅度に入らん

我等は按記の御聲を聞き

甘露に浴する心地

智慧の燈明一 佛教は智慧が根本なることは、何れも註せしが自分の智慧の鏡と自覺し佛の智慧を燈明としやうと感激するものは、善の理窟に誘ふ、智慧には慈悲もある之に浴する心地は變き信じ。

第十七章 持經訓、高原穿井の譬論

一 その時に、佛は樂王菩薩に因つて、八萬の居士に告げたまふ。「我は今諸の聲聞に按記し已れり。なほこの大會中の天神人、非人、及僧俗男女にして、聲聞道を學ぶもの、緣覺道を學ぶ者、或は菩薩道を學ぶもの、誰にてもあれ、もし佛

第十七章

三

この經一以上で蓮華の教は一箇
 一偈一句を讀むに依りて、彼々の佛の滅後を見るに、その正法世に
 住すること、若干劫に及べども、遂には滅盡す。これ世が佛を去ること遠く
 なるに従つて、邪智の論說恣に法光を蔽ひ、蓮華の體形を損ふがゆゑなり。さ
 れば、今説蓮華を如實に經に書き留め、わが滅度の後に於て、この經を持ち、
 以て正法を護らん事は道のため最も賢き供養なるべし。藥王よ。もし蓮華經の
 一偈一句を聞いて、一念隨喜せん者は、必ず無上道を成就することを得べし。
 況んや一偈一句を受持し、讀誦し、解説書寫し、經卷を敬ふこと佛を敬ふが如
 くし、種々の華香瓔珞抹香塗香燒香繒蓋幢幡衣服伎樂を供養し、若くは合掌恭
 敬せん者をや。その人は曾て十萬億の佛を供養して、已に大願を成就し、今ま
 た衆生を慰むがゆゑに、この人間に生れ來れるものなり。藥王よ。如何なる人
 か將來成佛することを得んと問はば、畏の如き諸人こそ將來必ず成佛すべしと

家主を慰むがゆゑに

これぞこのうき世のため

むまれ來て

かくは御法を説くことぞ

（後、成）

如來の使一持經者自ら父上の使
 言と思つて善いは愛めて至當で
 ある。若し法法空相を觀じても
 又は自身の願世を求めても如來
 の方を知らば蓮華とは成らず
 この経を讀むことも説く人も
 四方の佛の使の如しなり
 （傳教大師）

三

それにも増したり一法師を輕ん
 ずるやうでは教も益も弘まらず
 故に佛は極善したまふ。抑て實
 際問題として不仁憐なる俗惡僧
 あり之を感口するは法のため
 らずやと善い説もあらう。然ら
 ん然れども此所て善いのは眞の
 法師又は第二十八章回法師の獲
 證を感口してはならぬとなり。
 一對二つから佛と法師を共に重
 んすべし。

佛は自ら一佛滅度も佛は實在す
 り、第二十八章に詳説す

樂也も聽く
 一聲とて、そのてこそ耶
 かくに夜ふかき等はさめけれ
 （大情正公澄）

前に於て、蓮華の教の一語一句を聞いて、一念隨喜せん者には、我は直に按記
 すべし。

二 さて藥王よ。道は蓮華に依て世に住す。蓮華の法護られずば、無上の道は
 行はれまじ。我諸の弟子に授記して、彼々の佛の滅後を見るに、その正法世に
 住すること、若干劫に及べども、遂には滅盡す。これ世が佛を去ること遠く
 なるに従つて、邪智の論說恣に法光を蔽ひ、蓮華の體形を損ふがゆゑなり。さ
 れば、今説蓮華を如實に經に書き留め、わが滅度の後に於て、この經を持ち、
 以て正法を護らん事は道のため最も賢き供養なるべし。藥王よ。もし蓮華經の
 一偈一句を聞いて、一念隨喜せん者は、必ず無上道を成就することを得べし。
 況んや一偈一句を受持し、讀誦し、解説書寫し、經卷を敬ふこと佛を敬ふが如
 くし、種々の華香瓔珞抹香塗香燒香繒蓋幢幡衣服伎樂を供養し、若くは合掌恭
 敬せん者をや。その人は曾て十萬億の佛を供養して、已に大願を成就し、今ま
 た衆生を慰むがゆゑに、この人間に生れ來れるものなり。藥王よ。如何なる人
 か將來成佛することを得んと問はば、畏の如き諸人こそ將來必ず成佛すべしと

答ふべし。一切世間に尊まれ、今の如來の如く、限なき刀を以て、大に世を救
 ふことを得る者なり。これ大菩薩なり。何に況んや、この經を盡く能く受持し、
 種々に供養せん者をや。この人は過去に積み成せる清淨の業報を私せず、衆生
 のために願つて惡世に出で、廣く大法を演説せんとするものなり。かかる善男
 善女、若しよく竊に一人のためにも、蓮華經の乃至一句を説かんは、これ如來
 の使なり、如來に遣されて、如來の事を行ずる者なり。況んや大衆の中に於て、
 廣く分別して演説せんをや。之を眞の持經者とす、之を眞の法師とす。

三

藥王よ。もし現在の佛の前に於て、故意に一劫の間、常に佛を毀り罵らば、
 その罪甚だ重からん。然れども佛滅度の後、一言の惡口を在家若くは出家の蓮
 華經を讀誦する者に加ふる罪は、それにも増したり。藥王よ。蓮華經を讀誦す
 る人は、佛の莊嚴を以て自ら莊嚴し、如來の肩に負はれて、如來に守護されん。
 その人の至る所には佛おはす。向つて合掌禮拜し、一心に恭敬尊重讀誦し、佛
 を供養する一切の華香瓔珞抹香塗香燒香繒蓋幢幡衣服肴膳諸の伎樂、人中の珍
 天上の寶を以て供養せよ。この人の歡喜して蓮華經を説くを、須臾も聽聞せば、

必ず無上道を究竟することを得ん。

- 一、わが滅度の後の世に
 諸法を知らんと思ひなば
 佛智を得んと望みなば
 蓮華の經を持つ人は
 衆生を哀愍む心ゆゑ
 樂土を捨てて惡世に出で
 佛の道を習ふもの
 蓮華受持者を供養せよ
 持者を供養し己も持て
 生所に自在の力あり
 如來の救を被りて
 無上の法を説く者なり
 さる法師に値遇しなば
 佛に供養する如くに
 布施して須臾も道を問へ
 もし一言も惡口せば
 罪より重き罪あらん
 一劫杖を擧むる功德も
 功德にはよも及ぶまじ
- 二、蓮華の經を持つ人は
 衆生を哀愍む心ゆゑ
 樂土を捨てて惡世に出で
- 三、佛滅度後の惡世に
 合掌禮拜尊重し
 美膳天寶上衣服を
- 四、この經を讀み持つ人を
 一劫佛を惡口する
 罪より重き罪あらん
 一劫杖を擧むる功德も
 功德にはよも及ぶまじ
- 五、言辭を極め偈を盡し
 持經の人を讚美する
 最妙の色聲香味觸を
 この經を聞き大利を得よ
 蓮華は最も第一なり

目録

讀むる功德—功德とは世の徳と云ふこと自分か徳かあることのみではない、佛で功德は徳あるに由る蓮は法威に依る法威は蓮華に依る蓮華は持經者に依つて説らる。故に持經者を讀むるは大功德なり

六、八十億劫經るまでも
 蓮華受持者に供養して
 わが説法は多かる中に
 蓮華は最も第一なり

四

我が教は前に説かれたるもの、今説かるるもの、後に説かるることあらんもの、無量千萬億なり。而もその中に於て、蓮華は最も難信難解なり。我世に出でて、又しく秘して顯説せざりしを今説く。されば蓮華の經は佛滅後の寶典として諸佛の秘要を藏す。諸佛世尊常に守護したまふべし。尊重して信なき人に妄に分布する勿れ。この蓮華は佛の法力に即せざる事は悪なりと定むるがゆゑに、如來の現在すら、なほ怨嫉多かりし、況んや滅度の後をや。されど藥王よ。如來の滅後に、それよく蓮華經を書持、讀誦、供養し、他人のために説かん者は、如來の衣に庇護されん。十方諸佛もまたこの人を護念したまはん。是の如き人は、大信力、大願力、及諸善根力あらん。これ即ち如來と共に宿り、如來の御信任の手に頭を撫でらるる者なり。藥王よ。在々處處々、蓮華經の讀まれ、若くば誦へられ、若くば書かれ、若く

怨嫉多かりし—九億難など難も顯然。本經を信むる時ですら五人退座した。不取極まる。あれも不徳怨嫉の類だ。

衣に庇護され頭を撫でらる—亦手が母の腕に在るが如き庇護。これ護法者の安心立命の處。

如來の全身一 如來は滅したまは
す。第二十八章に詳説す。
禮拜供養一 御在世の親近供養に
相習する。これ蓮華の大事。
無上覺に近く一 第三十章に至つ
て更に詳説さる。

五

菩薩行を行じ得ず一 三位一心の
社會としては何處に向つて仁義
忠孝を行ふか目標も立たぬ。蓮
華体内に住せしめては法力も受
けず行の力は出ない。第六卷回
因熟成して考へよ。第三十三章
三に要あり。
體誦一 誦は經を愛て讀む誦は暗
誦する。體誦も誦誦して即然に
全身の體理に達することが必要で
ある。體誦は定修修習だ。誦誦を
聞いて分つたからとこれだけ切り
てもいけない。讀めば讀むほど善
い。文々に蓮華の相を見よ。一
通誦を厭つて摘要を讀むことも
極善である。本經全体が已
に摘要である。以上皆悉くは要
約すれば蓮華は思慮備極を失ひ
迷信に陥る。少くも法師なら
んものは通誦せよ。素人に聞か
しめられぬやうにお誦さんでは

仕方がない。

六

三方軌一 本文の通りで餘味は分
つて居るが聲を産と云ふ名義を
與りに蓮華三軌の家室に住に配す
れば、それも説明法の一策だと思
へる。即ち法は諸佛室室の中よ
り來る大慈大悲なりを思ひて
空す。法は衆生の発露心に至
りて庇護す之を信じて忍辱の力
を出すを空す。法は菩薩所行
の處に住して如來の廣大の智慧
を示す此に 居するを空す。
證じて言へば蓮華に充滿せる如
來の法の中に住する者は三軌に
叶ふなり。

寄國に在りとも、多用を御身
れば餘國にも住かれるが同時
此國の法師をも譲り下さる刻々
空す。釋尊。つまり佛は一切處
に遍在して法力を行使したまふ
蓮華の爲まり。法師之を信じて
禮張れ。第二十八章に精し

ば在らん所には、皆高廣嚴飾せる七寶の塔を起てよ。この中には佛の舍利を祀
らすと雖も、已に如來の全身あらん。一切の華香瓔珞鬘蓋幢旛伎樂歌頌を以て
供養し、恭敬尊重讚歎せよ。この塔を禮拜供養するは、即ち如來を禮拜供養す
ると同然なり。是等の人は皆無上覺に近ける者なり。

五

藥王よ。在家出家の人にして、如來の滅後、菩薩行を行ぜんと思ふ者、も
し蓮華經を見聞し、讀誦し、書持し、供養すること能はずんば、これ未だよく
菩薩行を行ずる人と謂ふことを得ず。たゞ蓮華經を聞くことに依り、始めて佛
を知り、法力を受け、能く菩薩行を行じ得るなり。もし蓮華經を聞いて、信解
受持せば、即ち無上覺近きにありと知るべし。譬へば旅人あり。高原に於て渴
乏し、水を求めて井を穿らん、乾ける土を見る間は、水を去ることなほ遠し。
然れども、力エして止まず、うたた濕土を見、遂に泥に達せば、決定して水の
近きを知る。行者もまた是の如く、未だ蓮華經を聞かず、解せず、修せざる者
は、無上覺を去ることなほ遠し。然れども若し施功止まず、よくこの經を聞解
思惟修習することを得ば、無上覺は決定して近きに在りと知るべし。如何とな

れば、一切菩薩の求むる無上覺の道は、皆この經に屬す。但し蓮華經の藏は深
固幽遠にして、よく達し難きがゆゑに、佛は方便を以て衆生を引導し、教化し
て根力堅固の菩薩を成就し、開示して到ることを得ざるなり。この經は方便
の門を開いて、眞實の相を示す。藥王よ。わが滅度の後、苟も菩薩たらん者、
もし蓮華經を聞いて、驚疑怖畏せば、これ新發意なり。聲聞たらん者、もし二
の經を聞いて、驚疑怖畏せば、これ增上慢なり。法師とも持經者とも成ること
を得ず。

六

藥王よ。善男善女もし如來の滅後、於て、法師として四衆のために蓮華經
を説かん者は、三の方軌を守るを要す。如來の室に入り、如來の衣を着、如來
の座に坐すべし。如來の室とは大慈大悲なり、如來の衣とは柔和忍辱なり、如
來の座とは諸法空觀なり。この中に安住し、不懈怠の心を以て、諸の求道者の
ために、廣く蓮華經を説け。我もし餘國に在りとも、化の四衆を集め、この法
師の説法を聞かすべし。この衆はその教を聞いて信受し、隨順して並ふことな
けん。法師もし空閑人なき所にて、この經を説かば、我は天人等を遣して聽聞

因傷

解怠を捨て精進し、精まれば蓮華經に値へぬはねば菩薩行は出来ぬ。堅固にも成道の見なし。精進してこの値ひ難きに値ふ人は幸運である。第二十章の國王第三十三章の不韋菩薩の如し。

させん。また法師は刻々我を見ることを得さすべし。法師もし經の句讀を忘失せば、我直に教へて通利させん。

- 一、懈怠を捨て念々に蓮華經には値ひ難し
- 二、沙漠の旅人飢渴に迫り乾ける土を排く程は倦まず弛まず努力して濕れる土泥に見ふときは
- 三、蓮華經に値はなくはこの深經は諸經の王聞いて思惟する人は開きて泥土の大道に入り
- 四、さてこの經を持つ人は柔和忍辱の衣を着

精進む勇氣のなき者は況んや信受は覺つかなし水を求めて井を穿らん求むる水はなほ遠し漸く深く掘り進み水は近きに在りと知る佛智は未だ逆なり水を含めぬ泥土に譬ふ乾土の如き小道を佛智の水を汲む者なり大慈大悲の室に入り一切空の座に坐して

佛を念じて忍べし、これから第二十二章難陀なる菩薩が出る。無量劫々一佛は無量劫の壽命あることを要する。第二十八章に詳説あり。

五

變化の人を遣し、佛が御自身に變化の人に成らると見るも可神通力

寂滅人なき所、とみ人のあとなき紫の巻にもさしくる月の光をさます。

六

我を見ん、持經者は佛を見ること云ふことは、佛に到る所に説かれてある。佛は本書の各節を詳説したものと見て宜しい。

- 畏れ憚る所なく悪口罵詈され或はまた佛を念じて忍べよかし清淨堅固の身を現じ蓮華の法師を守護すべし
- 五、佛滅度の後の世に我は化の憍尼僧厚く供養をなさすべし刀杖瓦石の難あらば衛護と成してよく助けん蓮華經讀む聲のせば章句を忘れ讀む聲まは
- 六、持經の徳を具するゆゑ獨り讀經する時も

方便分別して説けよ刀杖瓦石の難あるとも我は千億の國々に無量劫々法のため蓮華經を説く人あらば清信士女を遣してもしも法師の身にかかる忍ら變化の人を遣し寂滅人なき所に我尤明の身を現さん教へて直に通利らせん四衆に説法する時も法師は常に我を見ん

佛もたまひき。又しきに亘る說法教化の後、滅度に臨み、天人大眾中に於て、諸の弟子に御邊言ありけるは、『汝等わが滅度の後、我を供養せんと思はば、一の大塔を起てよ。我が全身その中に宿らん』と。かくて多寶佛は誓願の如く、十方世界在々處々、蓮華を説くものあれば、かの寶塔その前に涌出して、中より讃めて、『善哉』と言ふ。大衆説よ。今この寶塔はそれなり。

三 大衆説菩薩は、如來の神力に依り、重大なる事を請へり。『世尊よ。願くば我等に多寶如來を見上ることを得させたまへ』。

善男子よ。多寶佛はまた深重の願あり。もし我が寶塔が蓮華を説く佛の前に出でたらんとき、四衆がわが身を見んことを望まば、まづ十方の諸佛が盡くその佛の所に來り集りたまふを待ち、然る後わが身を現さん』と。大衆説よ。この故に我今諸佛を十方より盡く招待すべし』。

願くば世尊よ。我等はまた諸佛を見上り、禮拜供養せんことを望む』。

四 その時に、佛は眉間白毫相の一光を放ちて、東方五百諸億無量の世界を照したまふ。その國土は曠野を敷き、寶樹寶衣莊嚴し、徧く寶幔を張り、寶網を

羅ふ。諸佛はその中に於て大妙音を出して、諸法を説きたまひ、無量百千萬億の菩薩亦衆のために法を説く。南方、北方、西方、四維上下、佛が順次に照したまふ所、皆見の如し。

是等十方國土の諸佛が、各々諸の菩薩に「善男子よ。我今娑婆世界に往き、釋迦牟尼佛並に多寶塔を供養すべし」と告げたまふに、娑婆世界は即時に變じて清淨と作る。珊瑚を地となし、寶樹莊嚴し、金繩八道を界し、諸の聚落村營城邑大海江河山川林藪なく、大寶香を燒き、妙華徧く布き、寶の網幔を張り、諸の寶鈴を懸く。ただ絶信の衆を留め、四惡趣及諸の人天を退けたり。

時に、諸佛は各一人の大菩薩を隨へて、共に娑婆世界に來臨あらせらる。高五百里の寶樹、枝葉華果忽ち莊嚴す。一々の寶樹の下に師子座あり、高五里、大寶を以て校飾せり。諸佛は各この座に昇りて、結跏趺座したまふ。かくてこの娑婆三千大千世界は諸佛の徧滿する所となる。然もこの諸佛の數は、未だ十方諸佛中の僅に一方の分にも足らず。

釋迦牟尼佛は、十方の諸佛を残らず迎へ容れんがため、八方に各二百萬億無

量の三千大千世界を變じて、前の如く清淨莊嚴となし、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅の類を去り、人天を退けたまふ。地は瑠璃となり、寶樹整列し、枝葉華果嚴飾す。一々の樹下に師子座あり、種々の寶を以て莊校せり。また河海、山嶽、一切の險なく、娑婆世界と遙ける平正の一佛土となり、寶香を燒き、寶華を布けり。佛はなほも狹しと思しめしけん、また八方各二百萬億無量の三千大千世界を變じて、前の如く四惠趣を去り、人天を遷移し、清淨平正の通一佛土となし、師子座を設け、寶香を燒き、寶華を布かたまふ。

時に、東方百千萬億無量無數の世界の諸佛が皆來集したまへば、西方、南方、北方、四維上下の百千萬億無量無數の世界の諸佛もまた、順次に盡く來集して、各寶樹下師子座に坐したまふ。今はこの娑婆世界及八方に擡げられたる三千二百萬億無量の三千大千世界は、盡十方來無量無數の諸佛の徧滿する所となる。

五 諸佛は各寶樹下師子座の上より、皆侍從の菩薩に告げたまふ。善男子よ、寶華を擡に滿てよ。汝靈鷲山の釋迦牟尼佛の所に詣りて、わが辭を言上せよ。佛は病癒なく、氣刀安樂にましますや、菩薩聲聞眾は皆安穩なりや」と。ま

諸佛來集し、寶華と同様証明のため來發せらるる釋迦牟尼佛には、分明諸佛とあるが、それは第二十八卷まで明さぬがよい、今明しては之處にあらぬ。

た寶華を敷じて敬つて白せ、彼所の某佛が、この寶塔の開かれんことを望むと。

菩薩は各往いて、是の如く問訊供養し、かつ寶塔の開扉を請ふ。

釋迦牟尼佛は、十方の諸佛が悉く來集して、師子座に坐したまひ、皆使を以て敬を表し、寶塔を開かんことを求めらるるを聽しめして、座より起つて虚空に昇りたまふ。一切の四衆は起立合掌して、一心に佛を仰ぎ見る。佛は右の指を以て、七寶塔の扉を開きたまふ。その音響は關鑰を抜いて大城の門を開くが如し。

この時一切の眾會は、多寶如來の塔中師子座に坐し、禪定に入れるが如きを見より、また「善哉善哉、釋迦牟尼佛。快く妙法蓮華を説きたまふ。我はこの法を聞かんがため此に來至せり」と言ふを聞く。

四衆等は、過去無量百千萬億劫に滅度の佛が、全身現存して、是の如き師子吼をなしたまふを見て、未曾有なりと歎じ、寶華を多寶佛及釋迦牟尼佛の上に散す。

敬を表し、諸佛はかくして無言のうちに諸佛を證明したまふ。

寶塔の扉を開く、多寶佛の塔を釋迦佛の開く。

半座を譲る。多寶佛の座に釈迦佛が坐す。

高處に坐したまふ。佛の高處は應義的には第二十八卷に於て極まり空願的には第三十四卷に於て極まる。此所は唯高五百里と云ふだけ。尊くと云ふ美は勿論ある。

大衆を虚空に在く。二佛と大衆は高五百里十方佛は高五里廣く大く説法する配置なり。卷末まで續く。正編を聖山會と云ふこの精舎を虚空海會と云ふ。實にドラマチックだ。この不思議大娑婆は彌陀だ。トテも高天原天の宮に居るのではない神話的である。文を要更し得ざる人は大衆大衆を假に説するに足らぬ。拘てこれには多勢の佛がお集りに成つた。一評この中で一評佛の集りとは心か我等の佛は誰にせうか。高處に迷惑する。追つて解衆の集會を待たう。

六 その時に、多寶佛が、寶塔の中に於て、半座を釋迦牟尼佛に譲りて、「釋迦牟尼佛よ。この座に就かせらるべし」と言へば、佛は即時に塔中に入り、その半座に結跏趺坐せさせたまふ。時に、大衆は二如來の一所に寶塔師子座に結跏趺坐しますを見上り、各思ふやう、「佛は高處に坐したまふ、願くば我等も俱に虚空に處せんことを」。

佛はそれを知しゆして、神通力を以て、大衆を皆接せて虚空に在き、偈を以て告げたまふ。

- 一、尊きかな多寶佛 滅後久しくおはせども
- 二、運筆の放は過み難し 來りたまふは法のため
- 三、また十方の國々より 彼の世無量劫までも
- 四、供養妙なる國を捨て わが説法を聞かんだの 無量の諸佛集れるも
- 五、幾代久しく大法の 多寶如來を證せんため
- 六、この客人は證明佛 遙々此に來ませるは

- 一、幾代久しく大法の 榮あれとぞ思すまゐる
- 二、この客人は證明佛 今わが神通力を以て
- 三、娑婆世界を八方に擴げ 福徳缺ける衆を退け
- 四、寶樹を莊飾り地を清淨め 師子座を設けて迎へしかば
- 五、十方より皆集りて 威儀莊嚴に坐したまふ
- 六、その様清き池の面に 蓮の華の咲き布く如く
- 七、赫耀たる光明は 暗夜を照す大炬の如し
- 八、妙香普く薰じ渡り せよ風吹きて木々の葉の
- 九、靡かぬ亦も委きまでに 衆生の歡喜限なし
- 十、蓮華を永々に世にとどめ 人の心を安めんと
- 十一、諸佛は願ひたまふゆゑ ことに來臨ありしぞかし
- 十二、諸人いかでか道のため 法を護らぬよしやある

第十九章 持經者勸募の勅

式事は整ふ。虚空會開會式諸佛
 持立會証明の儀整ふ。是より
 諸佛の御前にて持經者を募りた
 まふ。
 この娑婆國土に於て一佛敎はこ
 の娑婆にこそ要求したまふ。志
 願者若し他の國土に申出づる
 事は不合格であらう。

一、式事は整ひぬ。その時に、佛は大音聲を出して、普く四衆に告げたまふ。
 「我多寶佛及十方來集の諸佛の御前に於て持經者を勸募す。誰か我が滅度の後、
 この娑婆國土に於て、廣く蓮華經を説かん者ぞ。志あらば速に出でて誓願せよ。
 如來はやがて滅度に入るべければ、今は正に時なり。適者に此經護持を囑し、
 永く傳へさせん。」

- 一、わが滅度の後の世に 蓮華經を護持讀誦し
- 道を弘めん者は誰ぞ 今佛前に出でて誓へ
- 二、多寶如來は古佛なれど 護法の誓あるゆゑに
- なほ師子吼してわが説法を 譚の稱へさせたまふぞや
- 十方の諸佛もまた 此の心にておはすなり
- 三、いで諸の善男子 大誓願を發せかし

令法久住の御ために

持經を誓ふ勇者は

我と多寶を供養する

眞の佛子菩薩なり

四、多寶如來が寶塔に乗り

十方遊歴したまふも

諸佛の來集したまふも

妙法蓮華のためなるぞ

さればこの經を説く人は

諸佛を拜みまつるなり

五、さりながら善男子

これ難事なりよく思へ

大願堅固ぞ須要なる

餘の諸の經典は

その數限なけれども

それ等を説くは難からず

須彌大山を手にとりて

他方の國土に擲たんも

足の指もて大千界を

遠く他國に蹴やらんも

自ら有頂の天に立ち

衆經を演説せんことも

齊しく難きことならず

佛の滅度したまひてし

後の惡世にこの經を

説くことこそは難重なれ

六、天空海を掌に握り

持ち運ばんも難からず

三、
 令法久住。正法をして久しく世
 に住せしむるは菩薩の尊稱。高
 道徳である。是が出来れば即
 ち佛性を供養したいといふ菩薩
 の心境をも満足する訣になる。
 當世一系寶許無時と言ふ事に思
 ひ合せよ。

四、
 説く人は佛を説く。前項に
 も持つ人は我を供養する佛子と
 ある。説くも持つも對照するに
 は是で一對二になる。佛子とし
 て常に佛を説くことは輪轉持教
 の一なり。

五、
 大願堅固ぞ須要。次の第二十
 二には特に寶例を説いてある。
 この經一巻を出す事であるが佛
 が蓮華經を手にして説法された
 訳ではない。今までの御説法の
 経巻に勝られたと假定して此經
 と云つて持經を勧めたまふので
 ある。殊に本項、餘の諸の經典
 はその數限なけれども、など、
 如何にも善惡で輪轉を惡の實例
 の如く見ゆれば、佛は天領り第十
 七章(四)節六、我が説法は多か
 ら中に蓮華經も第一なりと
 同じ事である。經の中でこの經
 と云ふは一切經を通じてこの例

